
魔術師 浅野俊介

立花祐子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師 浅野俊介

【Nコード】

N1012Q

【作者名】

立花祐子

【あらすじ】

超能力者「浅野俊介」は、思わぬことからタレント事務所に見出だされ、プロのマジシャンとなった。だがそんな浅野の命を何故か狙う悪魔達の影が…。悪魔を持つ北条圭一と圭一の飼猫「キャトル」に守られながら、浅野は悪魔達との戦いにのまれて行く…。
他サイトにも投稿しています。

第1章・魔術師誕生・

「社長！社長！聞いて下さい！」

きたじよ「はい」
北条圭一が、元アイドルが経営するタレント事務所「相澤プロダクション」の社長室にノックもせずに飛び込んだ。

中で打ち合わせをしていた、社長の相澤励あいざわれいと副社長の北条明良きたじよあきらが驚いて圭一を見た。

こんなに興奮している圭一を見たのは初めてだった。

「あ……すみません。会議中…」

「いいよ、圭一。どうしたの？」

相澤が明良と顔を見合わせて、笑いながら言った。

圭一は、副社長北条明良の養子であり、弱冠20歳でオペラを歌うトップアイドルである。

「あの…今度、うちのバーのマスターになった浅野さん、マジシャンなんですよ！」

バーとは、プロダクションビルの7階にあるタレント・社員専用のバーのことである。

「マジシャン？」

相澤が驚いて言った。

「面接の時はそんなこと言ってなかったぞ。カクテル作るのが得意としか…」

「今、ちょっと見せてもらったんです。すごいんですよ！コップに水を入れて、そのままお湯にしちゃったんですよ！」

「は？」

2人はきよとした。そんなばかなことができるはずがない。

「圭一…最近疲れ気味じゃ…」
「ほんとなんですって！！！」

明良の言葉を遮って、圭一が言った。これも珍しいことだ。

「バーに来て下さいよ！！目の前で見せてくれますから！」
「わかったわかった。…行くか？明良。」
「ええ。行ってみましょう。」

相澤と明良は立ち上がった。

…

圭一の言うことは本当だった。

目の前で水を入れたコップをカウンターに置き、黒の半そでTシャツに、黒のスリムジーパンを履いたマスターの浅野俊介あさのしゅんすけが、手を握ったり開いたりしながら、強く念を送るような仕草を見せると、1分程度で湯気が出てきた。

「…確かに水を入れたよな？」

「はい。水でした。」

「なんでお湯になるの？」

「?????」

その相澤と明良の会話に、圭一が吹き出した。浅野も笑っている。

「…ねえ浅野君。これって、ちゃんとタネがあるの?」

「もちろんありますよ。でも教えられません。」

「まあそうだよなあ…まるで超能力みたいだ…」

相澤が腕を組んで考え込んでいる。

「先輩…私達のような凡人が、タネあかしはできませんよ。」

明良は同じ年の相澤を先輩と呼ぶ。アイドルだった時の癖が今だに直らないのだ。

相澤が首を振った。

「違うんだ。…浅野君、うちと自由契約結ばない?」

「は?」

浅野は目を見開いた。明良が「なるほど」と言った。圭一が嬉しそうにしている。

「浅野さん!プロのマジシャンになりましたよってことですよ!」

「えっ!?…いや…それは…」

「営業はこちらでやるから。君はマジックの腕さえ磨いてくれればいい。どうかね?」

「浅野さん!やりましょうよ!」

「…ちよつと…ちよつと考えさせて下さい。」

「構わないよ。じゃ、それまではバーのマスターの方お願いね。」

「はい!ありがとうございます。」

浅野はほっとしているが、圭一は今決まらなかったことに不満なようだ。がっかりしたように肩を落としている。それを見た明良が笑いながら、圭一の肩を叩いた。

……

「…えらいことしちゃったなあ…」

浅野は何故かプロダクションビル裏手の非常階段の3階部分にいた。

「サービス精神旺盛なのが、俺の悪いところだよな…」

そうため息をついていると、キジ柄の子猫「キャトル」が駆け上がってきた。

「やつぱり来た。」

キャトルは浅野に向かって突進してきた。

「待て！子猫ちゃん待っててば！！話を聞いてくれ！！」

キャトルはためらうことなく、うなり声を上げながら浅野の顔に飛びついた。

「…やつぱり、許してくれないのね…」

浅野はキャトルの体を持ったが、このまま引きはがせば顔に傷が残ってしまう。体を持ったまま浅野はしゃべりだした。

「あのね子猫ちゃん。あれは俺も反省してるんだ…でも、落ちるとは思わなかったんだよ！」

キャトルはまだうなっている。

「圭一君が危ない目にあつたのを、後で聞いて反省したんだ。…気がついていたのに、知らんふりをしたのは悪かつたってば…。」

キャトルのうなり声が止まった。そして力を抜いたのを感じ、浅野はそっとキャトルをはがした。そして胸に抱きしめた。

「…本当に悪かつたよ。ごめんよ。」

キャトルが「にゃあ」と鳴いた。

「あれかい？あのスタジオの照明器具が緩んでいたのは、前にあつた地震の時に緩んでいたんだ。もちろんその後、スタッフがチエックしたさ。でもあの器具だけ見落としてしまった。…それから1週間経って圭一君がその緩んだ照明の下で歌った訳だ。」

その時圭一は、落ちてきた照明器具が頭に直撃し、生死をさまよつた。

圭一の飼い猫であるキャトルが怒っているのはそのためだ。

キャトルはまたうなり声をあげた。

「だからっ！！僕だって、危ないと思つたんだよ！でもさ。あの時僕はただ、バイトでラーメンを配達に行つただけなんだ。…ラーメン持ってきたバイトが「あそこの照明緩んでますよ。」って言ったところで、誰が信じてくれる？」

キャトルのうなり声が止まった。

「…たまたま、ここでバーのマスターを募集してて…圭一君の元氣な姿を見に来るつもりで面接受けて、受かってしまつてさ。自分でもびっくりなんだ。」

キヤトルが「にやあ」と鳴いた。

「うん…それで圭一君の顔見て、なんかお詫びがしたくてさ。マジックちよつとやってみたの。…したら、プロのマジシャンにならないかだつて…」

またキヤトルが「にやあ」と鳴いた。

「なれば？つて簡単に言うけどさ…。俺、師匠から危険なマジックをした罪で追放された身なんだ。…僕がここと契約してテレビに出たりしたら…今の師匠のお弟子さん達に何言われるかわからないし…ここにも迷惑をかけるじゃないか。」

キヤトルが「にやあ？」と語尾を上げて鳴いた。

「どんなマジックつて…美女を一瞬で火だるまにして…一瞬で火を消すマジック…」

キヤトルの目が大きくなった。

「火だるまに見せてるだけで、実際は火なんて使つてないんだけど…。超能力者だなんて言つたらバッシングすごいから、マジックだつて言うしかないじゃない。本当はタネなんてないのに「どうやったらそんなことができるんだ」つて、師匠に詰め寄られてさ…。「服に細工をして、本当に火だるまにしちゃいました」つて言うしかないかつたんだよ。そしたら危ないから追放だつて…」

キャトルが自分の鼻を浅野の鼻につんとついた。

「あ、許してくれるんだ。良かったよ。」

浅野が笑った。キャトルがにこにここと（なわけはないがそんな感じの表情を）した。

……

翌日夜 -

相澤と明良がバーに入ってきた。

「お疲れ様です！」

浅野が言った。プロダクション内のバーなので「いらっしやいませ」ではない……と、マニュアルに書いてある。

「！……社長、副社長！お揃いで……」

浅野が言った。

「口説きに来たんだ。」

相澤がそう言ってカウンターに座ると、浅野が「女の子をですか？」とまじめに尋ねた。
相澤と明良が笑った。

「社長が、自社の女の子を口説く訳にはいかないだろう。」

浅野が「すいません。」と言って頭を掻いた。

3人はしばらくたわいもない話をした。
話が途切れた時、相澤が口を開いた。

「浅野君は25歳だったね。」

相澤が2杯目のビールを飲みながら言った。

「…はい。」

「…そろそろ口説きに入るけどさ。…浅野君は、そんな実力がありながら、どうしてプロのマジシャンにならないんだい？」

「…はあ…」

浅野は困ったようにうつむいた。

「実は…マジックの師匠から追放されたんですよ。」

「！？…どうして！？」

「アシスタントの命にかかわる…危険なマジックをしましてね。追放されました。」

「…人が死んじゃったの？」

「いえいえ。傷一つつけていません。でも見た目には確かに危険なんですよ。」

「…どういう？」

「美女の火だるまショー」

「！？」

相澤と明良が驚いた。

「火だるまにするのっ!？」

「…確かにあればやりすぎました。でも、アシスタントには火傷もさせないし、熱さも感じさせないんです。見た目が危険なだけなんですよ。」

「そんなことできるのか…」

相澤がまだ驚いている。明良が相澤に言った。

「…だけど困りましたね。…追放されたとなると…簡単にはテレビには出せませんよ。」

「でも師匠に追放されただけで、司法的にはなんの問題もないわけだろ? いいんじゃないの?」

相澤が浅野に向いて言った。

「それは…そうなんですが…。師匠の先輩弟子から、何か嫌がらせをされないか心配なんです。こちらにもご迷惑をかけるかもしれません。」

「それは構わないよ。」

「は?」

「構わないって。嫌がらせてどんなのかわからないけど…警察沙汰になるんなら、明良の知り合いの刑事さんに頼むし、弁護士もいるしさ。」

「…はあ…」

「よし、決まり!! 君は今から、プロのマジシャンね! 本名が嫌なら、何か考えてくれたらいいよ。」

「…いえ…やるなら…本名で…」

浅野が何かを決意したような表情をした。

「…いい顔してる。」

相澤にそう言われて、浅野は我に返って笑った。

…

翌日

（こりゃ、驚いたな…）

と浅野は思った。ずっとエレベーター直行で7階のバーへ行っていたので、ビルの中を歩いたのは初めてだった。

掃除が行き届いているだけでなく、空気も空間も清浄されている。

（でっかい教会にいるみたいだな…でもお札とか、クロス（十字架）とか置いてないしな…）

食堂に行くと、圭一が窓際でコーヒーを飲んでいた。

浅野はほっとして、圭一に近づいた。

「浅野さん！」

圭一が気づいて立ち上がった。

「ゴメン。僕もコーヒー飲みたいんだけど、どうすればいいの？」

浅野がそう言うと、圭一はカウンターへ案内してくれた。

浅野は一口コーヒーを飲んで「おいしい！」と驚いた。
隣で圭一がニコニコと浅野を見ている。

「美味しいでしょ？特別なコーヒーメーカーで作ってますから。」
「おかわりOKだっていうから、美味しくないと思い込んでいたけど…。」

浅野が感心している。

「またランチとかも食べてみて下さい。うちのは味も栄養もばつちしですから。」

「さつき、食券の値段見たけど…あんなに安くて大丈夫なのか？」

「社員食堂ですから、半分はプロダクションが負担しているんです。研究生にも独り暮らしの子が多いから、栄養バランスを考えた食事を取らさなくちゃならないって、父さんがメニューや材料からレシピを考えたんですよ。」

「父さんって…副社長だね。」

「はい。…僕、養子ですけど…」

「それは知ってる…っと…」

浅野が慌てて口を抑えた。圭一が不思議そうに浅野を見た。

「…副社長から聞いたんだよ。」

「そうでしたか。」

圭一が微笑んで浅野を見た。そして前の窓に向き直り、コーヒーを一口飲んだ。

（よく副社長と出会えたよなあ…。出会えなかったら、こいつの人生最悪だったかも…。）

圭一の過去を見た浅野は、圭一の横顔をまじまじと見ている。すると、びくつと体を強張らせた。

「？浅野さん、どうしたんです？」

「えっ！？…いや…なんでもない…」

浅野はそう言っ、慌ててコーヒーを一口飲んだ。

……

「まいったな…」

浅野はプロダクションビルの非常階段にいた。今日は2階部分だ。子猫キャトルと会いたい時は、この非常階段に来ることにしている。キャトルも浅野がここにいと、ビルの中でも察知して来てくれるのだった。

（圭一君にはルシファー並の墮天使がついてる…。今まで何もなかったのかな…）

キャトルが駆け上がってきた。

「待ってたよ、キャトル。」

浅野がそう言っ、キャトルはひょいと浅野が寄りかかっている手摺りに飛び乗った。

「キャトル…器用だな。」

キヤトルは非常階段の手摺りにふらつきもせず座っている。

「…お前のパパさ、悪魔つきって知ってた？」

人の過去を透視できる浅野は、キヤトルが圭一の子どもとして産まれるはずだった魂だという事を知っている。

キヤトルがうなった。

「わかつてるって！悪魔っていつても、ちゃんと分別のある墮天使だよ。」

神に逆らって墮天使となったルシファアの名はださなかった。キヤトルが唸り声を止めた。

「なんであんな素直でいいパパに悪魔がついてるのかな。」

キヤトルは首を傾げた。（本当に傾げた。）

「お前：パパ守ってやらないとだめだぞ。悪魔に乗っ取られたらえらいことになる。」

キヤトルが「うー」と言った。

「悪魔って言っても元天使だから、大丈夫だとは思っけど…。念には念をだ。」

キヤトルがうなずいた…わけはなく「にゃあ」と鳴いた。

……

イリユージョンショーの構成がほぼ出来上がった。

今回は浅野の希望もあり、無料でショーをすることになった。

そして会場は、社長の相澤が衝動買いした閉鎖されたアトラクション跡地の中にある、観客席に囲まれた大きな池である。

池の中心にはステージがあり、以前はいろんなアトラクションがされていたところだ。

「あのアトラクション跡地買ってよかったよー！」

社長室で、相澤が嬉しそうに言った。

明良がうなずいた。

「最近、使っていませんでしたからね。」

「今回は、火と水のショーというわけだな。」

「ええ。いきなり大がかりなことをするようですが、大丈夫でしょうか…。」

「浅野君もちゃんと考えていると思うよ。彼に任せて我々は待つだけでもいい。」

相澤の言葉に明良が「そうですね」とうなずいた。

……

「何も考えてないけどな…」

浅野は机にひじをつき、ぼそつと呟いた。

構成の書かれた紙を見ていた圭一が、その浅野の言葉に顔を上げた。

「え？」

「いやいや、こっちの話。」

「火は実際に使わないにせよ、すごいですね！映像だけでこんなことができるんだ…」

「まあね。映像技術の発展のおかげで、いろんな仕掛けを作ることができるようになったよ。」

…これは大ウソだ。本当はすべて浅野の得意な術である。

「ただ1つだけ、圭一君。」

「？はい。」

「アシスタントをお願いする上で注意事項がある。」

「！…はい。」

圭一は構成表をテーブルに置いて、背筋を伸ばし浅野を見た。

「映像と言っても、その映像は君の体にまわりつくものもある。本来は熱さを感じないんだが、映像の機械が暴走すると、映像も熱を持つんだ。」

「！…！…そんなことがあるんですか！？」

浅野はもつともらしくうなずいた。

「技術は発展しても、なんらかの欠陥はあるんだ。完璧というのは難しい。」

「…なるほど…」

…圭一が納得してくれたが、これも浅野の嘘である。

浅野の術が生み出す炎は決して人には危害を加えない。…だが、浅野に敵対心を持つ者がこの術に手を加えると、炎のように物を焼くことはないが、熱を持つ。

その熱さは、術を持たない一般人には、1分も耐えられない。…浅

野が心配する嫌がらせとはこのことなのだ。

浅野の師匠は凡人のマジシャンだが、弟子には何人か超能力者^{エスパー}が混じっていた。浅野が恐れるのは、この能力を持っている先輩弟子が自分のシヨウを邪魔しに来ることである。

「もし圭一君が熱を感じたら、私にぶつかるとなり抱きつくなりしてくれ。それで炎の映像は消える。それをしないと大火傷するかもしれないからね。」

浅野は大げさに圭一に言った。

圭一は「はい」と覚悟を決めたように言った。

（だけど、こいつ悪魔持ちだから、先に悪魔が助けるかもな。）

浅野はそう思った。その時、キャトルのうなり声が頭の中でした。

「あつ！ごめんなさい！」

「？」

浅野がいきなり謝るので、圭一が不思議そうな顔をした。

「浅野さん？」

「あつ！いやその…キャトルがほらっ！！」

「キャトル？」

浅野は足元にいるキャトルを抱き上げた。

「！？キャトル？いつの間に…」

実は浅野が慌ててキャトルを移動させたのである。

「…間違つて蹴っちゃってね。…ごめんよ。キャトル。充分に気をつけるから大丈夫だよ！」

浅野がキャトルを抱いて頬ずりをした。キャトルは迷惑そうな表情をしている。

…その頃、相澤プロダクション専務の北条菜々子きたじゅう ななこがキャトルの専用かごを覗き込んで驚いていた。

「…キャトル…ここで寝てたわよね…？…どこに行ったのかしら？…？」

菜々子はそう言って、開いていないドアを見た。

…

翌日 -

2人の消防署員は驚いて、炎に包まれている浅野を見ている。アトラクション等で火を使う時は、消防署の許可がいる。

「3分で消えますから、検証するなら急いで下さい！」

炎の中で、浅野が叫ぶように言った。

消防署員の1人が炎に触れてみた。確かに熱くない。映像を立体化したというのは本当らしい。しかし仕組みがまったくわからない。そしてもう1人に「触れてみる」と言った。もう1人の消防署員もこわごわ炎に触れる。

「全く熱くないな…。すごい…！」

消防署員たちは驚いた表情で顔を見合わせた。

「消していいですか？」

浅野の声に消防署員が「いいですよ！」と答えた。

浅野の手刀が炎を半分に切るように、上から下へと移動した。そして炎が真つ二つに割れ、浅野が両手を広げたと同時に炎が消えた。

「すごい…！浅野さん！」

圭一が拍手をしている。傍にいる相澤と明良はただ呆然としていた。

「許可はいらないですね？」

浅野が消防署員に尋ねた。

「はい。映像だと確認できましたので構いません。…で、ショーはいつやるんですか？」

消防署員が尋ねた。

「え？今、許可はいらないって…」

我に返った相澤が言った。

「いえ…我々も行こうかと思いましてね。」

消防署員のその言葉に、相澤はうれしそうに笑って「是非いらしてください。」と頭を下げた。

……

イリユージョンショー当日・

浅野が会場に設けられた楽屋から姿を現した。

それを見た、相澤、明良、圭一が息をのんだ。

黒髪のロングヘアーを1つにまとめたかつらをかぶり、ヨーロッパの中世貴族風の衣装をまとった浅野の姿は、まさにマジシャンだった。

また浅野の中性的で整った顔立ちが、そのイメージを引き立たせていた。

「以前、マジシャンをしていた時の衣装なんですよ。」

浅野が照れくさそうに、こめかみを指で掻きながら言った。

「素敵ですよ。浅野さん。」

圭一が一番に褒めてくれた。

「ありがとう、圭一君。…君のおかげで、私はまたマジシャンになった。あきらめていた夢が実現できたよ。」

浅野がそう言って圭一を軽く抱いた。圭一が照れくさそうに微笑んだ。

そして浅野が相澤に向いた。

「えっ!？」

相澤は逃げる間もなく浅野にそつと抱かれた。

「社長のおかげです。感謝します。」

「い、いやその…。こちらこそありがとう。」

浅野は離れたが、相澤は顔が真っ赤になっている。

明良がくすくすと横で笑っていた。

浅野は、そんな明良にも手を広げた。

「え？私は何も…」

それでも浅野は黙って明良を抱いた。
明良が照れくさそうに笑って言った。

「…期待しているよ。頑張つて。」

「はい。ありがとうございます。」

浅野は体を離してから、相澤達に頭を下げた。

……

無料という事もあり、池を取り囲んだ観客席はいっぱいだつた。
この観客に取り囲まれてマジックをするのは、正直無謀だということも
のだろう。

タネがあれば…の話だが。

開演を知らせるブザーがなった。

しばらくして、池の周囲を水柱が吹きあがり、取り囲んだ。
観客達の悲鳴に似た歓声が上がる。

激しい音楽と共に、水柱は吹きあがり続けた。
とたんに水柱がおさまり、池の中央にあるステージに、衣装を着た
浅野俊介が立っているのを見て観客が拍手をした。

「浅野俊介イリユージョンショーにようこそ！」

オペラを歌う時の衣装を着た圭一が、中央ステージから離れた陸地
からマイクで言った。

圭一を見た観客からどよめきが起こった。

「ショーをご案内します、北条圭一です！今日は歌いませんが、よ
ろしく願います！」

圭一がそう言って頭を下げると、観客から笑いと拍手が起こった。

「最初は水のイリユージョンです。しぶきがかなりお客様にもかか
ると思いますので、前のほうの方は必ずお配りした、透明のカバー
をお持ち下さい！浅野さん！お手柔らかに！」

圭一がそう言っていると、浅野は苦笑するように笑って、右手を左から右
へ大きく振った。

順番に水柱が現れ、消えていく。水のカーテンが池を覆うように揺
らいた。光の加減で、虹も現れた。

観客から拍手と歓声があがる。

…だが、ここまでは、池の周りに噴水が仕掛けられ、浅野の手の動
きに合わせて噴水を作動しているものと皆見ている。
しかし次の水の動きには皆驚かされた。

池中の水が波打ちはじめ、ステージを中心に渦を巻くと、そのまま水が減って行くのである。そのうちに水がなくなってしまう、浅野が困ったように両手を広げ、肩をすくめた。

「…あらら…水がなくなってしまうでしたね。…浅野さん、水のイリュージョンは終わりですか？」

圭一の声がそう言うと、浅野は人差し指を自分の顔の前で揺らして、その場にしゃがみ、床を強く打った。すると地響きとともに、水が吸い込まれていた場所から再び吹きあがってきた。水柱がランダムにステージの周りに吹きあがる。すると吹きあがった水の塊がイルカの形になり、浅野のいるステージの周囲を飛び跳ねるようにして回った。観客が拍手をしながらも啞然と口を開いているのが見える。…相澤プロダクションもお金をかけたな…という風にも見えるが。浅野が両手を下に向け振りおろすと、水のイルカたちが空中で弾けて池に落ち、水は再びステージの周りに湛えられた。

「水が戻ってよかったです！あのまま流れちゃったら、水道代ばかりになりませんかね。」

圭一の声に観客が笑ったが、まだどよめきも起こっている。

「次は、火のイリュージョンです。皆さまには熱さは感じさせない程度の炎ですが、近寄らないようお願いいたします。」

浅野がステージの上で念を送るように、額の前に人差し指を立てた。浅野の体に力が入ると同時に、今度は火柱が池を包んだ。

観客がどよめいている。

ごおっという炎の音とともに、火が池を包んでいる。

「浅野さん？…大丈夫ですか？火が浅野さんに向かってますよ！」

圭一の声に観客の悲鳴がした。

「浅野さん！！」

圭一の叫びとともに、浅野の姿が炎に吸い込まれていった。

「！？浅野さん！！」

驚いたように圭一が炎に入ってしまった。

これには、相澤と明良も驚いて、思わず観客席の下にあった控室から飛び出した。

「圭一！！」

明良が思わず呼びかけたが、炎の勢いがすごい。

「…熱いぞ。…映像じゃないのか？」

相澤が言った。明良が驚いて炎を見上げた。

「圭一！！」

明良が炎に飛び込もうとしたが、相澤があわてて抱きとめた。

炎は池の上にも広がっていた。一番高い場所から見ている観客からも、ステージが炎で見えなくなっていた。

観客が騒ぎ出した。圭一の声がしないので、本当なのか、仕掛けなのかわからない。

「皆さん、こっこっこ！」

圭一が手を振ると、前に座っていた観客が驚きの声を上げた。

圭一と浅野は東の観客席の最上部にいたのだ。

炎の中にいたはずの2人がいつの間にか観客の最上部に移動していた。

「どうなることかと思いましたが、浅野さんのおかげで助かりました！…お客様には何もなかったですか？」

圭一が階段を降りながらそう言うと、拍手が起こった。

浅野も圭一の後ろから降りてきている。

「よかったです。こっちは死にかけましたけど。」

その圭一の言葉に観客から笑いが起こった。

浅野が両手を広げると、炎は池の両端にカーテンが開くように移動した。そして浅野が両方の指を鳴らしたと同時に火は消えた。浅野は今度は両手を振り上げた。すると池の周りに順番に水柱が噴き上った。

一番前の観客があわててカバーを広げ、観客から歓声が起こる。

水のイルカが、池の中央から3頭飛び上がり、それぞれ池の中心へ落ちていく。

池の周りを歩きながら、圭一が言った。

「今日は短いショーでしたが、お楽しみいただけましたでしょうか？」

拍手が起こった。

「さて、ここで皆さまに浅野さんからプレゼントです。今日、会場にお入りになる前にチケットのような紙をお渡ししていると思います。そのチケットを出してもらえますか？」

観客達はざわざわとしながら、かばんやポケットからチケットを取り出している。

チケットには、「浅野俊介イリュージョンショー入場券」としか印字されていない。

「そのチケットを今、ステージにいる浅野さんに向けて下さい。」

観客が驚いてステージを見ると、いつの間にか浅野がステージの中央に立っていた。

観客達は訳もわからず、チケットを浅野に向けてかざす。観客の中には、面倒なのかかざさない人もいるが…。

「東から順番に、浅野さんが投げキッスをします！そのキスを受けられたと感じたら、チケットを見て下さい。素敵な文字が入っていますよ！」

浅野が東の観客席から順番に両手で投げキッスをした。

受けた後の観客がチケットを見ると「LOVE」という文字が、赤い判を押したように浮き上がっている。

観客から悲鳴が上がり始めた。

チケットをかざさなかった観客達が慌ててチケットを取り出したが、その人にはない。

「浅野さんの愛を受けられましたでしょうか！！そのLOVEという文字が入った方は、そのチケットを次のショーまで大切に持っていて下さい！次回からは有料ですが、そのチケットを持った方のみ、次回も無料にさせていただきます！」

観客から悲鳴が上がった。チケットに「LOVE」の文字が入らなかった客が悔しそうにしている姿があった。

「…ではまた、次のショーでお会いしましょう！ありがとうございました！」

その声に拍手が起こった。浅野が観客を見渡しながら手を振っている。

観客達が浅野にそれぞれ手を振った。

そして拍手と歓声の中、ショーは終わった。

……

「どうなることかと思った…」

プロダクションの社長室に戻った相澤と明良が並んで疲れ切ったようにうなだれている。

前のソファーには、浅野と圭一が申し訳なさそうに並んで座っていた。

「あの炎が熱を持つ事があるなら、そう言ってくれよ。…本当にお前達が死んだかとおもったぞ。」

「すいません…。」

浅野が頭を下げて言った。

圭一が慌てて言った。

「僕にはちゃんと説明して下さっていたんです。」

「あれは演出だったのか？お前が飛び込むのは？」

「…はっはい。もちろんです。」

圭一が少し動揺したように見えたが、明良はほっとしたようにうなずいた。

「…ならいいんだが…。今後はシナリオも、社長と私に見せるようにしてくれ。」

「はい。」

浅野が再び頭を下げた。

…

「圭一君…。ありがとう。…君が飛び込んでくれなければ、私はだめだったかもしれない。」

普段着に戻った浅野が、食堂でコーヒーを飲む圭一に言った。

「いえ…。炎が熱を持っていたから…僕もとっさに入ってしまったんです。その後になって、足手まといになるかもしれないって気付いて…。」

「いや、君が来なかったら…あの映像の暴走は止められなかった。思いつきり構成が変わってしまったけど…。終わりよければすべてよしとしよつ…」

「はい。」

圭一が微笑んで、コーヒを一口飲んだ。

浅野が炎に入った途端、炎は熱を持った。そして、それを感じた圭一が飛び込んだのだった。

1分どころではない。浅野と同じように圭一の体にもずっと炎がからみついていた。

浅野は圭一の体に覆いかぶさり、瞬間移動を試みたが、炎の熱で体の自由が利かなかった。するとしばらくして圭一の目が青く光り、体が青い炎に包まれているのが見えた。

（悪魔が守ってる…！）

浅野がそう思ったとたん、青い炎が自分にも絡まりはじめた。すると瞬間移動できた…というわけである。

つまり浅野が圭一を守った訳でなく、圭一の力が浅野に手を貸したのだ。

その時「ちっ」という舌打ちの音が、浅野の頭の中でした。

浅野の頭に、マジックと一緒に学んでいた同僚の姿が浮かんた。

（！…あいつか…！）

浅野はそう思い、同時に（やはり来たか）と思った。

「…浅野さん…」

浅野はその圭一の声に、我に返った。

「ん？なんだい？圭一君。」

「…浅野さん…マジシャンって言うてるけど…本当はちゃんとした力を持っていらっしやるんですよね？」

「…！」

浅野は黙り込んだ。しかし、ごまかせるとは思っていない。

「…君を連れて瞬間移動をした時、まずいとは思ってたけど…君を助けるにはああするしかなかったんだ。」

「どうして黙ってたんですか？…僕は、気にしないのに…」

浅野は首を振った。

「僕は物ごころついた頃から、この力のために周りから気味悪がられてね…。…それでこの力を隠す癖がついているんだ。」

「…僕も…持っているみたいだから…」

「うん。君には悪魔がついている。」

「悪魔！？」

「悪魔と言っても、堕天使といってね。元々は天使だったんだ。…何か神の怒りに触れたんだろう。」

「…そうですか…。マッドエンジェルっていう名前も間違っていないかったんだ。」

「マッドエンジェル（地獄の天使）？…うまいネーミングだな。」

圭一が苦笑するように笑った。

「いつの間にかそう呼ばれていました。僕にはわからないけど、マッドエンジェルが降臨すると、僕の目が青く光るんだそうです。そして思わぬ力が出てしまう…。」

「さっきも降臨してたよ。」

「！！」

「炎に包まれた時にね。その悪魔は君を守ろうとしたんだろう。そして私も守ってくれた。」

「…それなら良かった。」

「悪魔にしては、分別のある奴のようだから、心配することないんじゃないか？」

「ええ…。」

「僕の力の事は、これからも内緒にしてくれるかい？」

「…わかりました。」

圭一がうなずいた。

「それからもう一つ…いいことを教えてやろう。」

「？なんですか？」

「キャトル。」

浅野がそう言うのと、キャトルが圭一の前に瞬間移動して現れた。

「わっ！」

「にゃあ」

「だっだめですよ！食堂にキャトル入れちゃ！」

「あ、そうか。キャトル後でな。」

「にゃあ」

キャトルが消えた。

「…キャトルが何か…？」

「…君の子どもだよ。」

「！？…え？」

「キヤトルは、君の子どもとして産まれるはずだった魂なんだ。」
「…もしかして…」

「…そう…過去を勝手に覗いて悪いが、君は君の意思に反して、子どもを死なせてしまった事があるよね。」

「はい」

「キヤトルは…その死んだ子だ。」

「…！」

圭一の目に涙が浮かんた。

「君があんまり悲しむから、キヤトルは猫として産まれてきた。猫の命は短いが、それでも君と一緒にいたかったんだよ。」

「…本当に…？」

「そうだ。…これから、できるだけ一緒にいてやってよ。」

「はい！」

圭一が立ち上がった。

「早速キヤトルのところに行くのか？」

「はい！」

「今は外だ。非常階段のところにいる。」

「…ありがとう！浅野さん！」

「ん…また明日ね。」

「はい！また明日！」

圭一は浅野に頭を下げると、コーヒークップをカウンターに戻し、走って食堂を出て行った。

……

「キヤトル!!」

圭一が暗くなつた非常階段を上がりながら叫んだ。

キヤトルの声が聞こえ、上から、キヤトルが圭一の胸に降ってきた。

「キヤトル!! 危ないよ!!」

圭一が笑いながらキヤトルを抱きしめた。

「…僕の…産まれるはずだった子なんだって?」

「…にゃあ…」

「女の子だったんだ…。女の子だったら「あすか」って名前つけるつもりだったのに…」

「んにゃにゃ…」

「うん。キヤトルでいいよね。」

キヤトルがうなずいた…わけはなく「にゃあ」と鳴いた。

「産まれてきてくれて…ありがとう…」

「にゃあ…」

圭一はしばらくキヤトルを抱きしめていた。キヤトルは気持ちよさそうに目をとじている。

圭一は、キヤトルを離して言った。

「さ、家へ帰ろう。ささみ買ってあげる。」

「にゃあ!!」

キャトルが元気に鳴くので、圭一は笑いながら、非常階段を駆け降りた。

（終）

第1章・魔術師誕生・（後書き）

最後まで、お読みいただきありがとうございます（^^）

「アイプロ！」と並行する形ですすむファンタジーです。他のサイ
トに別物として載せておりましたが、こちらにもアップさせていた
だきました。「アイプロ！」と一緒に読んでいただけると嬉しいで
す（^^）

第2章・敵対者・

あさのしゅんすけ
浅野俊介は、自身が所属しているタレント事務所『相澤プロダクシ
ョン』の食堂で、研究生達にマジックを見せていた。

「コイン握って…そう。今、ちゃんと握ってるね。」

コインを握らされた男子研究生がうなずいた。周りで男女混じって、
浅野のいるテーブルを囲んでいる。

浅野は自分で拳を握って、机の上をその拳でコンと叩いた。

「手の中のコインがなくなったの感じた？」

男子研究生が驚いた表情でうなずいた。

「手を開いて見せて。」

男子研究生の手の中にはコインがない。

「はい、ここへ移動したよ。」

浅野が手を開くと、コインが姿を現した。
拍手が起こる。

（いいのかなー…こんなに力使っちゃって…そろそろ本当のマジッ
クしようか…）

浅野はそう思い、コインを持ち、あちこちに移動させた。

右手にあったかと思うと、左手から出し右手にはない。今度は両手からなくなったかと思うと、男子研究生の耳の後ろからコインを出した。これは本当のマジックで、器用な人間が訓練を積みめば誰でもできる。

「あつとと…」

浅野がコインを落とした。研究生から笑いが起こった。

「失敗失敗…今ではれちゃったね。」

浅野が頭を掻きながら笑った。…実はわざと失敗したのだが…。

「僕は今半そでだけど、長袖でポケットのある上着を着ていれば、誰でもコインマジックはできるんだ。いかに早く隠すか、移動させるかを練習すればいい。マジックって案外単純なんだ。」

研究生達がうなずいた。

「今日はこれで終わり。また今度ね。」

浅野の言葉に研究生達が拍手をした。そして独り独り頭を下げて、テーブルから離れた。

（この子は行儀がいいし、素直な子が多いなあ…。独りぐらい「そんなの知ってる」とか言い出しそうなもんなのに…）

今までの経験から浅野はそう思った。

「食後の運動は終わったし、コーヒーでも飲むか。」

浅野が財布をポケットから取り出しながら立ち上がると、すっとコーヒーが浅野の前に置かれた。

（イリユージョン？）

浅野がびっくりしてコーヒーを見てると、横に北条圭一きたじょう けいちがクスクスと笑って立っていた。

「ああ、圭一君。びっくりしちゃった。」

「お疲れ様でした。」

「ありがとう。コーヒー代…」

「１００円くらいいいですよ。」

「いやいや…そう言う訳には…」

そう言って、浅野はくつと握った拳から１００円玉を出した。

「はい。ありがとう。」

圭一が驚いて、その１００円玉を受け取った。

「…今のは？」

「テレポート」

浅野がにやりと笑った。

圭一が笑った。

「ありがとうございます。」

そう言って、１００円を受け取り、浅野と一緒に座った。

「無料で講習するなんて…もったいないじゃないですか。社長にマジックの講師として契約してもらおう僕から頼みましょうか？」
「いや…ほとんど僕は力に頼っているから、教えられるマジックはあまりないんだ。そのうち皆も飽きてくるだろう。」
「そうでしょうか。」

圭一はコーヒーを一口飲んだ。

「僕にしてみれば、こんな美味しいコーヒーがおかわり自由で100円というのがイリユージョンだよ。」

浅野がコーヒーを一口飲んでから、感心したように言う。

「次のショーは決まったんですか？」
「いや…イリユージョンショーは、ちょっともったいぶるくらいがいいんだ。それこそ飽きられちゃう。」
「なるほど…」

圭一がうなずいた。

「でも時々、テレビに出させてもらって、ちょっとした技を見せる事ができるから助かるよ。それも報酬をすぐにくれるのがいい。」

「今までどうされてたんです？」
「いろんなバイトしたよー。ラーメン店の店員だろ？ガソリンスタンド、ビデオ屋、お化け屋敷…」
「お化け屋敷！」

圭一が笑った。

「それこそイリュージョンでさ。瞬間移動して脅かしてやったの。」
「それは怖いでしょう。」

「あれが一番、報酬良かったかな。」

「…それ以外はずつと力を押さえてたんですか…？」

「まあね。この前のショーは本当に力を解放出来て楽しかったよ…。
邪魔さえ入らなければね。」

「先輩弟子っておっしゃってましたっけ？」

「いや…頭に浮かんだのは同僚の顔だったよ。」
「同僚？」

「うん。俺と同じくらいの力を持ったやつでね。ライバルとも言えるが…実際は、あいつに追放されたようなもんかな…。」

「嫉妬心ですか？」

「だろうな。師匠は普通のマジシャンだったが、やたらかわいがってくれてね。それを妬んだんだろう。師匠も自分の腕よりも上の弟子を持つことに不安があったのかもしれない。正直、危険なマジックをしたから追放だなんておかしい話なんだ。マジックは危険がつきものつてのがあたりまえなのにさ。」

「…ですよね…。以前プリンセス天功さんが顔に大けがをされた時に、それを思いました。」

「あの人は可愛いだけじゃなく、アイデアマン…あ、ウーマンだよ。ね。それにアシスタントだけに任せずに、自分でも危険な事をやるからすごいんだ。大抵あれだけのことができれば、自分でやらないよ。」

「へえー…」

2人はしばらく沈黙した。

「今日もバー手伝ってくれるのかい？」

「はい！」

「ほんと助かるよ。最近、マジック見せてくれっていう人多いから、カクテル作る時間もない…」

「僕も少しならカクテル作れますから、ご遠慮なく。」

「ありがとう。」

浅野が圭一に微笑んだ。

……

「やべ、チャームがそろそろないな…」

バーの準備をしていた浅野は時計を見た。

「こんな時間じゃ、配達してくれないか。適当なの買いに行こう…」

浅野は財布のお金を確認すると、エレベーターに乗り、1階へ降りた。

そして外へ出た。

18時前だが、まだ明るい。

歩いて駅のデパートに行った。

そして、スナック菓子を袋いっぱいにつめて出てきた。

横断歩道を渡った。その後ろを右折の車が通ったのを感じた途端、その車がいきなりバックして浅野に向かってきた。

浅野は咄嗟に手を出し、車を止めた。

(…おかしい…)

いきなりバックするにもギアチェンジする間が普通はある。その車

はギアチェンジせずにバックしたような感じだった。

（――まさかあいつ――！）

浅野は辺りを見渡した。

車をバックさせた運転手が、浅野にぶつかったのかと思ったのか、浅野に駆け寄って謝りに来た。

「すみません！急に車が――！」

「ああ、いいっていいって。」

浅野は運転手に向かって手を振り、あたりを見渡している。運転手は驚いていたが、逃げるようにして車に乗り立ち去って行った。

「いない……？絶対あいつがいたと思ったんだけど……」

そう浅野が呟くと「浅野さん！」という声とともに、圭一が駆け寄ってきていた。

「大丈夫だったんですか！？……今の車……」

「うん。思わず力使っちゃって止めただけ……」

「……さっき言ってた同僚の方でしょうか。」

「……たぶんな……ここにいちや危ないから、プロダクションに戻ろう。」

「はい！」

2人はプロダクションに向かって走った。

……

（あいつが、こんな近くまで来ているとしたら…やばいな…）

浅野はグラスを拭きながら思った。今日は客が少なくて助かった。マジックを見せて欲しいということも言われない。

（マジックに飽きてきたな…）

浅野はそう思った。この2週間連続でやらされていたため、そろそろかなとは思っていたが…。

圭一には帰ってもらった。20歳とはいえ、毎晩24時まで働かせるのは良くないだろうと思ったからだ。

本人は心配そうにしていたが、帰っていった。

……

24時になった。

浅野は後片付けに入った。今日は本当に楽だった。少しさびしい気もするが、これくらいがちょうどいい様な気がする。

携帯が鳴った。

圭一の父、明良^{あきら}からだった。

「はい？…え！？…いえ…10時には帰ってもらったんですが…！」

浅野の携帯を持つ手が震えた。

……

浅野には予知能力の類はない。それがあれば、圭一が何か危険な事

に会った時わかっただろうに…と、浅野はタクシーの中で唇を噛んだ。

圭一は姿を消していた。何も知らない明良達は、プロダクションの屋上から1階まで探し回り、圭一がよく行く場所も探したが、いないという。

圭一の飼い猫「キャトル」もいなかった。

（キャトルの予知能力が利かなかったとしたら、やっぱりあいつが…しかし…どこだ？）

タクシーの運転手が困ったように言った。

「お客さん…このまままっすぐ走ってたらいいんですかね？」

「うん。とにかくまっすぐ走ってくれ。」

浅野が言った。

すると頭の中に声が聞こえた。

『ここだよ。悪魔とファミリアは…』

「！！」

浅野は辺りを見渡した。が、はっとして上を見た。

高いビルの屋上に、圭一がキャトルを抱いている様子で、こちらに背を向けて立っている。それも少しでも揺らいだら落ちるような場所だった。

「止めてくれ！！」

浅野が突然タクシ一の運転手に言った。
そして財布ごと運転手に渡し、外へ出た。

「お客さん！困ります！」

運転手が窓を開けてそう言ったが、浅野は道路を渡って向こう側へ走った。

……

浅野はビルの裏手に行き、誰も周りにいないことを確認すると、額に人差し指を当て念じた。

ビルの屋上に移動したことを感じ、辺りを見渡した。風が強い。

「圭一君……！」

見渡したビルの端に圭一の姿があった。立ったまま眠っているように目を閉じている。圭一の手には抱かれたキャトルの体からオーラのような帯が見える。圭一を守るように帯は圭一の体に巻きついていった。

「おっと、それ以上は寄るなよ。」

同僚の声がして、姿を現した。

「……天野……！」

「全く懲りない奴だな……。マジックをやめる約束だったじゃないか。」

「……約束なんてした覚えはないが。」

浅野が言った。天野が目を見開いた。

「先生と約束したはずだろう!？」

「さあね。約束したのは、もう師匠のところへは戻らないということだけだったと思うが…」

「浅野…!」

「どうしてお前は、そこまで僕にこだわる!…ほっといてくれ!」

「…なんでいつもお前なんだよ…」

「!？」

「俺は…お前と同じ能力があるのに…どうしていつも影にいなきやならないんだ!…」

浅野はちらと圭一を見た。

(引き寄せるより落とした方が助けやすいか…)

浅野はそう思うと、天野に言った。

「やつかみなだね。見苦しい奴。」

「なんだと!？」

「他に何があるよ?…そんなやつかみで人の命を奪うようなことする奴だから、お前はいつまでも影モノなんだよ!」

浅野の言葉に天野が激高した。そして振り返り、圭一に向かって手をかざした。

圭一の体がぐらりと揺れ、背中からビルから落ちた。

「キャトル!!起こせ!」

浅野が叫んだ。

キャトルが「ギャーッ！」と鳴いた声で、圭一が目を覚ました。…
が、覚めたのはマッドエンジェルだった。

圭一の開いた目が青く光っている。圭一の落ちていくスピードが遅くなった。浅野が下を覗き込むようにして飛び降りた。

「！！！」

天野が驚いて、ビルの下を覗き込んだ。

浅野の背にオオワシのような白い羽が音を立てて広がった。浅野は圭一の体を横抱きにするように受け、ビルの上まで運んだ。

浅野は屋上に圭一を横たわらせた。圭一の青く光った目がおさまった。だが圭一は目を覚まさない。キャトルが圭一の胸から降り、心配そうに頬ずりしている。

「…お前…何者なんだ？」

天野が言った。

「さあね。天使かもしれないし、悪魔かもしれない。」

浅野が苦笑しながら言った。羽は消えている。

「天野」

浅野が天野に近づきながら言った。天野は少しおびえたように後ろに下がった。

「俺の力の邪魔をすることは構わない。だが、罪のない周囲にまで手を出すのはやめてくれ。…たまたま圭一君に悪魔がついていたからこれですんだが、もし圭一君がこのまま死んでいたら…お前は、この先もつとひどい罰を受けることになる。」

「！！」

「…お前が…今まで何をしてきたか…俺は知ってる。俺は過去は見通せるからな。…お前がいつまでも影にいなきやならないのは、お前の過去が原因だ。…その原因となったのは何か…自分でわかっているな？」

「……」

天野は涙をこぼしてうなずいた。

「過去は変えることはできない。…だが、お前のこれからの行動によつて、未来を変えることはできる。俺には未来が見えないからわからないが…。今までどおりのことを続けていたら、お前はますます奈落に落ちて行くだけだぞ。」

天野は涙を流しながら、黙っていた。

……

「圭一君！」

瞬間移動で圭一とキヤトルを連れてビルの下に降りた浅野は、まだ眠っている圭一の体を揺らした。

天野の力で意識を失わされ、マッドエンジェルにとりつかれた後である。正直普通の人間なら、かなり体力を消耗しているはずである。圭一が目覚まさないのも当然だった。

キヤトルが心配そうに圭一の頭の周りをうろうろしている。

「…どうしようか…あつキャトル、耳を舐めてやれ。」

浅野がそう言うと、キャトルが言う通り圭一の耳を舐めた。

「わっ！！何っ！？」

圭一が飛び起きた。浅野が笑った。

「大丈夫かい？圭一君。」

「え？あれ？僕…」

圭一がきよろきよろしている。

「ごめんよ。俺のせいで君を危険な目に遭わせてしまったんだ。」

キャトルが唸った。

「はい！ごめんなさい！」

浅野がキャトルに言った。それを見た圭一が笑った。

「同僚の人だったんですか？やっぱり…」

「うん。でももう大丈夫だよ。反省してたから。」

「そうですか…良かった…」

「キャトルが君をずっと守っていたよ。」

圭一が立ち上がって、キャトルを抱き上げた。

「ありがとう…キャトル…大好きだよ。」

キャトルがうれしそうに「にゃあ」と鳴いた。

その時、タクシーが走ってきて、浅野達の傍に止まった。

「よかったー！お客さん、まだここにいたんですか！」

「あ、さっきの運転手さん？」

「財布ごと置いて行かれていなくなるから、…交番に届けようかどうか迷って、一旦走ってしまったんですけど、戻ってきてよかったです。」

「…それはどうも…気を遣わせちゃって…ついでにまた乗せてもらえますかね。」

「もちろん！どうぞ！」

運転手がドアを開けてくれた。

「…猫もOK？」

「もちろんいいですよ。」

浅野とキャトルを抱いた圭一はほっとしたように微笑んで、タクシーに乗った。

……

「キャトルはファミリアか？」

翌日、浅野とキャトルは非常階段にいた。

キャトルは今日も器用に手摺りにすわっている。

「にゃあ？」

「本猫もわからないわけね。」

浅野が笑って言った。「ファミリア」とは「使い魔」という意味で、位の高い悪魔の従僕であることを指す。

天野は、圭一に悪魔がとりついているのを感じたため、一緒にいたキャトルを「ファミリア（使い魔）」だと思ったのだろう。

「でも、圭一君が意識を失ったままビルの端に立っていた時…お前の何かのオーラが圭一君を包んでいたように見えたよ。…何をやった？」

キャトルが首を傾げた。（本当に傾げた。）
そして「にゃあ」と言った。

「心配してただけ？…そうか…やっぱりお前にも何かの力があるのかもな。」

キャトルがうなずいた…わけはなく「にゃあ」と鳴いた。

そして、浅野に向かってもう1度「にゃあ」と鳴いた。

「ん？天野？…ん…あいつね、マジックのアシスタントに手を出したまではまだましたんだが、振られて逆上してさ…自分の力を使っ、その子が一生男性に興味を持てなくしたんだ。」

「にゃあ？」

「俺にはできないけど、奴にはできたんだな。しかしもうその力も消えていると思うよ。…実は…俺、あいつにもっともらしく「お前の過去のせいで、目の目が見れない」って言ったけどさ…実際はどうかわからないんだ。」

「にゃ！？」

「だって…そう言わなきゃ、あいつ自分の性格に気がつかないじゃないか。自分が振られたのもアシスタントが悪い。俺の事もそうだし、きつとあいつは俺が師匠の傍からいなくなったら、今度は自分の目の目見れると思ってたんだろ。自分は悪くない、あいつが悪いから…とか、あいつがいなきゃ…とかそんなことばかり思ってたから、見れる日の目も見れないよ。」

浅野がそう言つて、キャトルを見た。
キャトルが「にゃあ」と鳴いた。

「ん？ちよつとは見直してくれた？」

「にゃあ」

「それは良かった。」

浅野はキャトルを抱き上げた。

「さ、愛するパパのところへ行こう。きつと今頃探してるよ。」
「にゃあ！」

キャトルがそう鳴くと、浅野の腕から飛び降りて走って行った。
浅野は苦笑しながら、ゆっくり階段を下りた。

（終）

第3章・悪魔転生・

夜中

自身が所属するタレントプロダクションビルの裏で、浅野俊介は男と向き合って立っていた。

（プロダクションの裏は避けたかったなー）

浅野は思った。

向き合って立っているのは、同じマジックの師匠の下で学んでいた先輩弟子の神取だ。かんどり

天野が片付いたのに、またやっかいだな…と浅野は思った。

「相変わらず呑気な奴だな」

神取が浅野の心を読んで言った。

「勝手に入ってくるな。気持ち悪い。」

浅野が言った。

「そんな大口叩けるのは今だけだぞ。」

神取が浅野に手を向けた。衝撃が浅野の胸を打った。

「！！！」

浅野はなんとか堪え、人差し指を額にかざし念じた。

神取が炎に包まれた。もちろん熱はもたない。だが神取が炎を振り払おうとしたとたん、熱を持った。

「3分間待つのだぞ。」

「くそ！浅野！」

熱さで動けない神取を置いて、浅野は胸を抑えて、その場を去った。

……

タクシーに飛び乗った浅野は、Ｔシャツの隙間から、自分の胸を見て「うわ」と呟いた。

（見なきゃよかった…。自力で治せるかなあ…）

一般人なら、死んでいるだろうほどの火傷だ。かなりただれている。黒いＴシャツを着ていてよかったと思った。

エスパーが放出する「気」というのは、無機質なものには反応しないが、生体と魂にはかなりのダメージを与える。

避けることは充分にできた。だが浅野の後ろには、相澤プロダクションのビルがあった。避けてしまった場合、ビルの中の罪もない誰かに当たる可能性がある。それは絶対にあってはならないことだ。

（傷見たら、痛くなって来ちゃった…）

浅野は今になって、顔をしかめた。

……

浅野がマンションにつくと、マンションの前で、飼い猫キャトルを

抱いた北条圭一きたじょうが立っていた。

「浅野さん！」

「！！！」

「キャトルが騒ぐから、来てみたんです。大丈夫ですか！？」

浅野の顔色が悪いのを見て、圭一が言った。

「圭一君…なんて優しいんだ君は…」

浅野が圭一にもたれかかった。

「浅野さん！」

圭一は浅野の体を支えた。

……

圭一はベッドで寝ている浅野の顔を心配そうに見ていた。

浅野は自身で火傷の治癒を試みた。だが完治は無理だった。

病院に行こうと圭一は言ったが、警察に説明がつかないからと、浅野は首を振った。

高熱が出ている。

キャトルが浅野の頭元で行儀よく座り、浅野の顔を見ている。

「浅野さん…僕が浅野さんに「気」をあげるとか…できないですか？」

「確かにその方が早く治るが…君がしんどい上に完治は無理だよ。」
「でも浅野さんは少しでも楽になるんでしょ？」

「圭一君の「気」によるが…多分君、10時間くらい動けなくなる

ぞ。」

「いいです！浅野さんが楽になるなら…」

「圭一君仕事は？」

「明日は午後からです。」

「ぎりぎりだな…」

「とにかくやりましょう！どうすればいいですか？」

「…君って人は…」

浅野が苦笑した。

「火傷のところに直接両手を乗せて「気」を送って欲しいんだ。」

「直接！？」

浅野がうなずいた。

「わかりました…」

「ためらわずにね。」

「はい」

圭一は浅野のシャツを開き、火傷でただれた胸を見た。血は出ていないが赤黒く口を開けている傷口に、思わず目をそらせた。

浅野は目を閉じている。

「ごめんなさい！」

圭一がそう言つて、傷口に直接両手を乗せ念じた。

浅野が傷口に触れられた痛みに、思わず声をあげ、頭をそらせた。

見開いたキャトルの目に光の帯が圭一の手から、浅野の体に流れて行くのが映った。

傷口が閉じていく。それとともに圭一の体から力が抜けて行った。傷口が塞がったと同時に、圭一は浅野の体に倒れかかり、浅野の目に力をもどった。

「にゃあ」

キャトルが鳴いて、圭一の頬を鼻でつついた。

浅野が涙ぐみながら起き上がると、圭一を起こし抱きしめた。

「キャトル…君のパパは最高だよ。悪魔に魅入られるのもわかるよ。うな気がする。」

浅野が圭一を抱きしめたままそう言つと、キャトルが「にゃあ」と鳴いた。

浅野は圭一を寝かせ、ベッドを降りた。

「キャトル、お守り頼むな。」

キャトルが「にゃあ」と鳴いた。

……

圭一は目を覚ました。

キャトルが耳元で丸くなって寝ている。思わずキャトルを撫で、起き上がった。

「にゃあ！」

起こした体が再び沈んだのを見て、キャトルが思わず鳴いた。

「やっぱり…まだだめかー」

圭一が目に手を当てて言った。

キャトルが圭一にほお擦りした。

「大丈夫だよ。浅野さん、元気になったのかな…」

「にゃあ」

「そう。よかった。」

声を聞いて、浅野が部屋に入ってきた。

「大丈夫か？」

「はい…でもまだ…体が重くて…」

「そりゃそうだ。まだ5時間しか経ってない。」

「5時間も寝てたんですか！？…僕…」

浅野が笑った。

「あの傷を完治させて、5時間で目を覚ませる君がすごいよ。」

「！…完治できたんですね！」

「ありがとうございます…。あのままだったら、俺でもあと2日はかかっただろう。」

「…良かったです…」

「まだ寝てるよ。ここで無理をしたら後を引くからな。」

「はい。」

「仕事は何時からだ？」

「1時に副社長室に行つて…父さんの車でスタジオへ行きます。」

「わかった。12時にもう1度起こすから。」

「浅野さんは？」

「俺はバーの時間まで何も無いから大丈夫だよ。」

「バーお手伝いに行きます。」

「いや、今日は帰った方がいい。「気」を完全に戻さなくちゃ。」

「…はい…」

圭一はうなずいた。…だが、今夜も浅野に何かあるのではないかと不安だった。

……

夕方 -

「おかえり、圭一君。」

プロダクションの食堂で、浅野が窓際の席から、歌番組の収録から帰ってきた圭一に声を掛けた。

「浅野さん！」

圭一が駆け寄ってきた。元気なようだ。

「収録はどうだった？」

「はい。無事に終わりました。」

「何歌ったの？」

「アベマリアです。」

「え！？」

「？」

浅野が驚いたのを見て、圭一が不思議そうな表情をした。

「…讚美歌歌つても大丈夫なんだ???」

「別に…何もありませんが…」

「悪魔背負つても、関係ないのか。…メモを取っておこう…」

浅野がそう言つて、手にメモをする振りをすると、圭一が笑つた。

……

2人はゆつくりとコーヒを飲んでいた。

「…浅野さん、やっぱり僕、今日バーに行きます。」

「だめだよ。自覚はないだろうが、俺が見る限り君のオーラの色はまだ暗い。…ゆつくり休むんだ。」

「…だって…独りで戦うつもりなんでしょ?」

「……」

浅野が圭一を見つめた。あまりに黙つて見つめるので、圭一が少し体を引いた。

「君はほんつとーに、いい子だねー!」

浅野は圭一の頭を撫でた。

圭一は子ども扱いされて、苦笑している。

「向こうが来れば戦うが、何もなければ、こちらから行くことはないよ。向こうも暇人じゃないから、今夜は来ないと思うよ。」

「…だといいんですが…」

「心配するな。ただキャトルと一緒にいるんだぞ。キャトルは癒しの力を持つてるから、早く回復できるよ。」

「わかりました。」

「いい子だねー」

浅野はまた圭一の頭を撫でた。
圭一がまた苦笑した。

……

24時 -

（ああは言ったものの…）

浅野はバーの片づけをしながら思った。

（…あいつは来るだろうな…。暇人だもん。）

浅野はくくつと笑った。

（…なんてジョーダン言ってる場合か。）

浅野は顔を引き締めた。

（ただ…天野と違って、あれは俺を殺すつもりだったよな…。俺にマジシャンさせないためにしても、何で命まで取ろうとするんだ？
??）

浅野は水場を綺麗に拭き上げて「よし」と満足げに言うと、バーのライトを消した。

……

浅野は足早にプロダクションから離れた。

（またあんなところで襲われたら、今度こそ命はない…。なるべく広い場所で迷惑かけないところに…）

浅野がそう思っていると、頭の中で声がした。

『暇人で悪かったな』

（来たーっ！！）

浅野は心の中で思わず叫び、あたりを見渡した。

『心配するな…傍にはいないよ。埠頭まで来い。』

「また大雑把な…。まあいいや。あんたのダダ漏れたオーラをたどって行きさ。」

『いちいちいちいち、一言多い奴だな！早く来い！』

「はいはい。」

浅野は人差し指を額にかざし、念じた。

……

1時間後 -

圭一がタクシーから降りて、あたりを見渡した。

「運転手さん、ありがとうー！！」

圭一がそう言うと、運転手は頭を下げてドアを閉めた。そしてタク

シーが走り去って行くのを見えなくなるまで見送ると、圭一は胸元に隠していたキャトルを出した。
キャトルが「ぷはーっ」と息を吐いた。

「ごめんね。窮屈だったね。」

圭一がキャトルの頭を撫でた。キャトルが気持ちよさそうに目を閉じている。

「すぐに悪いけど、浅野さんどこかわかる？」

キャトルはため息をつく（本当についた）圭一の手から飛び降り、走り出した。圭一が後を追った。

……

浅野は座りこんで息を切らしていた。腕と足が火傷だらけになっている。

「…いたぶるのもここまでにするか。そろそろ死んでもらおうか。」
神取が言った。

「…どうして俺を殺さなきゃならない？」

浅野が言った。

「お前…天使のエネルギーを持っているだろう…。」
「！！」

「だが天使と言っても、多分お前は「天使」と「人間」が交わった

子…つまり「悪魔」だ。」

「……」

「そんなお前を放置していたら、世のため人のためにならないんだよ。」

「…なんで？…結構いろいろ貢献してるつもりだけど？」

「この期に及んでもまだ、その余裕があるお前が本当に大っきらいだー！」

神取が叫んだ。

「おほめいただいてどーも。」

息を切らしながら言う浅野に神取は体を震わせて、手をかざした。

浅野は座ったまま、飛ばされた。

浅野は仰向けに倒れたまま動けなくなった。
とうとう胸に致命傷を受けたように思った。

「…もーいつそのこと殺してよー…」

息を切らしながら浅野は言った。

「…お前、力を隠しているだろう！…本当はこんなくらいでやられるお前じゃない！」

「ほめてんの？けなしてんの？」

「うるさいっ！！」

神取は浅野の胸倉を掴み、起こした。

「それぐらいの傷、自力で治せるだろうっ！？お前は何かを隠して

いる…それを出せっ！！」

「何かを隠してるって…何を？」

「とぼけるなっ！！」

その時、駆け寄ってくる足音を聞いて、神取が振り返った。

「浅野さんっ！！」

「！？…こいつは…！」

「ばかつ！圭一君来るなッ！！」

圭一の姿を見て浅野は思わず叫んだ。

神取が圭一に向き、両手を重ねてかざした。

光が暗がりやを裂き、圭一の体を突き飛ばした。

「圭一君！！」

浅野が起き上がろうとしたが、さっきの傷で動けない。

倒れた圭一のそばにキャトルが駆け寄った。

「…なんだあいつ…悪魔がついてるのか…？」

神取が震える声で言った。

圭一は起き上がらなかった。浅野と同じ攻撃を受けたのだ。普通の人間なら即死していてもおかしくない。

キャトルが悲しげに鳴きながら、圭一の頭の周りをうろろろしている。

「…圭一君…！」

浅野が必死に立ちあがろうとするが、半身を持ち上げるだけで精いっぱいだった。

その時、圭一の体から光が放たれた。そしてその光は人の形になった。

「！！！！」

浅野も神取もキャトルも、その人の形をした光を見た。

光は黒い羽を持った男の姿に変わった。光り輝く金髪がなびいている。切れ長の目に薄くしまった唇。女性のようにも見える。

「！！！！ルシファー！？」

浅野が思わず言った。

「ルシファー様の名を軽々しく呼ぶな。マスターにつけられた名前は「マッドエンジェル」だ。」

羽を持った男「マッドエンジェル」が浅野に向いて言った。堕天使のルシファーに「様」をつけて呼ぶということは、この男が堕天使（悪魔）であることを表す。

神取はただガタガタと震えている。

「……わがマスターの命を奪ったのはお前か？」

マッドエンジェルが静かに言った。

キャトルが毛を逆立てて、神取に向かってうなっている。

マッドエンジェルはそのキャトルを見て、手をキャトルをなでるよ

うに空を切った。

キャトルの体が大きくなり、炎に包まれた獅子の姿になった。

「やめろ！キャトルまで悪魔にするなっ！」

浅野が叫んだ。

「…この子が望んだんだ。その通りにして何が悪い。」

マッドエンジェルが浅野に言った。そして震えて座り込んでいる神取にゆつくりと近づいた。

「やめろ…来るな…」

そう言いながら、神取は動けない。

マッドエンジェルは、神取の両脇を抱えると、そのまま持ち上げ羽を広げた。

「マッドエンジェル！やめろっ！」

マッドエンジェルはそのまま、浮き上がった。そして海に向かって飛んだ。

「だめだっ！！そんなことをしたら、お前のマスターが殺したことになるってしまっ！！」

マッドエンジェルは止まった。浅野に背を向けたまま黙っている。

「頼むから殺さないでくれ！！…圭一君を殺人犯にするつもりかっ！？」

「…わがマスターの命を戻すためには、この男の命が必要だ。」

「だめだ！！それなら俺を殺せ！」

「！？」

マッドエンジェルが振り返った。

「俺は死んでも痕が残らない！」

「！…お前は…人間じゃないのか？」

「自分でもよくわかっていないが、人間でないのは確かだ。ただ魂は同じはずだ。俺を殺せ。そして圭一君に授けるんだ。…頼む！」

キャトルの姿が子猫に戻っていた。必死に鳴いて空を跳んでいるマッドエンジェルに何かを伝えている。何故か浅野にもわからない言葉だった。

「…その方法もあったか。」

マッドエンジェルはキャトルに向かってそう言うと、地面まで戻り神取を下ろした。

神取が走って逃げだした。

浅野は追いかけることはできない。キャトルも追わなかった。

マッドエンジェルは、浅野の体に手をかざして傷を治した。浅野は驚いてマッドエンジェルを見た。

「マスター…」

マッドエンジェルはそう言うと、圭一の体を抱き上げ抱きしめた。光が2人を包む。

「!?!?」

浅野はただ黙って見ていた。

「!!!まさか!」

マッドエンジェルの体が消えて行った。消えると同時に圭一の体がゆっくりと横たわった。

「キャトル…お前…そんな残酷なこと…」

浅野が呟いた。

圭一が目を覚ました。

「?!?!?!浅野さん?!?!」

圭一が飛び上がるようにして、浅野に駆け寄った。

「大丈夫でしたか!?!」

「圭一君…」

浅野が涙ぐんでいる。

「マッドエンジェルが…死んだよ。」

「!?!?!え?」

「君を助けるために…死んだ…」

「…どうして!?!?!」

圭一がそう言うと、キャトルが駆け寄ってきた。

「にゃあ」

「え？」

浅野が目を見開いた。

「死んでない？…だってあれは…」

「にゃあっ！」

「そんなこともわからないのかっつて、わからないよっ！」

浅野が言った。

「にゃあにゃあにゃあ！！」

「……」

浅野は黙ってキャトルの言葉を聞いていた。

「あ、そっか。」

納得したような浅野に圭一が聞いた。

「キャトルはなんて？」

「…圭一君。こんな時に悪いが、マッドエンジェルに違う名前をつけてやってくれ。」

「名前？」

「マッドエンジェルは元々はお前の守護天使だった。彼はお前に恋したために、堕天使となったんだ。」

「僕に！？」

「男の姿をしていたが、天使にも悪魔にも本来性別はない。…マッドエンジェルは生まれ変わるつもりで、お前の命を救ったんだよ。」
「…名前をつけてあげれば…生まれ変わるんですか？」

「そう。ただ悪魔のままだけだね。」

「悪魔は…もう天使にはなれないのですか？」

「…無理だろうな…神の赦しが得られないと…」

「…でも、可能性はあるんですね？」

「…ある。」

「僕…元々、つけてあげたいと思っていた名前があるんです。マッドエンジェルじゃ可哀想だから…」

「！？…なんて名前だ？」

「リュミエル」

「！？…リュミエル！？」

「フランス語で「光」という意味です。」

「しかし、最後に「エル」がつくのは天使しか許されていない…。
「知っています。でもせめて名前だけでも天使っぽくしてあげてもいいじゃないですか。」

「…圭一君。」

キヤトルが圭一の肩に飛び乗って、頭をこすりつけた。

「キヤトルも気に入った？」

圭一がキヤトルを肩から下ろして胸に抱いた。

「…リュミエルか…いい名だな。」

浅野が呟いた。

……

「で、光^{ひかり}ちゃん。」

食堂で、浅野が圭一の肩に座って腕を組んでいる、小さな「リュミエル」に言った。

「その呼び方はやめろ。」

リュミエルがぶすつとした表情で言った。…一般人には姿が見えない。が、もちろん圭一には見えている。

圭一はくすくすと笑っていた。

「良かったね。生まれ変われて。」

「すべてマスターのお陰だ。」

「ほんとにマスターを愛してるんだね。」

リュミエルが真っ赤になった。そしてシャボン玉が破裂するようにして消えた。

圭一が浅野に尋ねた。

「…消えた時って…リュミエルはどこにいますか？」

「魔界だと思うよ。今頃、赤くなった顔を必死に叩いているんじゃないか？」

圭一が笑った。

「しかし、召喚せずにリュミエル…あの時はマッドエンジェルだったけど…現れたのは驚いたな。普通は召喚紋が必要なのに。」

「召喚紋？」

「呼びだす時はヘキサグラム…六芒星を書くんだ。」

「ああ、それが召喚紋ですか。」

「封印紋はペンタグラム…五芒星というように、紋が決まっているんだ。」

「でも…リュミエルはさつき勝手に出てきましたよ。」

「もういいんじゃないの？自分が圭一君に会いたいから来ちゃうんだろ。」

圭一が照れ臭そうに笑った。

「僕のどこが好きなんだろう。」

「リュミエルが一番君とつきあいが長いから、彼にしかわからないことがたくさんあると思う。」

圭一がうなずいた。

浅野がコーヒーを一口飲んで言った。

「ただなー」

「？なんです？」

「キャトルなんだが…。」

「？」

「魔界に片足突っ込んだみたいなんだ。」

「！？え？」

「実は君が命を落とした時に、キャトルが怒りに任せて、リュミエルと契約をしちゃったみたいなんだよね。」

「キャトルが！？」

圭一が下を向いた。

「そんな…」

「一瞬だが、炎をまとった獅子になったよ。その後、リュミエルと俺にもわからない魔界の言葉で会話をしてたしな。」

浅野はそう言うてから（俺はどうして悪魔なのに魔界の言葉がわか

らないんだろう???」とふと思った。

「じゃあ僕は…」

圭一が微笑みながら言った。

「死んだら、リュミエルとキャトルのいる魔界に連れて行ってもらおう…」

「圭一君…いい話だけど…」

「？」

「死んでどこへ行くかは自分で決められないんだ。」

「!？」

「君はこのまま行くと天国行きだ。」

「……」

「だから、リュミエルとキャトルが天国に行けるようにする道を探そう。」

圭一は浅野を見開いた目で見た。そして、微笑みながらうなずいた。

（俺は多分、魔界への道しかないだろうな。）

浅野は圭一に微笑みながら、独り密かに思った。

（終）

第4章・清廉な歌声・

（なんて、清廉な声なんだ…！）

浅野俊介は、自身の所属しているタレントプロダクションビルの音楽レックス室で、自分のためにシュールベルトの「アベマリア」をラテン語で歌う北条圭一きたじょうの声を聞いて思った。
20歳とは思えないテノール歌手のような深い声が、浅野を包んでいる。

（自分が悪魔だってこと忘れるなあ…）

また、パートナーの秋本 優ゆうが弾くバイオリンの音色もいい。

曲が終わった。

圭一と秋本が浅野に頭を下げた。

浅野が拍手をした。

「すごいよ！圭一君！」

圭一が顔を赤くして、また頭を下げた。横の椅子にいるキャトルは寝入ってしまったている。

「ありがとう！わがまま聞いてくれて…。秋本常務もお休みなのに
すいませんでした。」

浅野が立ち上がったって秋本に頭を下げ、握手をした。

「常務はよして下さい。」

秋本が照れ臭そうに言った。浅野より1歳下だと言う。その綺麗な顔立ちから「美しきバイオリニスト」と言われている。しかし、私生活は男っぽく、毎日バイクで通勤し、バイクスタントマンの経験もあるという。

「心が洗われるようなひとときでしたよ。」

「浅野さん、ほめ上手。」

圭一が笑って言った。

「本当だつて！贅沢な時間を過ごさせてもらったよ。」

浅野が圭一とまた握手をして言った。

……

（このプロダクションの空間がいつも清められているのは、圭一君のおかげかも知れないな……）

浅野は思った。

あの圭一の綺麗な声を聞いて、心を打たれない人間がいるなら、そいつは悪魔以下だ…と、自分を悪魔だと思っている浅野は思う。

（今日マジで、圭一君のアルバム買って帰ろう。）

圭一と秋本のユニット名は「light opera（ライトオペラ）」というそうだ。「オペラ」と称するには、まだ未熟だということ。「light（軽い）」をつけたのだという。

（なんとまあ、謙虚なことだ。）

圭一君らしいな…と浅野は思った。

……

浅野はCD店にいた。

「ジャンルはやっぱりクラシックだよな…ライトオペラ…ライトオペラ…と…あつた！」

浅野は圭一の顔を見つけた。

「デビューの時は独りだったのか…。」

そう呟いて、そのCDを取った時、心臓がドクリとなった。

浅野は動きを止めて、目だけを動かした。誰かが見ている。

浅野は一旦CDを戻して、何もなかったかのようにその場を離れた。そして、CD店を出た。

……

誰かがついて来ているのがわかる。浅野は歩行者天国の道に入り込んだ。スクランブルに人が交差して歩いている。

浅野は狭い道に入り込んだ。

後ろから、足音がついてきているのを感じ、浅野は立ち止まって振り返った。

黒いロングワンピースを着た女性だった。何かの絵から出てきたような整った顔をしている。

（美しい薔薇にはトゲがあるってね…… っと！）

浅野に向かって、光が飛んできた。浅野は体を沈めて避けた。

浅野は女性とは逆の道へ走り、大通りに出て振り返った。女性は路地の出口のところで止まり、浅野を見ている。追いかけて来るつもりはないようだ。

浅野は雑踏に紛れるようにして、歩行者天国を抜けた。

……

（見たことあるような…）

昼に見た女性は、黒いロングワンピースに対比して、顔や手が異様に白く見えた。

浅野は、バーでグラスを拭きながら考えていた。

今日は圭一は生放送のクラシック音楽番組に出るため、バーには来られないと言っていた。

「そうか、テレビつけなきゃ。」

浅野はそう思わず言って、テレビをつけチャンネルを合わせた。

「始まったばかりだ。間に合った！」

浅野が思わずそう言うと、カウンターで飲んでいた作曲家の沢原亮が笑った。

「美しきバイオリニスト」の秋本優と同じ24歳の常務で、女性的な美しさを持つ秋本とは対照的な、男らしいはつきりとした目鼻立ちをしたハンサムだ。男前というのはこういう人を言うのだろっとな…と浅野は初めて会った時に思った。

「圭一君出るんでしたね。」

沢原がテレビに向いて言った。

「ええ。」

「あれ？独りか…。珍しいな。」

「何でも秋本さんは、荒川真美ちゃんの伴奏の仕事が先に入っていたとかで…」

荒川真美はまだ19歳と若い、歌唱力を武器にした歌手で、秋本の恋人でもある。

「そうなのか…言ってくれたら、俺がピアノ伴奏行っただのになあ…」

沢原がトマトジュースを一口飲んで言った。

「今日、沢原さんはデートは？」

「未希が同窓会でね。」

「…あー…寂しいですねえ。」

浅野がそう言うと、沢原が笑って言った。

「まあね。だからここへ来たんだ。」

未希とは、荒川真美と同じ年でダンスが得意な歌手である。相澤プ

ロダクションは社内恋愛には寛大らしい。あの圭一も、フランス人と日本人のハーフである歌手のマリエと付き合っている。

微笑みながらふとテレビを見た浅野の目に、ぞっとする光景が映った。

観客席にあの黒いロングワンピースの女が無表情で座っている。その目は浅野を見ているように見えた。

「…大変だ…圭一君が…！」

「浅野さん？圭一君がどうしたんです？」

沢原が、急に浅野の顔色が失せたのを見て、立ち上がりながら言った。

「すみません…バー閉めていいですか？」

「俺だけだから構わないと思うけど、浅野さん、どうしたんです！」

「圭一君のいるこのスタジオはどこですか？」

「！？」

沢原はテレビを見た。

……

浅野は沢原の車に乗せられ、高速道路を走っていた。近くなら瞬間移動するつもりだったが、無理な距離だった。

「何が起こるのか、話してもらえませんか？」

沢原が運転しながら、助手席にいる浅野に言った。

「信じてもらえるかどうか…」

「信じないつもりなら、車を出したりしませんよ。」

「！！沢原常務…」

「常務はいりません。圭一君に何が起ころうとしてるんですか？」

「悪魔が圭一君を狙っているんです…」

「悪魔！？」

「実は私も昼に会っているんです。その時私に攻撃してきたんですが、あれは、圭一君の死を邪魔するなという警告だったのかもしれない…」

沢原はカーナビのテレビをちらと見た。

「まだ圭一君は歌う番じゃないようですね。」

「今日は最後だと言っていました。」

「その前にやるのか…歌った後でやるのか…」

沢原の言葉に浅野が首を振った。

「悪魔の心の中が読めない…」

浅野が目には手を当てた。

（リュミエルは何をしてるんだ！キャトルの影も感じない…）

浅野は今までにない焦りを感じていた。

（階級によるが…悪魔に呪い殺されたら、圭一君の行くべき天国には行けない…地獄か魔界か…）

浅野は心臓がドクリと鳴るのを感じた。

「！！！」

黒いロングワンピースの女が走る車と一緒に飛んでいる。浅野の真横だ。

「しまった！罠だ！」

浅野が叫んだ時には、車が高速道路の側壁に車体をこすりつけていた。

「！！！」

浅野が驚いて沢原を見ると、必死にハンドルを両腕で押さえていた。側道の壁と車体がこすれて火花が散っている。

「くそ！負けてたまるか！」

沢原がそういいながら、ハンドルを押さえ込んでいた。ブレーキを踏んだままにもかかわらず、車が止まらない。

（なんて精神力だ！）

浅野は思った。沢原は悪魔の誘導に必死に逆らっているのだった。誘導されたままだったら、側壁に激突して今頃は沢原も浅野も命を落としていただろう。

ブレーキを踏みっぱなしのため、焦げくさい臭いが充満している。止まるが早いか、車が爆発するのが早いか…。

浅野は意を決して、額に人差し指をかざし、強く念じた。

リュミエルとキャトルがそれぞれ檻に封印されている姿が見えた。

（なるほど、あの女！…頼む…リュミエル、キャトル…力を貸してくれ！）

浅野は一筆書きで、自分の前の空間に六芒星を書いた。そして人差し指を額にかざし、

「召喚！」

と叫んだ。すると車の前にキャトルの獅子が現れて、車を炎の体で包み止めた。

沢原が運転席から降り、浅野に手を差し出した。浅野はその手を握って、引つ張られるように車を降りた。

上を見上げると、女がリュミエルの手から出された帯に巻き付けられてもがいていた。

「リュミエル！帯を切って離れる！」

リュミエルは浅野の言う通りにして離れた。

浅野は女に向かって五芒星を一筆書きし、人差し指を額にかざすと「封印！」と言った。

女はもがいた。簡単には封印させようとはしなかった。

「くそ！どうすればいい！」

浅野がそう歯ぎしりした時、カーナビのテレビから圭一の歌が流れしてきた。エンジンは切れていなかったようだ。

圭一は「アメイジンググレイス」を歌っている。

女の様子が変わった。力が抜けて行くように動きが緩やかになっていった。

「!」

浅野は車に入り、カーナビの音量を上げた。

圭一の清廉な声が響いた。

女はとうとう動かなくなった。

浅野は五芒星を引いた。そして人差し指を額にかざし、

「封印!」

と叫ぶと、女が消え、リュミエルの帯だけがするすると落ちてきた。

「やった…」

浅野がその場に膝をついた。

沢原が驚いて浅野の傍にかがんだ。

「大丈夫ですか!」

「ええ…」

浅野は息を切らしながら答えた。

子猫に戻ったキャトルが、沢原の車の上で箱座りをして、あくびをした。

小さくなったリュミエルはそのキャトルの背に倒れ込むように乗っ

かっていた。

……

翌日、ニュースらしいニュースもなかった。

沢原は「あれ？」とテレビを見ながら呟いた。
昨日、何かあったような気がするのだが……。

「何か夢見たのかな？」

沢原は首を傾げた。

携帯電話がなった。

恋人の末希からだった。

「はいはい。……ん、構わないよ。今から車でそっちに向かうから。
で、昨日は同窓会だった？口説かれたんじゃないか？……なかった？……嘘だろう？……わかったわかった……とにかく今から迎えに行くから。」

沢原は笑いながら電話を切った。

……

沢原は車の運転席のドアを開いた。

「……！……そうだ……！」

沢原は助手席側に回った。

「？あれ？」

助手席側のドアには、傷一つない。

「やっぱり夢か…。浅野さんがマジシャンだからって、ファンタジーな夢見ちゃったな！」

沢原はシートベルトをつけ、サイドブレーキを下ろすと、車を発進させた。

……

対して、浅野は自宅でぐったりとベッドで体を横たえていた。

「神経が持たん…。」

浅野はそう呟いた。

多分、あの悪魔の女は誰かに召喚され、浅野の命を狙ったのだろう。ちなみに悪魔と魔女は別物である。悪魔は基本的に性別はないので、女の形をした悪魔というのが正しいだろう。

（沢原さんには悪いことしたなあ…。）

悪魔の誘導を振り切るなんて、よほどの精神力がないとできない。普通は意識を奪われるはずなのだ。

「お礼を言いたいけど…言う訳にもいかないしなあ…。」

そう浅野が呟いた時、呼び鈴が鳴った。

浅野は起き上がらなかった。
人差し指を額にかざした。

「転送」

そう言うと、ベッドの傍に、キャトルを抱いた圭一が現れた。

「びっくりした！」

圭一が言った。浅野が力無く笑った。

「昨日…大変だったそうですね…。」

圭一が言った。肩にはリュミエルが座っている。

「ああ…。でも君の歌のお陰で、なんとか封印できたよ。」
「そうですか…。」

圭一が少しほっとしたように言った。

「浅野さん、何か食べましたか？」

「うんにゃ」

「じゃ何か作りますよ。待ってて下さいね！」

「はい」

圭一は浅野の呑気な返事に笑いながら、部屋を出て行った。
リュミエルとキャトルが、浅野の枕元に残っている。

「君らも疲れただろう？」

リュミエルがうなずいた。キャトルは「にゃあ」と鳴いた。

「ほんと助かったよ。封印を解く自信なかったけど、君達の助けがあったお陰で解けた。俺はマスターでもないのに、ありがとな。」

リュミエルがぷいと横を向いた。顔が赤くなっている。照れ臭いのだろう。キャトルは嬉しそうに「にゃあ」と鳴いた。

「でも…圭一君の歌は、本当の悪魔まで癒すんだなあ…。本人が気づいてないのが、またじれったいけどな…」

キャトルは「にゃあ」と鳴いた。

「お前はすぐ寝ちゃうじゃないか…」

浅野が笑った。

その時、玄関の方から圭一の声がした。

「浅野さーん！買物行って来まーす！今日ハンバーグでいいですかー？」

「圭一君の手作りかい？」

「もちろんです！食堂より美味しいの作りますよー！」

「よっしゃー！気をつけてねー！」

「はいー！」

玄関が閉まる音を聞いてから、浅野は「あーあ」と言った。

「この穏やかな時間、いつまで持つのかな…。」

リュミエルとキャトルが一緒にため息をついた。

(終)

第5章・守護天使の恋・

（…圭一君って天才だっ！！）

浅野俊介は、ステージでパートナーの「木下雄一」と激しいダンスを披露している北条圭一きたじょうを客席から見て思った。

圭一が所属しているユニットはいくつかあるが、その中の1つがこの雄一とパートナーを組んでいる「Firstファースト」だった。元々はこのユニットがデビューだと言う。

ステージで圭一がマイクを持ち直して歌いだした。オペラを歌う時とは全く違う、低い男らしい声。

踊りながらにも関わらず、声がぶれていない。

（なんか…いつものお坊ちゃんらしくなくて、大人っぽくなるんだなあ。…でも、僕はオペラを歌う圭一君の方が好きかな。）

そう思いながら、浅野はステージで汗を飛ばしながら歌い踊る圭一を見ていた。

曲が終わった。周りのファンから歓声が上がる。浅野が思わず耳を塞ぎそうになるくらい、奇声が飛び交った。

浅野は苦笑しながら拍手をした。

隣に座っている圭一の恋人のマリエが、拍手をしながら浅野を見た。

「耳痛いでしょ？浅野さん。」

「すごいですね。…こんな大スターと自分が一緒に仕事をしていることが信じられないですよ。」

浅野がマリエに言った。マリエが笑った。

マリエは圭一より2歳年上で、日本人とフランス人のハーフであるが、フランス人の血の方が濃いようだ。目は蒼く、肌は透き通るように白い。髪の毛は金髪だそうだが、目立つという理由でいつも濃い茶色の長髪のかつらをかぶっている。

圭一と雄一が客席に手を振り、上手にかみて去って行った。

司会者が現れ、次の曲の紹介をしている。

浅野とマリエはそっと席を立ち、客席を後にした。

……

「浅野さん！ありがとうございます！」

汗を拭きながら圭一が言い、手を差し出した。浅野がその手を握った。

「また違う圭一君が見られて感動したよ。」

「ありがとうございます。」

圭一がタオルを首にかけると、マリエがペットボトルのミネラルウォーターを圭一に手渡した。圭一とマリエはためらわず「チュッ」とキスをした。

「……」

浅野が面食らった。後ろで雄一がくすくすと笑っている。

「圭一、浅野さんがびっくりしてるで。」

それを聞いた圭一が顔を赤くした。マリエが「フランス式ね。」と浅野に言った。

「いや…構わないけど…。びっくりしたよ。」

浅野が頭を掻きながら言った。圭一が「すみません」と言った。

「あ、雄一…」

圭一が雄一の傍に寄って言った。

「明日な、新曲の打合せがあるんやて。雄一のユニットの収録時間で何時からやった？」

浅野はまた圭一の大阪弁に驚いた。圭一の出身は大阪だとは知っていたが…。

「明日は、昼の1時から4時まではおらへんで。」

「そうか…ほんなら、帰ってくるの待ってるわ。」

「ええんか？」

「うん。またバーも手伝うつもりやし。」

「わかった。ほんなら5時ごろって思っというて。」

「わかった。」

マリエが圭一に呼びかけた。

「ケイイチ、外で待ってるから。」

「うん。」

マリエが出て行った。

浅野が一緒に出て行こうとした。

「浅野さんはいいんですよ。男同士だから。」

圭一が笑いながら言った。

「いやそうだけど…マリエちゃんと一緒にいるよ。」
「わかりました。」

圭一が会釈した。雄一が奥で頭を下げている。
浅野も返礼して、部屋を出た。

……

明良が車の横に立って待っていた。
圭一達が明良に駆け寄った。

「お疲れ様。」

明良がそう言い、運転席に乗った。圭一、マリエ、雄一が後部席に、
浅野が助手席に乗った。

（副社長が自らお出迎えか…）

こういうところは、ちゃんと経費節減してるんだな…と浅野は思った。

……

「雄一君は家かい？」

明良が運転しながら、バックミラーで後部座席をちらと見ながら言った。

「はい、ありがとうございます。」

「圭一とマリエはうちだな。」

「うん。」

浅野は「え？」と言った。

浅野はバーの仕事があるので、プロダクションだった。

「あの…じゃあ、私は適当なところで降ろしてもらえれば…。副社長も家に…」

「ああいや、私は仕事があるので、プロダクションに戻りますから、いいですよ。」

「そうですか。」

浅野はほっとして言った。

……

雄一、圭一、マリエを降ろして、明良と浅野の2人だけになった。黙っていると、息が詰まりそうなので、浅野が口を開いた。

「相澤プロダクションは、社内恋愛に寛大なんですネ。」

「あー…タレント事務所によっては禁止してるところもあるようですね。」

明良が言った。

「でも、若い子に社内だろうが社外だろうが恋愛を禁止するのは可哀相ですよ。それで人気がなくなるとかいいいますが、今は時代が違います。なくなる時は他の理由でもなくなるんですから。」

「…なるほど…」

浅野がうなずいた。（いい人だなー）と思った。

「ん？」

明良が何かに気がついた。

「すみません…ちょっと時間いいですか？」

「？はい。」

バーのオープンまで、後1時間はある。

明良がハザードランプをつけて、車を路肩に寄せた。

浅野も気がついた。歩道に女性がうずくまっている。

明良が車を降りた。

浅野もドアを開いてでようとした。

だが、心臓がドクリとした。

明良が「どうしました？」と女性の背中に触れた。

「！副社長！！」

浅野が叫んだが遅かった。

明良が頭に手をやり、その場に崩れ落ちた。

女が明良に手を伸ばした。

浅野は人差し指を額にかざし、「転送！」と言った。
女が消えた。どこへ飛ばしたか浅野にもわからなかった。
本当は封印したかったのだが、紋を描く間がなかったのである。

浅野は明良の体を抱き上げ、開いたままのドアから、助手席に座らせた。

……

浅野は車を走らせた。明良は目をさまさない。

（あの女は副社長に何をしようとしたんだ？）

浅野はあの女の悪魔が、明良に危害を与えようとしたのではないように思えた。

浅野は気を失っている明良をちらと見た。

（…色男というのは、この人のことを言うんだな…）

浅野はそう思った。ふとバックミラーを見ると、さっきの女が後部席にいる。

「……」

浅野は危険を感じ、車の少ない海の道へと入った。プロダクションとは真反対方向だが仕方がない。

浅野はブレーキを踏み車を止めた。この女形の悪魔は、前の悪魔と違って大した力はないようである。

浅野は後部席にいる女に振り返った。

「副社長に何をするつもりだ？」

「魔界に連れていくの…」

「！？…」

「私と一緒に魔界で暮らしてもらうの…」

「勝手な事を言うな！この人にはもう奥さんと子どもがいて、今、幸せな生活をしてるんだ！」

「私だって悩んだわよ！でも…本当に好きなんですもの…」

「…ちよつと待て…お前悪魔じゃないな…副社長の守護天使か！」

女はうなずいた。

天使が人間を愛してしまうと天から落とされる。…つまり堕天使となる。また人間界で交わって子どもを作ってしまったら、産まれてきた子どもまでが悪魔になってしまうのだ。

つまりこの女はもうこの時点で堕天使なのだが、もしかすると明良と交わる事まで考えているかもしれない。そのために女形になっているのだ。

産まれてくる自分の子が罪もないのに魔界へ落とされることをわかっていて、その上明良の幸せな生活を奪ってまで貫こうとするこの女の愛は、天使的にも人間的にも誤っている。

「お前それでも守護天使か…！」

「いいの…もう天使じゃなくなったんだもの…。」

「それが勝手過ぎるって言うんだ…！」

「だって私は、誰よりもこの人と長くいたのよ…！」

「…そりゃ…守護天使だからそうだろうけど…だからこそ、この人の幸せを奪ってはいけないんじゃないか？」

女が泣き出した。

「だって好きなんだもの…」

「わかるけどさ…これだけ色男で、幼い時から苦勞してて、性格もよかつたら…そりゃ惚れてしまうのもわかるけど…それならリュミエルを見習えよ。リュミエルは圭一君を愛したために墮天使になつてしまつたが、圭一君に純愛を貫くためにずっと男姿で…悪魔になつても傍にいろんだぞ。それこそが本当の愛じゃないのか？…副社長が不幸になろうと自分と一緒に魔界に来て欲しいと言うのは、天使じゃなくても間違つてるよ。」

「…いいの…誰にも私の気持ちなんかわからないの…」

「ああ、わからないね！そんな自己中心的な…」

浅野ははつとした。明良の頭が動いたのだ。

「…ん？…僕は…？」

明良が浅野を見た。

「…？…どうしてあなたが運転を？」

「え…いや…その…」

「あ…あの人は！？…道でうずくまつてた…」

「あ、ああ…ここにいますよ。病院に連れて行くかうと思つたんですが…」

明良は後部席の女を見た。

女は目を見開いて明良を見ている。守護天使がマスター（主人）に気付かれることなんてそもそもないことだ。

…しかし女はもう天使ではないが…

明良は「良かった…」と言って微笑んだ。

「すみません。どうも私の方が具合が悪くなってしまったようです
ね…。時々あるんですよ…」

明良が浅野に申し訳なさそうに言った。

「！？時々？…よく倒れるんですか！？」

「ええ…このところ頻繁に…」

浅野は思わず女を睨みつけた。女が下を向いた。

（おまえ…副社長に気を失わせて何をやったんだっ！！）

そう言いたいのが、言えない。

浅野は「とにかくプロダクションに行きましょう。」と言った。

「え？でもこの方を病院に…」

「いえ。もうすっかり具合がよくなったようなので、副社長をお送りしてからこの人を家までお送りしますよ。ちよっとお車お借りすることになりますか。」

「それは構いませんが…でも私は後で…」

「だめです！今は副社長の方が顔色が悪い…とにかくプロダクションに戻って休まれた方がいいです。」

「…そうですか…」

明良は後部席の女に再び向いて、申し訳なさそうに微笑んだ。

「すみません。…助けるつもりがこんなことになってしまって…」

女は首を振り、涙ぐんで下を向いた。

……

3人（？）は黙ってそのままプロダクションに向かった。
明良が「音楽かけていいですか？」と運転する浅野に言った。

「ええ。もちろん。」

明良はカーナビを操作し、再生ボタンを押した。
圭一の『ライトオペラ』の曲が流れた。

「！！」

浅野は思わず、バックミラーで後部座席の女を見た。様子は全く変わらない。だがじつと聞き入っている。

浅野はほっとしたように前を見た。

（まだ天使なのか？…そういうや、リュミエルも平気だったな…元天使は大丈夫ってわけか。）

浅野がそう思っていると、明良が口を開いた。

「圭一の新しいアルバムなんですよ。…もうすぐ発売になります。」
「あ！そう言えば、この曲聞いた事がなかった…うわー！レアですねー！！」

浅野が思わずはしゃいでそう言うと、明良が笑った。

「シングルだけ先に出していたんですが、とても好評だね。この曲のためにアルバム製作を圭一に急がせました。…これは沢原君が作った曲なんですよ。」

「えっ！？そうだったんですか！…クラシックぽいから、クラシックをベースにしているのかと…」

「いえ。完全な沢原君の創作です。…よくできてます。」

明良の言葉に、浅野がうなずいた。明良は続けた。

「歌詞は英語ですが…愛する人を事故で亡くし…残された男が何もしてやれなかったと嘆く歌です。」

「…！…沢原常務の…実体験なんでしょうか？」

「さあ…。悲しい歌ですが、私は好きでね。…私も死んだ姉に何もしてやれなかった…。」

明良はこの姉が死んだことで、親族を一切失い独りきりで生きてきたのだった。その過去をすべて見ている浅野は黙っていた。

「でも…私が生死をさまよった時…その死んだ姉にあの世の入り口で会いましたね…。自分の分まで幸せにならなきゃ、こっちへ来てはいけない…と言われました。」

「…！」

浅野はまた、思わずバックミラーで後部席の女を見た。女も下を向いたまま目を見開いている。

「…今は…いい妻に会えて、できすぎた息子を持てて…一番幸せな生活を送らせてもらっています。…もう死んでもいいかな…と思う事もあります…」

「…！だめですよっ！副社長はまだ30歳越えたばかりじゃないですか！これからまだまだ幸せなことがありますよ！」

浅野が慌てて言った。後ろの女がそれを信じたら、魔界へ連れ込む

理由になつてしまふからだ。
明良が笑つた。

「…ありがとう…私も…今はこの幸せにまだ浸つていたい…それが本音です。」

浅野がほつとした表情をした。
明良は後ろの女に振り返つた。

「…あなた…死のうとなさつていましたね？」

「！？」

「！？副社長…」

女も浅野も驚いた。

「間違つていたらすいません。…何故か感じたんです。あなたの…
なんというか…悲しんでいる何かを…」

明良の言葉に、女は目を見張つて明良を見ている。浅野はそんな女の表情をバックミラーでちらと見た。

「…幸せはなかなか手に入れることはできないものです。…今、幸せな私が言つても…あなたの心に響かないかもしれないかもしれませんが…幸せは必ず来ます。それを信じなければ…幸せが近くに来てても気づくことができません。」

女の目から涙がこぼれた。

「今、このアルバムで歌っている息子も…初めて会つた時は…笑顔一つ見せてくれなかった…。それが今は天使のような笑顔を見せて

くれます。…あなたにも…笑顔が戻るように…祈ります。」

明良の言葉に女は両手で顔を塞いだ。
そしてそのまま消えた。

「!」

明良が驚いて身を乗り出した。

「やばっ！副社長すいません!!」

浅野が指を鳴らした途端、明良は目を覚ましたような顔をした。

「?????」

「副社長、お目覚めですか？」

「え?…あれ?…私はどうして助手席に…」

「めまいを起こされたようです。」

「運転中にですか!？」

浅野が苦笑した。

「…ええ。それで交代しました。」

「すいません!…事故なんか起こしたら…大変なことになるところ
だった…」

「最近お疲れじゃないんですか?…今聞いているこのアルバム…か
なり製作を急いだようですし…」

「あ…」

明良は今、アルバムが鳴っているのに気付いたようである。

「…そうだ…そうです…。圭一にもしんどい思いをさせて…」

「…今日はもう、お帰りになった方がいいんじゃないですか？」

「いえ…あと一仕事残っているの、それが終わってからにします。」

「

「そうですか。…ではこのままプロダクションに向かいますね。もうちょっと眠って下さい。」

「ええ…すいません。」

明良はシートベルトを直し、前を向いて圭一の歌を聞くように目を閉じた。

（…あの女は…独りで魔界へ落ちてしまったか…）

浅野はそれを感じて、ほっと息をついた。…しかし…可哀相だな…と今になって思った。

（終）

第6章・悪魔の道化師・

（圭一君って…何？何でも出来過ぎ…）

浅野は今、一般のジャズコンサートの客席にいる。

ステージでは、圭一の恋人マリエがジャズを歌い、圭一がピアノ伴奏をしていた。

（オペラは歌えるし、ダンスも踊れるし、ピアノも弾けるし、大阪弁まで堪能…）

最後の大阪弁は余計だと思うが、それほど浅野は感動していた。

（でもやっぱり俺は、オペラを歌う圭一君がいいな。）

浅野はそれを再確認した。正直、今、圭一のオペラが聞きたかった。曲が終わり、拍手の中マリエと圭一が頭を下げた。浅野の隣には「美しきバイオリニスト」秋本と一緒に拍手をしている。

「よかった…成功のようだな…」

秋本が呟いた。

基本的にマリエと圭一はアイドルなのだ。そのため「アイドル風情があちこち首をだすな。」というバッシングもあるという。

秋本は浅野に目配せをした。浅野がうなずいて、そっと席を立った。

楽屋に行くと、マリエが涙を拭い、圭一の椅子に座ってうなだれていた。

「!?!?どうした!」

秋本が驚いた。浅野も驚いて、圭一の傍にかけよった。

「…全力は尽くしたんですけど…」

マリエが涙を拭いながら言った。

「やっぱり…素人ですよ…」

「何か言われたのか?」

秋本がマリエに尋ねた。

「いえ…何も…。でも…会場の雰囲気わかります。」

秋本と浅野は顔を見合わせた。

「…そうかな…俺にはそんな印象…なかったけど…」

浅野が呟くように言った。

「俺にもなかったよ。客席にいたけど…」

秋本も言った。

だが圭一達は、顔を上げることはなかった。

……

浅野はバーのカウンターの中でぼんやりしていた。

客がない。だが売上のノルマなどないので気にすることはないのだが。

圭一は今日は来ないと言う。

ジャズコンサートのショックが大きいのだ。

（そんなに、素人っぽかったかな??）

浅野は思った。

バーのドアが開いた。入ってきたのは秋本だった。

「常務…お疲れ様です!」

浅野がそう言うと、秋本が苦笑した。

「常務はよして下さい…。」

秋本も元気がない。

「何飲まれますか?」

おしぼりを渡しながら、浅野が言った。

「今日は強い酒が飲みたいな…」

秋本が言った。

「じゃあ…テキーラで？」

「うん。ショットで。」

浅野が頷き、ショットグラスにテキーラを入れた。秋本はくいつと飲み干した。

「おかわりを…」

「……」

浅野は空のショットグラスに、テキーラをついだ。

「秋本さんまでどうしたんですか…」

何かおかしい……と浅野は思った。

（このプロダクションで、こんな暗い雰囲気は…）

浅野は、はっとした。

（そうだ…いつもの清浄なプロダクションじゃない！）

浅野は辺りを見渡した。

そして、窓を見て目を見開いた。

小さなこつもりのような形をした悪魔が窓の外で群がっている。
浅野にもさっきまでは見えてなかった。

（俺まで惑わされていたのか！）

浅野は秋本に向いて言った。

「秋本さん…今日は飲むのはやめましょう…。バー閉めます。」
「え？どうして？」

悪魔が群がっているなんて説明できない。

「圭一君たちのあの落ち込みを見たら…何かやる気なくなっちゃって…」

「そうだな…」

秋本がテキーラを飲み干した。

「帰るか。」

「すいません。」

「いや。」

「タクシー呼びますね。」

「…ありがとう…」

秋本は力無く言った。

……

（インプの仕業だったか！）

浅野はプロダクションビルの屋上にいた。頭上には満月が煌々と照っている。

インプとは、下級悪魔で悪魔の子どもたちのことを言う。子どもだから悪意はあまりもたないものの、逆に悪意がないために残酷な結果をもたらすこともある。

（さすがにビルの中には入れないようだが…あれだけの数が集まると人の精神を惑わせるってわけだ…。それも誰かに、人間のやる気を失わせるよう命じられているな…）

ビルの上から、こうもり形のインプが群がる様子をみながら浅野は思った。

このままインプを放置すると、どんどん増殖を進め人間界がすべてやる気のない状態になってしまう。

（しかしこの数…俺の手に負えるか？）

浅野は「ん？待てよ？」と呟いた。

（…元々は、コンサートで圭一君とマリエちゃんが、楽屋で落ち込んでたところから始まったんだ…ということは…）

「やばいっ…！」

浅野は思わず叫んだ。

「圭一君がインプを連れて家に帰ってしまってる…！」

（それだけじゃない…マリエちゃんだって家に…。）

と思っただけから、浅野は思わず両手で自分の頬を抑えた。

「ムンクが叫びたくなる気持ちかわかるーっ…って、そんなこと言ってる場合じゃない…！」

言っただけから、浅野はその場に崩れるように、四つん這いになってし

まった。

「…秋本さんをタクシーで帰してしまった…」

秋本のマンションにもインプがついて行っているだろう…またその上に…

「秋本さんが乗ったタクシーにもインプがついてる…。そのタクシーにお客がたくさん乗れば乗るほど、インプが増殖…」

浅野はよろよろと立ち上がり柵に両手をついてうなだれた。

「駄目だ…収集がつかない…どうすればいいんだ…？」

一か所ならば、圭一の歌を聞かせて動きを封じ、封印すればいいが…これだけあちこちに散らばっていると…。

（一か所…？…一か所にまとめればいいのか…。じゃあここに…）

浅野は屋上を見渡した。

（ここになんとかインプ達を集めることができれば…しかしどうやればいい？）

浅野はしばらく考えてから、ふと呟いた。

「…まずリュミエルに連絡を取ってみるか。」

浅野は人差し指を額にかざし「連絡！」と言った。

…何も起こらず「ん？」と浅野は眉間にしわを寄せた。

「！…連絡って、中学のホームルームかつ！！どれだけ俺は動揺してるんだよ！」

と頭を抱えて叫んでから「もといっ！」と気を取り直し、再び人差し指を額にかざした。

「交信！」

リュミエルの姿が見えた。そのとたん浅野は「あ、無理だ」と呟いた。

リュミエルと獅子の姿になったキャトルが、圭一のマンションの外に群がるインプ達と必死に戦っている最中だったのだ。

浅野は指を下ろし、交信を切った。

「…やりたくはないが…誰かを召喚しなくちゃならないな…！！そうだ！ニバス！！」

浅野は、六芒星を一筆書きで自分の前の空間に書くと、人差し指を額に当て「召喚！」と叫んだ。

道化師の姿をした男形の悪魔が現れた。目は見えないようにスカーフのようなもので覆っている。

悪魔の道化師ニバスは、浅野に抱きついてきた。

「俊介…久しぶり…」

「ニバス…元気だった？」

「うん。」

ニバスが浅野から離れて、にっこりと笑った。姿は浅野と変わらな

いくらの青年のようだが、言葉は幼児っぽい。

「どうしたの？また遊び方教えて欲しいの？」

ニバスは人を楽しませるのが上手な道化師である。悪魔の宮廷では道化師長を務めるほどの腕を持つ。だが、一方では大いなるペテン師で、自分でつく嘘をごまかすために自分の目を覆っているのだ。

「いや…実はインプ達が暴れていてね。ニバスの技でインプ達を楽しませてやって欲しいんだ。」

「ふーん？いつたいどうしたの？」

「よくわからん。…誰かがインプ達に何かを命じたみたいなんだけど…」

「ちょっと待って…」

ニバスは浅野と同じように人差し指を額にかざした。

「…人間に呼び出されてるよ。」

「！？なんだって？…人間にできるのか！？」

「悪魔に魂を売った奴がいるね。そいつがやったんだ。…インプくらないなら人間でも呼べるから。」

「そいつが誰だかわかるか？」

「顔は浮かぶけどうまく口で言えない…」

「そうか…じゃあまあいいや…」

「インプ楽しませたら、何かくれる？」

「あ、そうだな…うーんと…あ！これ人間界でしか採れないものなんだけど…」

浅野は首にかけていたシルバーのネックレスをはずした。

「銀っていう鉱物でできているんだけど…いる？」

ニバスが目を輝かせたかどうかスカーフで覆われてわからないが、手でそれを探るように掴むと嬉しそうにした。無機質なものは、やはり目で見ないとわからないのだが気に入ったようだ。

「これくれるの？」

「あげるよ。今、つけてやろう。」

浅野はニバスの首にネックレスをつけた。ニバスがにこにここと笑った。

「…似合う？」

「似合う似合う！赤いその衣装に映えて光ってるよ。」

「ほんとっ！？ありがとう！俊介ー！」

「いえいえ。…インプ達を楽しませてくれれば安いもんだ。」

「わかった。」

「インプ達を呼びよせることができる？」

「もちろん！」

ニバスはさつと掌を上に向けた。小さなラッパが現れた。

そしてそのラッパを高らかに吹いた。

すると人間に見えていたらぞつとするだろうほどの、こつもり形のインプの集団が集まってきた。

（ひー…こんなに増えていたのか！！）

浅野は自分の失態を今さらながら反省した。

「はい！二バスのショーが始まるよー！！」

二バスが両手を振りながら言った。インプ達はきゃっきゃっと声を上げながら、二バスの周りに集まった。

浅野は柵にもたれ、その様子を離れて見ることにした。

（可愛さは全く違うけど…施設の子どもの目と同じだ…）

浅野はふと思った。

浅野は乳児院に捨てられていた子どもだった。その時点でもう羽が背中に生えていたという。大きくなるにつれ隠すことができるようになったが、羽が白いにも関わらず、当時の施設の従業員達に「悪魔の子が来た」と気味悪がられた。

ただ院長だけが、他の子どもと分け隔てなく浅野を見守ってくれたおかげで、浅野はぐれることなく成長した。施設を出て自立しても時々施設に行つては、マジックをその施設の子どもたちに見せていた。

（…そういや…悪魔に追われるようになってからは行つてないなあ…）

浅野はインプ達が楽しそうにしている姿を見ながら思った。

（…今度はいつ行けるんだろう…。悪魔に追われてる身では行けないし…でも…あの皆の笑顔をみたいなあ…笑い声が聞きたい…）

浅野はふとこぼれた涙を拭いた。

「さあ！ここでは終わりだけど、まだ二バスのショーを見たい人っ！！」

ニバスがそう言うと、インプ達が皆立ち上がって声を上げ、手に持った小さな槍を上下に振った。

「よし！じゃあ魔界まで競争だ！」

「！？」

浅野は驚いてニバスを見た。そこまでやってくれるとは思わなかった。

ニバスは「これ…ありがと！」と言って、首元のネックレスを指でつついた。

浅野は微笑んでうなずいた。

「また…遊びに来いよ。ニバス。」

「うん！俊介大好き！」

ニバスはそう言って空を飛んだ。インプ達はそのニバスについて行く。ニバスとインプの集団は満月に消えて行った。

「…死ねば…ニバスにも会えるだろう。」

浅野は微笑みながらそう呟いて、しばらく満月を見ていた。

（終）

第7章・蛇の悪魔・

（今度は…ドラマってか。）

浅野は圭一のドラマ撮影に、マネージャーと称してついて来ていた。圭一の役は不良役で「First」のパートナーの雄一が優等生役だという。

ドラマの内容は、圭一が演じる不良「巽」と雄一が演じる優等生「乾^{いぬい}」が、お互い反発しながら、また協力しながら学園で起こる事件を解決していくという内容だった。

またこの「巽」には、水戸黄門さま並みの見せ場があるという。

今日はその収録だと言うので、圭一の父明良に許可を得て、同行させてもらったのだ。

（水戸黄門様並みの見せ場ってなんだろう？…印籠の代わりに警察バッジをだすとか？あ…あれはスケバン刑事だったか…。）

と、浅野がノスタルジーに浸っていると、学ランを着て髪をびしっとまとめた「巽」役の圭一が、挨拶をしながらスタジオに姿を現した。

（かあっこいいいいいい！！）

浅野が女の子なら「きゃーっ！圭一くん！」というところだろうか。

圭一が浅野を見つけて、手を振ってくれた。

浅野はあわてて顔を引き締めて、手を振り返した。

（後で写真一緒に撮ってもらおう。まじで。）

浅野はこっそりガッツポーズをした。

圭一は長い棒を持っていた。

ライトが煌々と光る下で、監督に何かを指示され、うなずいている。監督の持っている台本を確認し、圭一がうなずくと監督が離れた。

「巽！軽く回して！」

監督がそう言うと、圭一は棒を片手でくると回し始めた。最初はドラムのスティックのように、軽々と指先で回していたが、そのうちに手で掴むと、右に左にヌンチャクを回すように振りまわし始めた。

「……！」

浅野は息を吞んで見ていた。

圭一は、棒をひゅんひゅんと言わせながら回して、何かを監督に言った。

監督が耳に手を当てて、もう一回言ってくれと言った。

「今回は折らないでしたよね！？」

圭一が言った。

「ああ、折らないよ！」

監督の返事に、圭一がうなずいた。

（折るって…あの棒を折るのか？）

浅野はぞっとした。

「よし！巽行くか！…不良役とり八行こう！」

「はい！よろしく願います！」

監督の言葉に、圭一は棒を止めて頭を下げた。

不良役達が出て来て、圭一に頭を下げた。圭一も頭を下げている。

（不良役も丁寧だな…って、役者だから当たり前か…）

浅野はもはや現実と混乱している。圭一が本当に「巽」という不良に見えてきたのである。

助監督が手を上げた。

「リ八行きまーす！…よい…アクション！」

圭一が、棒を肩に担ぐようにして立って言った。

「おまえらか。乾、連れてったん…。帰してや。」

（おおお…大阪弁…）

浅野はときどきしながら見ている。

不良役の1人が圭一の前に進んで行った。

「大阪の奴が、調子に乗ってもらったら困るな。ただで返すわけないだろ？」

「ほな、なんや？なんか出せってか。」

「…なんかってわかつてるな。」

「わからんなあ？」

「ふざけるな！…お前がヤク全部隠したんだろ！？…あれがなかったら、俺ら殺されてしまうんだぞ！」

「もう遅いわ。」

「！？…なんだと？」

「…警察や。」

「嘘だ…！」

「嘘ついてどないすんねん。」

「…こうなったら…力ずくでも隠し場所言ってもらう…おい！やれ！！」

そう言つて、1人が体を引くと、不良役達が圭一…じゃない「巽」に襲いかかろうとした。だが圭一は持っている棒を大きく振りまわし、けん制した。

不良達があわてて、飛びずさる。

圭一…じゃない「巽」はにやりと笑うと、棒を指でくると回しだした。そのうちに手で掴んで回し始め、又ンチャクのように右左と回し始めた。

不良達は、ひゅんひゅんと音を立てて回る棒の勢いに恐怖を感じ近寄れない。

巽が棒を止め、両手で掴んだところで、不良役達が襲いかかった。棒で応戦する圭一…じゃない！「巽」。立ち回りの動きが早い。よく間違つて叩かないものだと思つた。と浅野は思った。

（誰か1人でもリズムが崩れたら…大けがになるな…）

それほど、スタジオは緊迫していた。

巽が1人、2人と不良役を倒し、最後のリーダー格の不良が逃げ出した。

「こら、待て！」

巽が呼びとめた。リーダーが背を向けたまま立ち止る。

「黙って逃げられたら困るなあ…乾どうしたんや？」

巽はそう静かに言った後「乾どこおるんや！！」と怒鳴った。

（…こわい…ほんとにこれ…あのにこにこの圭一君???）

浅野は訳がわからなくなっている。

「…俺も知らないんです…兄さん達が…どっか連れて行ってしまっ
て…」

「なんやて?…その兄さん達ってのはどこにおるんや!！」

巽が棒を投げ捨てて、リーダーを自分の方に向かせて、胸ぐらを掴んだ。

「は——い、カット——!！」

（これ…リハ?…もう本番でいいじゃない?）

浅野はそう思った。

圭一と不良役がほっとした顔を見合わせた。圭一が手を離して、不良役に頭を下げた。不良役も頭を下げ返している。

「じゃあ、本番行きましょうか！」

(…やっぱりやるんだ…)

浅野は見ているだけで疲れていた。自分なら音を上げていそつだ。

圭一が棒を拾った。

その時…棒が勝手に「パンッ!!」という音と共に折れた。

浅野は驚いて周囲を見渡した。悪魔の類は見えない。

圭一は驚いて手を振っている。

見ていたスタッフがびっくりして、勝手に割れた棒を見た。

「!!…どうした!?…どうして割れた!?」

監督が言った。誰もどまどつたように顔を見合わせて、わからないというように首を振っている。

「…ひびが入っていたわけじゃないよね…。それなら振りまわしている最中にとくに割れてるし…」

助監督が言った。

「とにかくスピアの棒、持ってこい!!」

監督の言葉にスタッフの1人が「はい！」と返事をして、スタジオを出て行った。

「異、待つてね。」

監督の言葉に圭一がうなずいた。少し不安そうにしている。

浅野が今のうちにと、ミネラルウォーターの入ったペットボトルを持って、圭一に駆け寄った。

「…一口飲むかい？」

「あ、すいません。浅野さん…」

「びつくりしたね。」

「…ええ…浅野さん、何か感じませんか？」

「いや…それが何も…」

「ならいいんですが…」

「圭一君は感じるの？」

「あ、いや、そうじゃないんです。偶然ですよね。」

「そうだと思うけど…。ちょっと気を研ぎ澄ませておくよ。」

「はい。すいません。」

圭一がそう言つて、ミネラルウォーターを一口飲むと、蓋を閉じて、浅野に渡した。

「がんばってね。」

浅野がそう言つと、圭一が微笑んだ。

（良かった…やっぱり、いつもの圭一君だ。）

そう思い、浅野はその場を離れた。
そして、人差し指を額にかざし、念を入れた。

何もいないようである…。もっと言うなら、リュミエルの姿も見えない。

（おかしいような、おかしくないような…）

浅野は思った。

「では本番行きまーす！」

助監督がそう言った時、とたんにライトがすべて消えた。

「！！」

全員が息を呑んだ。だが非常口のランプが光ったままなので、真っ暗ではなかった。
停電には違いなかった。

「なんだ？…タイミングが良すぎるなあ…」

監督が冗談のように笑いながら言った。

非常口のランプの薄明かりで、圭一の不安そうな表情が見える。

（やっぱり何かおかしいのかもしれない…。しかし何もいないけど…）

浅野がそう思ったとたん、ライトが一斉についた。
圭一を始め、スタッフ達がほっとした表情が見える。

「よし！今のうちにやっちゃおう！」

監督のその言葉に全員が笑った。

……

浅野は、圭一を助手席に乗せて車を走らせていた。車は明良のを借りてきたのだ。明良は出張でいない。

圭一が呟くように言った。

「…なんだったんでしょ…あの怪現象…」

「うん。まあなんともなかったから、よしとしたいが…気にはなるね。」

「ええ…」

プロダクションについた。地下の駐車場に車を入れ、車を停めた。車から降りてロックすると、2人でプロダクションビルに入った。

（…おかしい…？）

今になって浅野が思った。…何かがおかしい。

「浅野さん…」

圭一も何かを感じている。…しかし、何がおかしいのかわからなかった。

「…とにかく…ビルに入ってみよう。」
「はい。」

2人は覚悟を決めたように、プロダクションビルに入った。

…

「…なんだ？…誰もいない！？」

プロダクションビルの中は空っぽだった。事務員も警備員も誰もいなかった。

圭一は慌てるようにして、専務室に走った。

「母さん！！」

ドアは開いたが、菜々子も菜々子の秘書も姿を消している。書きかけのスケジュール帳の上にペンが落ちていた。

「…どういうこと…？」

圭一の声が震えた。浅野は副社長室に行こうとしたが、出張だったことを思い出した。

「圭一君、すまないが社長室見て！」
「はい！」

浅野は明良に電話をした。
3コールで明良が出た。

「はい？どうしたの？浅野君。」

浅野はほっと息をついた。

「いえ…今日は、いつお帰りになりますか？」

「え？今日は帰れないって菜々子さんには言っただけど…。」

「あ、そうですか！わかりました！すいません。」

「いえ…」

明良が電話を切ったのを確認して、浅野は電話を切った。

（副社長が帰る前に、この怪現象をなんとかしないと…）

浅野は社長室に行った。

「圭一君！…社長も…！？…」

浅野は目を見開いた。圭一が大きな蛇に巻きつかれていた。

「…浅野さん…」

圭一は体を締め付けられ、苦しそうな声を出していた。

浅野はとっさに額に人差し指をかざした。

（だめだ！攻撃も封印もできない！）

圭一がつかまっているため、何もできない事に気付いた。

（どうしたらいい？）

「浅野さん…僕はいいから…」

「だめだ！」

蛇が圭一の体を締め付けた。圭一が声を上げた。

「圭一君！」

浅野は蛇の目を見た。

「やめろっ！なんのためにこんなことをするっ！？」

『忠告したはずだ。…戻ってくるなど。』

恐らく蛇の声だろう。口は動いていないが空間に響いている。

「！？…あの怪現象…」

『そうだ』

「しかしどうして！？…皆をどこにやった！？」

『魔界だ』

「何っ！？どうしてそんなことを…」

『頼まれたからだ。』

「誰に？」

『さあ…人間には違いがないが…』

（誰だ…？）

浅野は頭を巡らせた。

「母さん！」

「！…！」

圭一が叫んだのを聞いて、浅野は目を見開いた。

「母さんを…返せ!!」

強く締められているにも関わらず、圭一が絞り出すような声で言った。

その声で浅野はどうしてこの蛇が圭一を縛り付けているのか…また、帰ってこないように怪現象を起こしたのかわかった。

圭一の歌声を聞きたくないからだ。

聞いて動きを封じられては困るからだ。

浅野は、蛇をけん制しながら、ステレオの中に圭一のCDが入っているのを確かめたが…もし流して、圭一の体を一層絞めるようなことを考えるとそれもできなかった。

(くそ…どうすればいい?)

「…母さん…返して…」

圭一の力がなくなってきた。意識を失い始めているにも関わらず、血のつながりがない母の事を心配する圭一に、浅野は胸を打たれた。

「お願い…」

圭一の意識がなくなり、圭一は蛇の体にぐったりと体を預けた。

「圭一君!!」

浅野は額に人差し指を当て、リユミエルとキヤトルを探した。
しかし見つからない。封印もされていなかった。

蛇が圭一の体をゆっくりと離れた。

「!？」

圭一は蛇の体に添うようにして体を滑らせ、ゆっくりと床に横たわった。

浅野は圭一に駆け寄った。

そして心臓の鼓動を確認し、呼吸が止まっていないかを見た。

『…気を失っているだけだ…』

「!！」

浅野は蛇を見上げた。

『実は…この子を殺せと命令された。』

「!?!?…え!？」

『清廉な歌声を出す魂を…消せと言われてきた。』

『…召喚した人間にか…』

『そうだ…。だが気は進まなかった。だから帰ってこないように忠告した。』

『プロダクションの人間を消したのはなぜだ?』

『この子呼びだすためだった。…何かをやっておかないと、召喚者に怒られるんでね。』

「……」

『…何故この子は、自分の事じゃなく別の人間を心配する?』

『愛だ。…人間に本来あるものだ。』

『そんなもの見たことないがな。』

「ない人間もいるさ。たまたま今まで、お前が見たことがないだけだ。」

『…知らなかった…』

浅野は立ち上がって、蛇の顔の真前に近づいた。

「プロダクシヨンの皆を返してくれ。」

『そうするには私が死なねばならぬ。』

「…!？」

『別に構わないがね…』

蛇は何かを悟っているかのようだ。しかし同情しても、プロダクシヨンの人間は帰ってこない。

「俺に何かできることはないか？」

『ないが…覚えていて欲しい事が1つある』

「?…何だ？」

『この清廉な歌声を聴いて、われわれ悪魔が動きを封じられるのは…まだ我々が救いを求めていることだとわかって欲しい。』

「…!」

『この子の歌声を聴くと、自分の罪深さを強く感じてしまうんだ。だから…この子の歌声で動きを封じ込めた後は、我々を封印するのではなく、できれば完全に消して欲しい…』

「!??どうして!？」

『我々は、どんなことがあっても救われないからだ。ならばいつそのこと消えてしまった方がいい。』

「……」

『…早速、私を消してもらえないか?』

「!??」

『私が消えれば、同時にこの人間達が戻ってくる』

「！？…いや…申し訳ないが…私にはそんな力はないんだ…」

『そうだったか…あるように思ったのだが…』

『すまないな…』

『いや。…じゃあ、召喚者に頼むでしょう。』

「！！！！」

蛇は消えようとした。

「待て！…やってみる！！」

蛇が振り返った。

『…本当か？』

「ん…圭一君の歌声の力を使ってもいいか？」

『もちろんだ。』

浅野はステレオに寄り、再生ボタンを押した。

圭一の歌声が流れた。「神の御子は今宵しも」という讃美歌だった。

蛇はとぐろを巻いて、じっと動かなかった。

やがて目を閉じた。

浅野が両手から気を送った。…やがて蛇は石化した。

浅野は丸の中に三角形を描き、人差し指を額にかざした。

「転生！」

蛇の体が崩れ落ち消えたが、新しい光が生まれた。

「…消滅なんて無理だよ。」

浅野はそう言っ、飛ぶ光を両手で受けた。

「悪魔の赤ちゃんだ。」

浅野はそう言っ、微笑んだ。

「いつか必ず救いが訪れますように…」

光は天井へ舞い消えて行っ。

「…とと、急げ急げ！」

浅野は慌てて、圭一の体に手を置き、人差し指を額にかざした。

「転送！」

その声とともに、2人の姿が消えた。

社長の相澤が間髪で入っ。

「あれ？鍵閉めるの忘れてたっけ？…ま、盗まれるのもないけどな。」

相澤は鼻歌を歌いながら、椅子に座った。

……

浅野は医務室にいた。圭一を寝かせている。

「圭一君!!」

菜々子が慌てて入ってきた。

「圭一君が倒れたって…」

「ええ…ちよつと疲れていたようですね。」

「…気がつかなかったわ…母親失格ね。」

「そ、そんなことはないですよ!…圭一君って、結構ぎりぎりまで我慢する人だから…」

「…そうなのよね…本当の母親なら何か勘が働くんだろうけど…」

浅野が否定しようとした時、圭一が目を覚ました。

「!?!圭一君!!大丈夫!?!」

「母さん…?」

「ええ…私だけど…大丈夫なの?」

「…!!…」

圭一がいきなり起き上がって、菜々子の体に抱きついた。

「!?!圭一君!?!どうしたの!?!…何か夢でも見たの!?!」

その時、明良が飛び込んできた。

「圭一!!」

「!?!…副社長!?!」

浅野を始め、全員が驚いた。

「浅野君からの電話が何かおかしかったから…心配になって帰って来たんだ。」

「え…あ…すみません…」

「圭一が倒れたって聞いて、やっぱり…って…」

浅野と圭一はふと目を合わせて、下を向いた。

「浅野君…圭一に口止めされたんですね。」

「え？いえ…私が勝手にその…」

「これからは、ちゃんとやってください。…ただでさえ圭一は…私達に気を遣って、わがまますら言ってくれない…」

「…父さん…」

「お前も…体のこととか…耐えるのはやめるんだ。…逆に私も菜々子さんも辛くなるから…」

圭一の目から涙がこぼれた。

「はい…ごめんなさい…」

「やだ！もう明良さんっ！！」

菜々子が明良の腕をバシッと叩いて言った。

「…圭一君、怒ってる訳じゃないのよ。心配なだけ。」

「そっなんだ…ごめん…圭一…」

明良が腰をかがめて、圭一の背中を撫でている。

浅野は微笑んで、そっと医務室を出た。

キャトルが足元にいた。

「おおっ！キャトル！どこにいた！？」

キャトルが浅野の肩に飛び乗った。

「よかったよかった…リュミエルは？」

反対側の肩にリュミエルが現れた。

浅野は周りを見渡して、瞬間移動した。

……

非常階段の3階部分で、浅野はリュミエルとキャトルと話していた。

「で、リュミエル…どこにいたって？」

「…魔界の果てだよ…プロダクションの人達と一緒にやられてしま
つて…」

「それで見えなかったのか…キャトルもそうか？」

「にゃあ」

「よほど強い悪魔だったんだな…」

「何か向こうのやることが狡猾になってきているような気がするん
だ。」

「ん…確かにそうだな…」

「…それも、マスターの命まで狙うなんて…」

リュミエルはそう言い、唇を噛んでいる。

浅野は、急に思い出した。

「あっ…！」

「？」

「巽と一緒に写真撮ってもらったの忘れてたっ!!」
「????????」

リュミエルとキャトルは顔を見合わせている。

「えーん…撮りたかったよー…」

浅野が手摺りに顔を伏せて泣くと、リュミエルとキャトルがなぐさめるように、浅野の頭をとんとんと叩いた。

(終)

第8章・墮天使のクリスマス・

（オールスターだっ！！）

浅野俊介はそう思った。ジャズユニット「キャトルquatre」が、ショッピングセンターのクリスマスイベントで、アカペラで「White Christmas」を歌っているのだ。

「キャトルquatre」のメンバーは、作曲家「沢原亮」、美しきバイオリニスト「秋本 優^{ゆう}」、フランス人の血を持つ歌手「マリエ」、オペラが歌えるアイドル「北条圭^{きたじょう}」の4人で構成されている。

皆、今まで浅野にかかわった4人なので、浅野にとったら「オールスター」となるわけである。

浅野はこのハーモニーの美しさに驚いた。沢原の「バリトン」秋本の「カウンターテナー」マリエの「ソプラノ」圭一の「テノール」の声がマッチして、見事なハーモニーを醸し出している。

浅野は買い物客に紛れて、後ろの方で聞いていた。周りの買い物客も聞き入っている。

歌が終わった。拍手が起こった。

4人は「メリークリスマス！」と声を揃えて言うと、控室へ入って行った。

浅野も買い物客を掻き分けながら、控室に向かった。

……

「お疲れ様です！」

浅野が控室に入って行くと、「キャトルquatre」のメンバーがそれぞれに浅野に「お疲れ様です！」と挨拶してくれた。

明良が浅野に頭を下げた。浅野も「お疲れ様です。」と頭を下げた。

「いやー…良かったですよ！買い物客の皆さんも聞き入っていたというか、びっくりしてたというか…」

「確かに…この異色メンバーですからね。」

明良が笑いながら言った。

「でもいつ歌ってもドキドキする…」

圭一が椅子に座りこんで言った。

「そうよね…ほんとアカペラって難しい…。私1人が音程ずれたら皆ずれるみたいなの…」

マリエが髪をときながら言った。沢原と秋本も笑いながらうなずいている。

「でもその緊張感が逆にいいんだろう…。歌い慣れた時の方が怖くないかな。」

明良のその言葉に、浅野は「なるほど…」と言った。

「さ、帰ろっか。秋本君だけバイクで悪いが、プロダクションでね。」

「はい。でも伴走しますよ。」

「バイオリンで？」

「それは伴奏…同じ発音だからってややこしいこというな、亮！」
亮のボケに秋本がつっこむ。ハンサムな2人だけに、浅野はおかしくてたまらない。

（この2人の漫才…見てみたいなあ…）

ひそかにそう思った。

…

控室を出た時、買い物客に囲まれた。当り前だろう。4人のうち、4人共が有名人なのだ。浅野は苦笑しながら、自分だけすり抜けようとしたら「握手して下さい！！」と少女に手を差し出された。

「！？え？俺？」

「浅野俊介さんでしょ？ショー見に行っただんです！チケットに「LOVE」の文字ももらいました。握手して下さい！」

「あ、ああ…ありがとうございます。」

浅野は照れくさかったが、差し出す手を握った。少女は嬉しそうにして走り去って行った。

それからというものの「浅野俊介だ！」と周囲が騒ぎ始めた。携帯で写真を撮る人もいる。「次のショーはいつですか！？」とまで言われた。

（俺、そんなに有名人だったか？）

浅野は思った。とにかく照れくさくて「すみません」ばかり言っただけで、なんとかその場を切り抜けた。

「キヤトル quatre」のメンバーもなんとか、地下駐車場へ抜けて出てきた。

「あー…びっくりした…」

浅野が言つと、圭一が隣に来て笑った。

「そろそろショーやった方がいいですよ、浅野さん。皆、期待してるのがわかったでしょ？」

「…わかったけど…よけいにプレッシャーがかかるなあ…」

浅野が頭を掻きながらそう言つと、圭一が笑った。

その時、爆音が響いた。駐車場の柱や天井が少し揺れた。

「!?!」

浅野と圭一が天井を見上げた。沢原達も驚いて辺りを見渡している。

「…なんだ？爆発か？」

明良が言った。

「とにかく外へ出よう。」

明良が車に乗るように指示した。秋本が慌てるようにヘルメットをかぶる。

そして、エンジン音をそれぞれ響かせて、駐車場を出た。

……

ショッピングセンターの外へ出て、明良と秋本は一旦、エンジンを停めた。

「！！…燃えてる…！」

マリエが思わず声を上げた。

ショッピングセンターの1階の端の方から、煙と炎が噴き出していた。レストラン街の1部らしい。

買い物客がショッピングセンターから吐き出されてきた。

悲鳴が上がり、子どもが泣きながら親に手を引かれて走っている姿や、カップルが手をつないで口元を押さえながら出てくる姿が見えた。

助手席に座っていた浅野が思わず車から降りた。

「浅野君！？」

明良が驚いて、自分も運転席から降りた。

「皆さんはここで待っていて下さい！もう誰か通報はしているでしょうが、救急車を呼んでおいて下さい！」

「浅野さん！」

圭一も降りてきたが、浅野は「だめだ！来るな！」と言い、炎に向かって走り出した。

「救急車？消防車じゃなくて？」

沢原が呟いた。圭一は浅野が何かを感じたのだと悟った。圭一はしばらく立ち尽くしていたが、やはり走り出した。

「圭一！行くな！」

119番していた明良が、慌てて呼びかけたが圭一は走って行った。

「副社長、俺らも行きましょう！何か役に立てるかもしれない！」
「そうだな。」

全員が走りだした。

……

浅野は燃え盛る炎を見て、少し躊躇した。

（…この中にまだ子どもが…！）

浅野は一瞬だが、脳裏に子どもが炎の中で泣き叫ぶ姿が見えたのだ。周りで人が見ているが、仕方ないと額に人差し指をかざし心で念じた。さすがに言葉を出すのは避けた。

すると青い炎が浅野を包んだ。浅野はそのまま炎に入って行った。

「…！やめろ！」

誰かが叫んだ。だが浅野の姿は炎の中に消えた。

「…あれ…マジシャンの浅野俊介じゃなかった？」

女性が隣の恋人に思わず呟いた。

……

青い炎に守られながら、浅野はあたりを見渡した。

（くそ…子どもの声が聞こえない。…まさか…）

最悪の事を考えながら、炎の中へ進んだ。

「！！」

突然現れた炎の塊りが、浅野を吹き飛ばした。
床に叩きつけられた浅野は、顔をしかめて起き上がった。

男が立っていた。体は炎に包まれている。

浅野は人間じゃないと思った。

「イフリートか？」

浅野が言った。イフリートとは炎の悪魔である。

「私は部下だ。イフリート様がお前ごときのために、出てきたりはしない。」

「確かに。お前も人間に呼び出されたのか？」

「そうだ。全く面倒な話だ。」

男が、また近づいてきた。

浅野は人差し指を額にかざし念じた。

水が男の回りに絡み渦を作った。

しかし歯が立たない。さらに強い炎で水が消えた。

「無駄な抵抗を…」

男がまた近づいてきた。その度に火が強くなり、浅野を守っている炎が弱くなる。

（まずい！耐えられなくなってきた…）

あまりの炎の熱さとガスで息苦しさを感じ、意識がもうろうとしてきた。

「天使のエナジーを持っていたても、所詮人間だ。私が何もしなくてもお前など…」

男がそこまで言った時、男の顔に獅子のキャトルが飛びついた。

「！！！」

そしてリュミエルが浅野の体を背中から抱き、青い炎を強くさせた。

「リュミエルすまない…」

浅野が息を切らしながら言った。

「こいつはお前じゃ無理だ。私がやる。」

「！！！」

「子どもは厨房だ！水を溜めたシンクの中にいるから火傷はない。ただ煙を吸って気を失ってる。」

「…！わかった…」

浅野は感謝の目でリュミエルを見た。

「おかしな目で見るな！マスターが心配してるから助けにきたただけだ。早く行け！」

浅野は「すまない」というと、厨房に走り、シンクの中にいる子どもを見つけた。

子どもは青い炎で守られていた。

浅野は子どもを抱いて炎を突っ切った。

……

浅野は外へでた。急に新鮮な空気を吸って咳込み両膝をついた。消防隊員が駆け寄り、子供を受け取り走り去った。もう一人の隊員が浅野の肩を抱き立たせようとしたが、浅野はその場に崩れた。

「！！」

隊員が「担架だ！」と叫んだ。

「浅野さん！」

圭一達が駆け寄った。圭一が思わず叫んだ。

「浅野さん！目を開けて！」

明良達はただ見ているしかなかった。

別の救急隊員が駆け寄ってきて、酸素吸入器を浅野の口に当てた。同時に担架が置かれ、浅野はその上に乗せられた。

「浅野さん！」

圭一達は担架と一緒に走った。

……

炎の中では、リュミエルと炎の悪魔の攻防が続いていた。どちらも力が拮抗しちががかない。

リュミエルが炎に吹き飛ばされた。そのリュミエルの体を、獅子のキャトルが壁に激突しないように自分の体で止めた。

リュミエルの体は、人間でいう「火傷」だらけになっている。キャトルは、羽の力もなくなりかけて落下しかけたリュミエルの体を、自分の背で受け止めた。

「ありがとう。キャトル。」

リュミエルがキャトルの体の上でぐったりしながら言った。

対して、炎の悪魔も傷だらけの体で座りこんでいる。

外から消防隊員が消火作業をしていることもあるが、炎の悪魔自身の力もなくなり、炎が収まりかけていた。

「何故…そこまでして人間を守る…？」

炎の悪魔が言った。

「何故？…守るべき人だからだ。」

リュミエルがキャトルの体の上で言った。

炎の悪魔は中傷するように低く笑った。

「人間は裏切るものだ。」

「！……」

「お前もいつか、必ず裏切られる……。」

「マスターに限ってそんなことはない！」

「だから堕天使は甘いんだよ。」

炎の悪魔はまた笑った。

「いつか……俺の言ったことが正しかったという思っ日が来るさ。」

「言っな……！」

リュミエルはキャトルの背で立ち上がり、光を溜めた腕を力を振り絞って真横に振った。

悪魔は抵抗することもなく光の刃を受け、弾けるように消えた。ただ後には笑い声だけが残っていた。

リュミエルはキャトルの背に倒れこんだ。

「にゃあ……」

獅子のキャトルがリュミエルに鳴いた。

「……マスターに……いつか裏切られると思う……？」

リュミエルが倒れたまま、キャトルに言った。
キャトルは魔界の言葉で答えた。

「裏切られる訳ないじゃない！馬鹿ね！」

リュミエルはうなずいて気を失った。

……

浅野は病院のベッドで目を覚ました。

「……リュミエル……！」

「浅野さん！」

圭一が飛び起きた浅野の体を押さえた。

「圭一君……」

浅野が辺りを見渡した。

「リュミエルは？」

圭一が首を振った。

「姿を出してくれなくて……」

浅野は額に人差し指をかざし、交信を試みた。

「……俺の家に……キャトルが連れて行ったか……」

「怪我してるの……？」

浅野は沈鬱な表情でうなずいた。

「人間でいうと、体中火傷だらけになっている。あの炎の悪魔はかなり手ごわかったようだな……。」

「治しに行かなきゃ…」

浅野はうなずいた。

「だが…瞬間移動できる距離じゃない…。圭一君…病院に頼んで、退院手続きを取ってもらってくれないか？」

「はい！」

圭一は病室を飛び出した。

……

リュミエルは、浅野のベッドでぐったりと体を横たえていた。自分で治癒する力もない。キャトルがリュミエルの顔を必死に舐めている。

ベッドの横に、浅野が圭一の腕を取った状態で現れた。

「リュミエル！…大丈夫か？」

浅野がリュミエルの顔を両手でそっと挟み、自分に向けた。

「お綺麗な顔がこんなに…人間なら治らないぞ。先に顔から治すか。」

浅野が冗談交じりに言った。

「僕の「気」も使ってください。」

圭一の言葉に浅野は「残念だが」と言って首を振った。

「俺とは違ってリュミエルは生体じゃないから、圭一君の「気」は効かないんだ。」

圭一は驚いてリュミエルを見た。その目に涙があふれ出した。

「リュミエルごめんね…。」

圭一が涙を流して言った。

「…僕が…頼んだから…。」

リュミエルは驚いたように首を振った。

「僕は…何もできないくせに…ごめん…」

圭一がベッドに顔を伏せて泣き出した。リュミエルが動揺して浅野を見た。

浅野が苦笑した。

「頭撫でてやれ。その間に俺ができるだけ火傷を治す。」

リュミエルはためらうように手を上げ、しばらく躊躇したのち圭一の頭を撫でた。

……

リュミエルはじつと目を開いたまま、ベッドに横たわっていた。圭一がベッドに頭を乗せて寝ている。その横にはキャトルが体を丸くして寝ていた。

浅野はリュミエルの治療のため気を使いきり、リビングのソファ―

で爆睡していた。

もうすっかり体は治っているのだが、何かこの場を離れにくい。
リュミエルがそっと、窓から差し込む月の光に浮かぶ圭一の顔を見た。

圭一がふと頭を上げた。

リュミエルはあわてて上を向いた。

「リュミエル…具合はどう？」

「…もう…大丈夫です。」

「ほんと？」

「はい。あいつのおかげで…」

圭一が微笑んだ。

「良かった。」

圭一はふと窓の外を見た。

「月…きれいだねー」

圭一がカーテンを開けて言った。一層強く月明かりが差し込んできた。

「…リュミエルって…僕の小さい頃から知ってるの？」

リュミエルはうなずいた。

「…じゃあ…僕が5歳の時…夜中に月に向かって飛ぼうとして、屋

根から落ちたことも？」

圭一が恥ずかしそうに言った。リュミエルは小さく笑ってうなずいた。

「…そうか…ずっと…傍にいてくれたんだ…」

圭一は感慨深げに呟いた。

リュミエルは、どうしてあの時、圭一が空を飛ばうとしたのか知っている。

圭一の実の親は両親とも芸術家で、圭一に早期教育と称して厳しく躾けた。つまり親というより指導者だったのだ。時には圭一を、寒空の下に一晩中庭に放り出したこともあった。

そのため圭一は、幼い頃から親に甘えることができなかったのだった。

月へ飛ばうとしたのは、そんな親から離れたい…という気持ちがあったのではないかとリュミエルは思う。

リュミエルは、圭一を見て言った。

「空…飛びます？」

「え？」

「月には行けませんが、空は飛べます。」

圭一は子どものように目を輝かせてうなずいた。

……

圭一はキャトルを肩に乗せて、リュミエルの首にしがみついていた。

「うわ…結構早い！」

圭一が声を上げた。リュミエルは圭一の体を横抱きにして、空を飛んでいる。

魂だけが抜け出ているので、リュミエルの力を使えば圭一ひとりでも飛べるのだが、圭一が「何だか怖い」と言っただけのため、リュミエルは圭一を抱いて飛んだ。

「大きい!...」

月を見て圭一が言った。キャトルが「にやあ」と鳴いた。

リュミエルが止まって笑った。圭一は、まるで屋根から落ちた時の5歳の子どものようだった。

20歳になっても時々圭一は、今のように子供っぽくなる。それは幼い頃、親に甘えられなかった反動ではないかとリュミエルは思う。じつと月を見ていた圭一が歌いだした。

「Fly me to the moon...」

英語で歌っている。歌詞の通り「私を月へ連れてって」というシャボンソングだ。「^{キャトル}quatre」の沢原の持ち歌である。

リュミエルはじつと聞き入っていた。

歌い終わった後も、しばらく黙っていた。

すると、圭一が思い出したように言った。

「そうだ!リュミエル、メリークリスマス!」

リュミエルは面食らったような顔をした。

「天使じゃないとか、細かいことはいいじゃない！メリークリスマス！」

リュミエルは微笑んで言った。

「メリークリスマス」

圭一が嬉しそうに微笑んだ。

「こらっ！その不良ー！」

圭一がびっくりして振り返った。

浅野が羽を広げて飛んで来ていた。

リュミエルはもうわかつていたので笑っている。

「お母さんが心配してるから早く帰って来なさい！」

浅野の声に、リュミエルと圭一は笑った。

「リュミエル、逃げて！」

「仰せの通りに。」

リュミエルは飛んだ。圭一がリュミエルの首にしがみついて悲鳴をあげる。キャトルも圭一の肩にしがみついた。

浅野が追いかけてくる。

「こらっ！暴走行為禁止だぞ！」

天空に笑い声が響いた。

…その姿を、1人の小さな少年が病院の窓から見上げていた。

「…てんしさんと、マジシャンさんだ!」

そう嬉しそうに言って、ベッドの上に立ち上がり飛び跳ねた。

……

翌日 -

「俺が助けたことになってるよ…」

非常階段で新聞を読みながら、浅野が言った。
新聞の見出しには「魔術師、子供を救う」とある。

「俺じゃなくて、リュミエルなんだけどな…」

手摺りに座っているキャトルが「にゃあ」と同意した。
横に座っている小さなリュミエルは苦笑して「いいよ別に」と言った。
リュミエルは昨夜の圭一とのデート(?)で満足しているようだ。

その時、圭一が非常階段を駆け上がってきた。

「浅野さん!リュミエル!」

圭一が手に筒のようなものを持っている。浅野が新聞を畳んで言った

「どうしたの?圭一君。」

「これ…。病院から今届いたんです。火事で助かった子どもが描い

た絵なんですが…」

「絵？」

浅野は圭一に新聞を渡し筒を受け取り開いてみた。4つ切りの画用紙にクレバスで描かれていた。

「！…！…あの子…意識があつたのか！？」

浅野が驚いて言った。

「リュミエル…見てみる。」

リュミエルは不思議そうな表情をしたが、浅野の肩に飛び移り絵を見た。

「！？…」

画用紙の右半分には、金髪の男の手から青い炎が出ていて、その炎が子どもを包む様子が描かれていた。「てんしさん」と黒いクレバスで書いてある。また羽が黒ではなく白だった。

「お前のこと…天使だと思ったんだ…」

浅野がリュミエルに微笑んで言った。

リュミエルは黙って見つめている。

左半分には、炎に包まれた大きな猫（獅子ではなかった）が天井付近におり、下では、炎に包まれた男と、浅野が描かれていた。浅野のところには「マジシャンさん」とあり、キャトルの絵には「ねこさん」とある。そして炎の男には「あくまさん」とあった。

「悪魔にも「さん」がついてるよ。」

浅野がそう言って笑った。

圭一が口を開いた。

「お母さんがおっしゃるには、朝子どもが目をさましたとたん、画用紙とクレバスを持ってきて欲しいと言ったそうなんです。そして1時間もかけて黙って描き続けたんだそうですよ。お母さんはこんな夢を見たのだらうとおっしゃていましたが、浅野さんに渡してほしいと言われたそうなので、お礼のお菓子と一緒に送って下さいました。」

「子どもはお前が助けてくれたと…わかっているんだ。」
「……」

浅野の言葉に、リュミエルの目から涙が零れ落ちた。

「キャトルもちちゃんと描かれてるね。よかったね。」

圭一がそう言うと、肩に乗ったキャトルが「にゃあ」と嬉しそうに鳴いた。

画用紙の一番下に「はやく また しょーを してください」とかわいいうちで書いてある。

だが浅野は、この子どもに対して申し訳ないと思っている。

元々は自分を殺すために炎の悪魔が起こした火事だ。

…自分がいなければ、こんなことにはならなかったのに…と思う。

(…ショーをするべきなのかどうか…)

浅野はそう悩んでいた。

(終)

第9章・氷の魔王・

浅野がいなくなった。

圭一は朝から浅野の携帯に電話を何度もしたが、ずっと繋がらないことに不安を感じていた。だがバー開店の時間になったら来るだろうと思っていた。

…しかしバーを開く時間になっても浅野は姿を現さなかった。

今までにないことだった。

圭一は一人でバーを開けた。そして、遅刻してでも来てくれることを期待した。

だが、閉店の時間になっても浅野は来なかった。
客には高熱を出していると嘘を言った。

翌朝になっても浅野は姿を現さず、心配になった圭一は、リュミエルに頼み、交信を頼んだ。…だが、リュミエルの交信には引っ掛からなかった。

「いったいどうしたんだろ…？なんか胸騒ぎがする。」

圭一が声楽レッスン室に籠ったまま、何もできずに時間を過ごした。

………

浅野は人間界と魔界の間にある「アビス」にいた。だが完全に意識

はない。

氷の魔王に氷づけにされ、横たわっていた。

寝ているところをそのまま襲われたのだった。そして、魂も凍らされて、リユミエルの交信に引つ掛からなかった。

「人間もたまにはいいことを教えてくれるなあ…。教えられた通り、捕まえてみたら思わぬ上物が来たものだ…。さあて…こいつをどうしようかな…。」

氷の魔王は両手をすり合わせ、浅野を見下ろしている。

「天使と人間の子はさぞかし美味しいらしいが、そのまま食べちゃもったいないし…」

その時、魔王に部下が交信してきた。

「なんだ？…うん…清廉な歌声を持つ魂をソースにするとうまいぞって？…本当か？」

魔王は気づかないが、その時、浅野の顔が少し歪んだ。

「若くてうまい？…いいねえ…。じゃお前捕まえて来い。なるべく急いでな」

魔王は浅野を見て「もうちょっと待ってね。美味しく食べてあげるから。」と言ってその場を去った。

……

圭一は浅野のマンションのエントランスにいた。だが、何度呼び鈴を押しても、返事がなかった。

諦めてエントランスを出ようとした時、「はい？」という浅野の声が帰ってきた。

圭一は顔を輝かせて、「浅野さん！」と言った。

「圭一君か。」

その声とともに、圭一の姿が消えた。

キャトルがしきりに鳴いている。菜々子はキャトルを専務室に置いて「夕方に帰ってくるからね」と秘書を連れて出張に出てしまったのだった。キャトルだけでは、瞬間移動はできない。そのため、リュミエルを必死に呼んでいるのだが、リュミエルは、今魔界に行ってしまったていて、キャトルの声は届かない。

「さつさと帰ってきなさいよ！この役立たず！」

キャトルは、鳴き声の可愛さからは想像できない魔界の言葉でそう毒づいていた。

……

圭一は驚いて辺りを見渡していた。見渡す限り氷の世界だった。

「浅野さんの部屋じゃない……」

圭一はそう呟いた。

「そりゃそうだ。」

浅野が苦笑しながら、圭一の前に現れた。

「浅野さん！…もうどうしてたんですか！僕本当に心配して…」

圭一はそこまで言っつて、目を見開いた。

「ん？どうした？圭一君…」

「違う…」

「何が？」

「浅野さんじゃない…」

浅野が大笑いした。

「何言ってるんだよ、圭一君！俺だって！」

圭一は黙っている。

「ほら圭一君、おいで。」

浅野が手を差し出した。

圭一は浅野を睨みつけて言った。

「浅野さんは…？」

浅野は目を見開いている。

「圭一君…なんだその目は…俺が信じられないのか？」

「浅野さんをどこへやったんや!!」

圭一の言葉が大阪弁になった。怒りのため素に戻ったのだった。浅野はにやりと笑って、圭一に手をかざした。

「!!」

圭一の足が凍りついた。徐々に上へ凍りついていく。そして顔だけを残して止まった。

浅野の姿が、魔王に変わった。

「案外威勢がいいんだな。清廉な歌声を持つ魂だというから、どれだけおとなしい子が来るのかと思ったら…」

魔王は大きな氷の箱を出現させた。

「!?!?…浅野さん!」

それは氷の棺だった。その中で浅野がいつもの黒の服を着て横たわっている。

「…死んでる!?!」

圭一がそう思わず言うと、魔王が笑った。

「死んだらうまくない。」

「!!」

「君をソースにしてかけて食べようと思ってね…」

「!!」

圭一は魔王を見た。魔王は圭一のあごを取ってじろじろ見ながら言った。

「でも、君がメインというのもいいなあ…。生体つきのメインディッシュか…。」

「僕と…入れ替えて…」

圭一が震えながら言った。寒さで唇が真っ青になっている。

「…僕と浅野さん…入れ替えて…」

魔王は嬉しそうに笑った。

……

浅野はいつの間にか、部屋に戻っていた。
両手で顔をこすり、頭を振った。

「何かおかしいな…」

浅野は呟いた。

携帯を開き、圭一にかけようとした。

「？」

充電が切れていた。

慌てて充電器を差し、電源を入れるとまた日付がおかしいことに気付いた。

自分が思っている日から2日が経っている。

リュミエルがキャトルを肩に乗せて現れた。

「お前！いつ戻った！？」

「戻ったって？…」

浅野がキョトンとして答えた。

「今、圭一君に電話しようと思ったんだけど…今日って何日？」

リュミエルの顔から色が失せた。

…

「最高のメインディッシュだ！」

魔王は圭一の眠る棺の上から、顔のあたりを撫でた。

「清廉な歌声を奏でる魂は清廉な心から生まれるってね…まじでうまそう！楽しみだなあ…」

「魔王さま」

「うん？…ああ、料理人か。」

「そろそろ、仕込みの準備を…」

「そうだね。でも待って！この子が刻まれる前にもっと、この姿を見ておきたいから…」

料理人はため息をついた。魔王が指をくわえて言った。

「ねえ…姿煮にできない？」

「色変わっちゃいますよ。」

「それも嫌だなあ…じゃやっぱり焼いて。レアだね。」

「はい。では棺を開けてもらえますか？」

「うん。ああいとしの清廉な魂ちゃん…美味しくなって帰っておいでね。」

魔王は棺を開けた。

圭一が目を覚ましたが、すぐにガタガタ震え出した。

「生体があると、こうなっちゃうんだよね…。大丈夫。すぐに、魂を剥がしてあげるから。」

圭一は魔王に手を取られて震えながら起き上がった。

「さっきの元気よさがなくなっちゃって、ちょっと残念だなあ。」

料理人は、震えて立てない圭一を横抱きにして連れて行った。

「さて！ひと寝入り！起きたらご馳走ご馳走！」

魔王は、寝室に鼻歌を歌いながら入って行った。

……

料理人は、圭一を氷の板の上に乗せた。

圭一の震えは止まっている。気を失わされているのだ。

「…全くあの魔王様も、ろくに報酬もくれないくせに、言いたいこと言いやがって…」

料理人は大きな包丁を取り出した。

「…この子も可哀相に…。食べられるにしてももつといい人に食べられるべきだろう。」

「じゃ、その子買っよ。」

料理人は突然の声に、驚いて振り返った。

金髪の青年が立っている。何か金持ちに見えた。

「え！？…でも…この子がいなくなると…魔王様に…」

「そこらへんの木切れを焼いてもわからないよ。あの魔王は。」

「…ですが…」

料理人が渋っている。金髪の青年が言った。

「僕がその子を買う。金貨100枚でどうかな。」

「100！？枚！？」

「うん。かなりの上物だからね。…その価値はある。」

金髪の青年は圭一の傍に立って言った。

「じゃ、じゃあ…どうぞ」

「ありがとう！！今日のパーティーに間に合いそうだよ。」

青年はそう言うと、金貨の入った袋を料理人に持たせた。ずしりと重い。料理人はあわてて両手で持ち直した。

「数、数えなくていい？」

「いえいえ！あなたを信じます！」

「そう。ありがとう。じゃあ連れて行くね。」

「はい！！毎度あり！」

青年は笑って、圭一の体を横抱きにすると黒い羽を広げた。
そして、厨房から飛んで出て行った。

「ひゃー！金貨１００枚！なにもしなくてももらっちゃった！！」

料理人は袋を投げて喜んでいる。…中身が何かも知らずに…。

…

リュミエルは圭一の体を横抱きにしたまま飛んでいたが、廊下を通り過ぎるところで、宮殿の警備の悪魔達に前を遮られた。

「！…くそ…」

リュミエルは圭一の体を壁に座らせ、手を悪魔たちにかざした。
悪魔たちが光の刃を受けて、弾けるように消えた。
だが、次から次へと湧いて出るように増えてくる。

リュミエルが「ちっ」と舌打ちした。

その時、浅野と獅子のキャトルが、悪魔達の後ろから飛んできた。
浅野が飛びながら額に人差し指をかざして、悪魔たちを炎で包んだ。

「いいタイミングだ。」

リュミエルが思わず言った。
圭一が目を覚ました。

「リュミエル！？」

そう言ったが、あまりの寒さに両腕を抱えた。
リュミエルが慌てて、圭一の体を抱いた。

「マスター、キャトルに乗って先に逃げて下さい！」
「え？でも…」

リュミエルは「キャトル！」と呼んだ。キャトルが近くまで来た。
圭一は無理矢理獅子のキャトルの背に乗せられた。

「リュミエル！」

圭一はリュミエルに手を伸ばしたが、リュミエルは悪魔達に向かつて行った。

キャトルが飛んだ。

「待ってキャトル…」

言おうとするが、舌が凍りかけて口を閉じた。
そして体が凍りそうになるのを感じて、キャトルの背に伏せた。

「圭一君、キャトルが連れて行ったんだな！よっしゃー！暴れるぞー！」

浅野のそんな声が、遠く下から聞こえた。

（浅野さんも来たんだ…キャトルも…）

「キャトル…」

「にゃ？」

「ありがとう…」
「にゃ」

圭一はそのまま、気を失ってしまった。

……

圭一は、楽譜と一緒に外へ出され、無表情で雨戸を閉める父親をぼんやり見ていた。

雨戸が閉められ圭一は、いつもの場所に腰掛けた。
家の壁と、庭を囲む塀の間だった。ここが中庭で一番寒くない。

月明かりの下楽譜を開いて、痺れる指を温めながら読む。月明かりがないときは、懐中電灯を持たされる。今日覚えられなかったため、一晩で歌詞を覚えなければならぬ。8歳の圭一にはイタリア語は難しいため、父親がカタカナで書いてくれていた。

「カ…口…」

また冷えてはーっと手を温めた。

「カ…口…ミオ…ベン…」

その時背中から温もりが来た。

（来た！…僕の神さま…）

そう思い、また楽譜を読む。

「ク…レ…ディ…ミア…」

しかし温もりに負けて圭一はうつうつとした。

……

圭一は目を覚ました。

ベッドに寝かされている。布団が被せられ、その上からだれかがさすってくれている。

ふと見ると浅野だった。真剣な顔で圭一の体をさすっていた。

「浅野…さん」

「！気がついた！？もう大丈夫だからな。」

圭一はうなずいた。だがまだ体の芯が冷えているようで、震えがとまらない。

「ごめん…なさい…」

「謝るのはこっちだよ。暖房かなりきつくしているから、もう少し頑張るんだぞ。」

謝る圭一に、浅野が圭一の体をさすりながら言った。圭一はうなずいてから言った。

「リュミ…エル…は？」

「リュミエルか？ここにいるよ。」

浅野が離れて、リュミエルが顔を見せた。

「マスター…？」

「僕が…寒い日に…庭に出された時…温めて…くれたの…リュミエル？」

震える声でそう言つと、リュミエルは目を見開いた。
そして、うなずいた。

「あり…がと…」

圭一がそう言つと、リュミエルが圭一の頭を抱いた。

圭一はあの時と同じ温もりに目を閉じた。

浅野は涙ぐんで立っていた。

（ずっと圭一君を見守ってきたリュミエルの想いが、やっと実ったんだな…）

浅野はそう思った。

……

夜中 -

「何か怪しい2人だ…」

浅野は自分のベッドで抱き合つて眠る圭一とリュミエルを見て思った。

一緒に起きているキャトルがうなつた。

「はいはい！リュミエルと一緒に寝てやれって言ったのは俺ですよ！俺ですけどね！」

浅野は半分やけのように言った。

「俺ですけど…あまりにも美しい光景で…ちょっと妬けるかな。」

浅野がそう言って笑い、膝に乗ってきたキャトルを抱いた。

「俺の事はキャトルが慰めてくれる？」

キャトルが逃げるように、浅野の手から飛び降りた。

「！！キャトル！ひどい！！逃げることないじゃないかつ！！」

「やかましい！！」

リュミエルが声を押し殺しながら、浅野を怒鳴りつけた。

「…マスターが起きるだろ！」

「はい。すいません。」

浅野は謝った。そして立ち上がった。

「キャトル…もう圭一君はリュミエルに任せて、リビングで寝ようか。」

そう言ってキャトルを抱いて部屋を出た。

「…なんで俺の寝室で俺が怒られなきゃいけないんだ？」

浅野は独り首を傾げた。

……

浅野が出て行ったのを感じ、リュミエルの胸の中で圭一がくすくすと笑いだした。

「！マスター… やっぱり目が覚めてしまいましたか…」

「… もう大丈夫… ありがとう、リュミエル。」

圭一はそう言つて、リュミエルから離れて体を起こした。

リュミエルも体を起こした。

「… マスター… 寝てる時… 何度も体がビクツと震えていましたが… 大丈夫ですか？」

「ああ… なんか、子どもの頃のこと… まとめて見ちゃった…」

リュミエルは下を向いた。

圭一の実の父親は暴力こそ振るわなかったが、始終圭一を怒っていたような印象だった。

そして実の母親もそんな父親を恐れ、圭一をかばうことはなかった。

「… 辛かったけど… でも… あの時のお父さんの教育がなかったら… 今の僕は無いのかな… って思うんだ。」

圭一の言葉に、リュミエルは黙つて圭一の横顔を見た。

「… それに… ずっとリュミエルが守ってくれてたし…。 いろいろ思い出してみたら、嫌な事ばかりじゃなかった。」

圭一がリュミエルを見て微笑んだ。リュミエルは慌てて目を反らせた。

「リュミエルに謝りたいのは、小学校3年生くらいまでかな…誰かに守られていることは感じていたんだ。…でも成長するにつれて「僕の想像なんじゃないか」って思い始めてね…。それから守られていることすらわからなくなった。…ごめんね。」

リュミエルは驚いて首を振った。守護天使は気付かれないのが普通だ。それを少しの間でも、気付いてくれていただけでも嬉しかった。

「リュミエルは…本当に僕が好きになったから…堕天使になったの？」

「…！」

リュミエルは顔を赤くした。…そして「実は…」と言った。

「…マスターを好きになるだけなら、堕天使になることはないんです。私は…マスターが寝てる時に…キスしてしまっただけ…」

「…！」

圭一が目を見開いた。

「天使は人間と違って生体がありません。だから本来なら生体を持つ者だけにある欲情というのは起こらないはずなんです。…でも私はそれを起こしてしまった…」

「………」

「それで天から堕とされました。お許しください。…それから決してそんなことはしていませんから安心して下さい。」

「リュミエル…」

圭一が涙を堪えながら言った。

「リュミエルが僕の守護天使にならなかつたら…リュミエルはまだ天使だったかもしれない…」

「…！マスター…」

「…僕が…もつと…しっかりしてたら…」

リュミエルが思わず圭一を抱きしめた。

「そんなこと…言わないで下さい…私が勝手に…」

圭一が涙を流しながら言った。

「僕にとっては…リュミエルは天使だよ。」

リュミエルの目から涙が零れ落ちた。その瞬間消えた。

「…！？リュミエル！」

圭一はしばらく独りでぼんやりとした。

……

翌朝 -

リビングのソファで寝ていた浅野は、香ばしい匂いに目を覚ました。

キャトルが胸の上で丸くなって寝ている。

浅野は思わずキャトルの体を撫でながら、頭だけを上げて、カウン

ターキッチンを見た。

誰かが、キッチンで何かを焼いている。

「圭一君…もう大丈夫なのか？」

浅野がそう言うと、圭一が顔を見せた。

「起こしちゃいましたか？すみません。」
「いや…。」

浅野は目をこすりながら言った。

「いい匂いだな…。何焼いてるの？」

「魔王の目玉焼き。」

浅野は飛び起きた。キャトルが「ギャッ」と言って落ちた。

「わー！ごめん！キャトル！！」

浅野が慌ててキャトルを抱き上げ、体を撫でた。
圭一が笑った。

「悪趣味だなあ…。リュミエルは？」

「魔界へ帰りましたよ。」

「そうか…」

浅野はキャトルをソファーに置いて立ち上がった。

「あー…なんか、いろいろありすぎて、日にちの感覚がおかしくな

ってるな…」

「今夜はバーに出て下さいよ。社長達には、浅野さんが高熱を出したことになると思いますから、話を合わせておいて下さいね。」

「わかった。」

浅野はキッチンに入って、圭一の背中から、フライパンを覗き込んだ。

そして、焼いているウィンナーを素手でつまみ、口の中に放りこんだ。

「……！浅野さんっ！行儀悪い……！」

「こういうのが一番うまいんじゃないか。」

浅野が口をもぐもぐさせながら、にやりと笑って言った。

「リュミエルがこういうの食べられたら、嬉しいだろうなあ……」

「……」

「圭一君の手料理……むふふ……」

「なんですか、その「むふふ」って。」

「むふふはむふふ」

圭一が苦笑しながら、火を消した。

「……でも……悪魔は人間には生まれ変われないんだよな……」

「……え？」

圭一は驚いて浅野に向いた。

「……どうして……？」

「……わからない。でもそれが罪の償いの1つなんだと思う。」

「……」

圭一は下を向いた。

「将来、圭一君とリュミエルが生まれ変わって夫婦になるってのが一番のハッピーエンドなんだけど…それは無理そうだな…」

「どうしても…リュミエルは天使にはなれないんですか？」

「ん…神様の恩赦を受けるには、上級天使の協力がどうしてもいるらしいんだ。…まずそれは無理だしな…。」
「……」

浅野は圭一を見た。圭一の目から涙がこぼれ落ちている。

「あー！泣くなっ！！君が泣いてしまったら…」

突然、リュミエルが現れた。

「…こうなるんだよ…」

浅野が目には手を当てて言った。
リュミエルが言った。

「…マスターを泣かすな！」

「はい、ごめんなさい。」

浅野は抵抗せずに謝った。

「リュミエル…」

圭一がリュミエルに抱きついた。

「浅野さんがいじめるんだ。もつと怒って。」

「仰せの通りに。」

「なっ！！俺は何も…！」

リュミエルが圭一に抱きつかれたまま指を浅野に向け、はじくように動かした。浅野の姿が一瞬キッチンから消え、ソファーに突き飛ばされたようになった。

キヤトルが間一髪でソファーから飛び降りた。

「ぎやははは！こそばいって…！」

浅野がいきなり身をよじって笑いだした。浅野の体の周りに小さなインプ（悪魔の子ども）達が現れ、浅野の体のあちこちを持っている槍でつついている。

「ばかつ！やめろ！脇の下が一番弱いんだって…言っちゃったよ、俺ってばかだ！」

そう笑いながら言い、浅野は「やめろー」と言いながら笑い転げている。

それを見て、圭一が手を叩いて笑った。

キヤトルがソファーの横のテーブルに、箱座りしてため息をついた。リュミエルは苦笑しながら、そんな浅野を見ている。

この幸せな時間がいつまでも続けばいいな…と、笑い転げながら浅野は思っていた。

（終）

最終章・銀髪の天使・

「今度の衣装……？浅野さんのいつもの格好じゃないですか！」

北条圭一^{きたじょう}が、タレント事務所『相澤プロダクション』の会議室で浅野俊介を見て言った。

次のイリユージョンショーの打ち合わせ中だ。

「この方が自分らしいかなって……」

浅野は黒の半そでTシャツに、黒のスリムジーンズ、白のスニーカーといういでたちだ。

圭一の隣で一緒に打ち合わせをしていた、副社長の北条明良^{きたじょうあきら}が「逆に洗練された感じに見えるよ。」と言った。

「言われてみれば……」

圭一もうなずいた。

「そう見てみたら、前の衣装がすごく……」

圭一が口を抑えた。

「ダサく見える……だろ？」

浅野が言った。明良が笑った。圭一は口を抑えて首を振った。

「次の構成は決まりましたか？」

明良が笑いながら浅野に尋ねた。

「まだ完全には…やりたいことはリストアップしているんですが…」
「楽しみにしていますよ。必要なものがあれば遠慮なくおっしゃってください。」

「はい。ありがとうございます。」

頭を下げる浅野に明良は微笑んで、会議室を出て行った。

……

（次のショーでどういう邪魔が入るかだな…）

浅野は客が1人もいないバーで思った。

（今度は有料だから…ある程度予測しながら構成を考えないと、前みたいに尻つぼみ的なことはできない…）

浅野はため息をついた。

『ショーなんかできなくしてやるよ…』

「！！」

浅野はぎくりとした。神取の声だ。

「お前！！…あきらめたんじゃないかなかったのか！？」

『誰があきらめるか…あれは、悪魔の登場で一時停戦しただけだ。』

…悪魔には悪魔を…だ。』

「…じゃあ…今までの悪魔は…すべて…」

『いろいろ試させてもらったよ。…ただ次はあんな生易しいもんじゃないぞ。』

「…やっぱり…あの時、お前を海に放り込むんだったな。」

神取の低い笑い声が聞こえた。

『楽しみにしてるよ。絶対に召喚してみせるから…』
「……」

神取の気配が消えた。

（人の心を読めるんだ…シヨーの日取りもばれてるだろうな…。）

浅野はカレンダーをめくった。翌月の満月の日に丸が付けられている。その日がシヨーの日だ。

（どうにかしないと…。）

浅野は唇を噛んだ。その時圭一が入ってきた。

浅野はカレンダーから離れた。

「ただいま！浅野さん！」

「お帰りなさい…って、ここはメイドカフェじゃないぞ！」

圭一が笑った。

「どうしてメイドカフェって発想になるんですか…。家じゃないぞっていうならわかりますが。」

「いや、初めて入った時、感動してね。」

圭一がくすくすと笑い、奥にある厨房に入ると、スーパーの袋から野菜を取り出し冷蔵庫に入れた。

揚げ物などは食堂に頼むこともあるが、サラダやちょっとしたつまみはここで作る。

「トマト切っておきましょうか。」

「そうだな…助かるよ。」

「いえいえ。」

圭一が鼻歌を歌いだした。それを聞いて浅野は疑問が浮かんた。

どうして自分は圭一の歌声を聞いても大丈夫なんだろう…と。

悪魔達は、圭一の歌を聞いて完全に動きを封じられていた。でも悪魔であるはずの自分には何もない。リュミエルもそうだ。キャトルは寝てしまいが、それはリュミエルと契約する前からだったそうだ。元天使だから大丈夫なのか？…しかし、浅野は天使だったことはない。…もしかすると、悪魔じゃなくて天使かもしれない…なんて甘いことは考えない方がいいだろう。

…考え込んで動きが止まっている浅野に、圭一がトマトを切りながら「浅野さん？」と言った。

「ん？」

浅野は我に返って、厨房の圭一を見た。

「どうしました？何か考え事ですか？」

「ん…」

浅野は、カウンターのの中にある休憩用のパイプ椅子に座りながら言

った。

「圭一君の歌…家で毎日聞いているんだ。」

「！？え？アルバム買ったんですか！？」

「うん。久しぶりにCD屋さんに行ったよ。」

「言ってくれば、差し上げますのに。」

「いやいや。プロダクションにはお世話になってるから、貢献しなきゃね。」

「十分に貢献してもらってます。」

その圭一の言葉に浅野は首を振り、小さく笑って言った。

「…君の歌を聞いても…なんで俺は平気なんだろうと思ってね…」

「！？…どういう意味ですか？」

圭一は切ったトマトをラップで包み、冷蔵庫に入れながら言った。

「俺はたぶん悪魔だと思うんだ。」

浅野が呟くように言った。

「え？…浅野さんが？…どうして…」

圭一がそう言いながら、浅野の隣にあるパイプ椅子に座った。浅野は下を向いて自嘲気味に言った。

「俺は捨て子でね。産まれてすぐに乳児院の玄関に置かれていたそうだ。…それも背中には羽が生えていたんだそうだよ。」

「…！」

「たぶん、俺の親が気味悪がって捨てたんだろう。それからもずっ

と俺は気味悪がられながら、施設の中で成長してきた。」

「…浅野さん…」

「たぶん…なんだが…俺は天使と人間の間に生まれたんだと思う。天使と人間のハーフはイコール…悪魔だと聞いたことがある。」

圭一が目を見開いた。

「でも…浅野さんが悪魔だなんて…僕は思えない…。」

「…ありがとう。」

浅野が圭一に向いて微笑んだ。

「でも今は、圭一君という友人に出会えて…初めて生きる楽しさというかな…喜びを感じているんだ。…最近は悪魔であることが気にならなくなった…。」

圭一が微笑んだ。

「僕は浅野さんが悪魔でも構いません。リュミエルも…キャトルも…。皆、仲間ですから。」

「そうだな。」

浅野が微笑んで圭一を見た。

そんな浅野と圭一を、姿を隠したリュミエルが神妙な表情で見っていた。

……

浅野は、バーでの仕事を終え、家へ帰ってきた。

「あー…早くショーの構成考えないと…」

そう呟きながら、ベッドに体を投げ出すようにして浅野が寝ころぶと、リュミエルが姿を現した。

「！？珍しいな…リュミエル。どうした？」

浅野が体を起こして言った。

「お前に言っておきたい事があって…。知っておいた方がいいと思っ
つてね。」

「？…なんのこと？」

リュミエルはため息をついてから言った。

「私にもわからないんだが、お前は本当に天使と人間の間に産まれたのか？」

「…羽が生えている時点でそうだろう。」

「…そうだな…」

リュミエルは浅野のベッドに腰掛けて言った。

「お前がもし本当に、天使と人間の子なら…死した後は、魔界に閉じ込められる。私のようにマスターに会いに来ることはできないし、名前をかえて蘇る事も無理だ。」

浅野は神妙な表情で黙っていた。

「産まれたお前には本当は罪はないんだが、人間と交わったお前の父の罪を、お前も一緒に受けなければならぬ。」

天使が人間界に来ると大抵は男性形になるという。そして女性と交わり子どもを作るのだ。

リュミエルの言葉に、浅野は小さくうなずいた。

「でないと、俺のような人間がまた人間と交わることになり、人間界が混乱するというわけだ。」

「そう……」

浅野はため息をついた。リュミエルが言った。

「神取がお前の命を狙うのは、そのためだ。」

「！……あいつは、神の命を受けているわけか？名前が神取だけに……」

リュミエルがため息をついた。

「……お前の、その深刻な時でも茶化す性格、どうにかしてくれ……」
「すいません」

浅野が謝ったのを見て、リュミエル苦笑して続けた。

「あいつは最初、純粹に「使命感」でやってたんだ。」

「使命感？」

「天使の子を人間界から一掃する使命感だよ。」

浅野はリュミエルの言葉を聞いて動揺した。

「……俺には見えなかった……。」

「もう何人も殺ってる。天使の子の場合、死ねば痕が残らないから

警察沙汰にはならないがね。」

「…あいつ何者なんだ？」

「純粋な人間だが、魔界とコンタクトが取れる、本当の魔術師というところかな。」

「あの力は？」

「たぶん、悪魔に魂を売ったんだろう。今でも悪魔たちと交信しているようだ。お前と同じように、生贄なしで、悪魔を召喚できる。階級によるが…」

「少々厄介だな…」

「少々どころが、かなり厄介な奴だよ。あいつのしていることはある意味では正しいと言えるが、やり方がひどい。…その上、今は天使の子を葬ることに快感を覚え始めている…。」

「それこそ…悪魔だな…。」

「今は人間の方が…悪魔より残酷だよ。」

「……」

浅野はしばらく黙り込んだ後、ため息交じりに言った。

「…今まで…死ぬことは恐れていなかったけど…圭一君に会ってから、生きることに幸せを感じるようになった…。そんな時になって、命を狙われるようになるなんて…。皮肉な話だ。」

リュミエルは浅野を見た。浅野は続けた。

「女性との関わりには気をつけていたが…まさか、圭一君…人間との別れをこんなに辛く感じるなんて…。」

「…だから…死ぬな。」

リュミエルの言葉に、浅野は驚いて目を上げた。リュミエルは赤くなつた顔を背けて言った。

「勘違いするな。…マスターが悲しむのを見たくないだけだ。」

リュミエルは、浅野に背を向けて消えた。

「…ありがとう…」

浅野は1人呟いた。

……

翌日夜 -

浅野は前に神取と闘った（というか、ほとんどやる気がなくてやられっぱなしだった）埠頭にいた。
神取に呼び出されたのだ。

「今日お前の葬式をしてやる」

そんな自信たっぷりの呼び出しだった。

かなり強い悪魔を召喚したのだろう。

浅野は一切の交信を断った。リュミエルとキャトルに気づかれないためだった。気を抜かない限りは気づかれないだろう。

（遺書書いてきたらよかった）

浅野はふと思った。

「お前のそういうところが嫌いだと言っただろう！」

その声と共に、神取と牡牛の姿をした悪魔が現れた。手には斧を持っている。

（あら、案外下級…）

浅野は思った。だが下級の悪魔の方が、質^{たち}が悪い。

「…ばかにしたな…？」

神取が言った。そして、牡牛の悪魔に言った。

「バビロン様、下級だってばかにしてますよ。」
「言うなー！」

浅野が思わず叫んだ。

（バビロンっていうのはユダヤ人を迫害した都市の名じゃないか。わかってつけたとしたら、ネーミングからして下級だ。）

またそう思ってしまい、浅野は「しまった」と言った。神取が再びバビロンに向いた。

「まだ馬鹿にしています。」

牡牛の悪魔「バビロン」は鼻息を荒くした。

「許さん…」

「お願いしましたよ。あつちで見えますので。」

神取がそう言って、離れて行った。

（卑怯な奴だなー）

浅野はあきれて、神取を見送った。だがすぐにバビロンに向いた。

（…くそ…ダメだ。こいつの攻撃方法も弱点も全くわからない！）

浅野は人差し指を額にかざし念じた。バビロンが炎に包まれた。斧で切ろうとして炎が熱を持ったが、そのまま振りきってしまった。

バビロンがうなり声と共に、斧を投げた。

浅野は避けた。が、斧が弧を描いて、浅野に戻ってきた。

「!？」

浅野はかろうじて、また避けたが、肩をかすった。

「!！」

自分の左腕が落とされたような衝撃を受けた。

（動かない…）

左腕の神経が切れたようになった。実際には落ちていないが、それと同等のダメージを与えることを今知った。

「あの斧を投げさせないようにしなければ…」

しかし、どうすればいいのかわからない。下級とはいえ、力は向こ

うの方がかなり上だ。封印することすらできない。

斧がまた飛ばされた。

浅野は地面に倒れ込んだ。ぎりぎりのところで、斧は浅野の体を掠め、通り過ぎた。だが戻ってきた。起き上がり、人差し指を額に当て、神取の傍に瞬間移動した。

だが、斧は移動したところまでついてきた。

「わっ！」

神取が俯せになって避けた。

浅野も地面を転がった。

斧はバビロンの手に戻った。

（オーラについてくるのか…！）

そうになると、なおのこと勝ち目はない。

（マジで死ぬかもしれない！）

浅野は覚悟した。

斧が振られた。

地面を転がる。斧が通り過ぎ、思わず体を起こした。すると、背中に衝撃を感じ、浅野の体がのけぞった。

「やった！」

神取が叫んだ。

浅野は倒れた。体を真つ二つにされたような痛みが走った。

（圭一君…）

浅野は思った。やはり最期に思うのは、圭一のことだった。

その時、人が駆け寄ってくる足音が聞こえた。

「浅野さん！」

圭一がキャトルと一緒に駆け寄って来ていた。

「…ばか…来るな…」

そう呟くが、なんの力もない。

神取が役目を終えたかのように去るバビロンを引き止めた。

「あいつらもやってくださいよ！」

「契約してないだろう。」

「じゃあ…今…」

圭一が浅野の体を抱き起こした。

「浅野さん、しっかりして…！」

「もう駄目だよ…」

「嫌だ…」

圭一が泣きながら、浅野の体を抱きしめて言った。

「死んじゃ嫌だ!!」

浅野はぐったりとしている。浅野が体を裂かれたと同じくらいの致命傷を負った事は、圭一にもわかった。

リユミエルも現れたが、もう手遅れとわかり圭一の横に立ちつくしている。

「…圭一君…もう会えなくなる…」

浅野の言葉に、圭一は濡れた目を見開いた。

「!?!? どういうこと…?」

「俺は天使と人間の間に生まれた。…死ねば魔界に封印されて、生まれ変わることもできない。」

浅野が息を切らしながら言った。

「…嘘だ…」

「…だから…もうお別れだよ。」
「嫌だ!!」

圭一は泣きながら、浅野の体を強く抱きしめた。そうすれば、自分の「気」が浅野に伝わるはずだと思った。だが、何故か「気」は浅野に流れなかった。

…浅野が圭一の「気」を吸わないように、セーブしていたのである。こんな致命傷で圭一の「気」を吸えば、圭一の方が死んでしまうからだ。

「僕も一緒に連れてって…」

「ばーか。君は天国行きが決まってるの。」

浅野がいつもの調子で言った。圭一は、強く首を振った。

「そうだ…あの歌…歌ってくれよ。」

「…え？」

「…シヨパンの別れの曲…君と秋本さんが詞を乗せた…」

「！…嫌だ…」

「頼む…聞かせてくれ…お願いだ…」

圭一は泣きながらうなずいた。そして途切れ途切れに歌いだした。

……

去りゆく あなたへ 永遠えいえんの この愛を 伝えよう

どんなに この身が遠く 離れても

想いは 切なく 心に いつまでも 残るよ

このまま会えずに あなたが私を忘れてしまっても

あなたへ この想い 伝えよう…ずっと

「あ…」

圭一が歌を止めた。圭一が歌っている間、ずっと圭一の涙を払うように頬に滑らせていた浅野の指の感触が感じられなくなった。

消えていつているのだ。

「浅野さん！！嫌だ！消えないでよ！行かないで！！」

「圭一君…ありがとう…」

「浅野さん！！嫌だ！」

浅野は頬に涙を残したまま、光と共に消えて行った。圭一は何も抱いていない両腕を見て、やりきれないように地面に両手を叩きつけた。

「浅野さん！！戻ってきて！！リュミエルみたいに戻ってきて！！
どうして、生まれ変わらないの！？…どうしてだよ！！」

圭一が何度も地面に両手を叩きつけながら叫んだ。圭一の号泣する声が響き渡った。

リュミエルがしゃがんで、圭一の背に手を乗せた。キャトルが圭一の傍でうなだれていた。

……

圭一はいつの間にかキャトルを肩に乗せて、浅野の部屋のベッドに座っていた。

リュミエルが運んだのだ。

涙に濡れたままの目で、圭一は浅野の部屋を見渡した。
月明かりが部屋の中をぼんやり照らしている。

リュミエルが現れた。

「すみません。咄嗟にこちらへ…」

圭一は首を振った。

ベッドの傍にあるサイドテーブルを見ると、圭一のアルバムのCDケースがあった。

「セカンドアルバム…」

良く見ると、デビューアルバムも、3rdアルバムもある。

『圭一君の歌…家で毎日聞いているんだ。』

浅野の言葉を思い出した。

圭一が初めて浅野に『アベマリア』を聞いてもらった時、浅野は圭一が恥ずかしくなるほど褒めてくれた。

『すごいよ！圭一君！』

浅野がそう言って拍手をする姿が、圭一の脳裏に蘇った。

圭一の目に涙が溢れた。

『…君の歌を聞いても…なんで俺は平気なんだろうと思ってね…』
『君の歌のお陰で、なんとか悪魔を封印できたよ。』

その浅野の言葉を思い出し、圭一の目が見開かれた。

（かたき討ちしなきゃ…）

圭一は覚悟を決めた表情で顔を上げた。

「リュミエル…」

リュミエルが圭一の前に立った。

「…はい」

「悪魔はまだ神取と埠頭にいるの？」

「はい。我々を殺す契約に手間取っているようです。」

「そこへ戻して。」

「！駄目です！」

「戻すんだ！」

そう言つて立ち上がった圭一の目が、今までにない厳しさでリュミエルを睨みつけている。

「！！マスター……」

「僕だけでいい…今すぐ戻せ！」

「……」

キャトルが圭一の肩に乗った。

「リュミエル！」

「……」

リュミエルは涙を堪える表情をしたが「お伴します。」と答えた。

……

「気が進まん。」

バビロンが言った。

「なんであんな奴。」

「あいつについてる悪魔が強いんです。あの猫も悪魔です。まとめやっっちゃって下さい。」

「わかった」

バビロンが振り返ると、圭一が青い目をして立っていた。キャトルも炎の獅子に姿を変えている。

「挨拶がわりだ。」

圭一の声がリュミエルの声になっている。

圭一は両手を交差させ、前にかざすと光を放った。だが、斧に弾かれた。バビロンも神取も不敵な笑みを見せ向かってくる。

「ばかめ！お前ごときが勝てるはずがない！」

その時、圭一の歌声が響いた。アベマリアを歌っている。しかし青い目の圭一は口を結んで動かない。圭一は体をリュミエルに預け、姿の見えない魂となって歌っているのだ。

バビロンの動きが鈍くなった。咆哮したが、圭一の魂の声は消えない。

神取が驚いた。

「え！？…バビロン様まで！？」

「…あの歌を止めさせる…」

「…わかりました…！」

神取が圭一の体に光を放ったが、炎の獅子のキャトルが圭一の前に

立ち、光をはじいた。
キャトルが神取に向かって走った。

「……来るな!!」

神取は何度も光を放ったが、キャトルの炎に弾かれて全く齒が立たない。

神取はとうとうキャトルに体をくわえられ、バビロンから離された。

「うぬ……」

バビロンが必死に体を動かそうともがいた。

その時、圭一が両手を構え、光を放った。

バビロンが少し揺らいた。

圭一はアベマリアの歌の中、光を放ちながらバビロンに迫って行った。

バビロンは力を振り絞って、斧を振り投げようとしたが力が出ず座りこんだ。

魂の歌は止まない。

バビロンは最後の力を振り絞って、とうとう斧を投げた。

圭一は斧を避けたが、斧が弧を描いて戻り、圭一に向かった。

圭一が振り返って目を見張った時、光輝く矢が斧に刺さったのが見えた。次の瞬間には、斧が弾けるように消えた。

「……!!」

歌が止んだ。圭一の目が元に戻り、リュミエルが圭一の体から離れた。

矢を放ったのは、大きな羽を持った天使だった。

宙に浮き、弓を引いている。銀色のストレートの長い髪に、眼光鋭

い目と薄く引き締まった唇。男性形の天使だ。

「斧が！」

バビロンが叫んだ時、今度はバビロンの胸を矢が貫いた。

「！！」

バビロンは胸の矢を見た。

2投、3投と矢が貫く。そして光が強くなると同時にバビロンは悲鳴のような声を上げ、仰向けに倒れた。

バビロンの体はそのまま、弾けるように消えた。

獅子のキャトルが天使に気を取られて、押さえていた神取の体を離れた。

神取が逃げだした。

圭一達は、弓を肩にかけ地面に降り立った銀髪の天使を見た。

「…圭一君…遅くなった。」

天使が聞き覚えのある声で言った。

「浅野さん…？」

圭一が目には涙を溜めて、天使に駆け寄り抱きついた。
天使が圭一の体を抱いた。

「浅野さん…浅野さん…」

圭一は泣きながら、何度も名を呼んだ。

「別れの曲まで歌ってもらって、戻ってくるのは恥ずかしかったんだけど…」

天使が言った。圭一は天使の胸の中で首を振った。

キャトルが駆け寄り天使の肩に飛び乗ると、天使にほお擦りした。天使が微笑んだ。

「キャトル」

リュミエルがあきれたように言った。

「なんだ…天使だったんじゃないか…」

「すっかり、天使だったことも、命ぜられていた「使命」も忘れてしまっていてね。さっきまで、大天使様に怒られてた。」

その天使の言葉に、リュミエルも、泣いていた圭一も笑った。

天使は圭一から体を離し、圭一に言った。

「圭一君…私は今から君の守護天使になる。…だから私に名前をつけてくれるかい？」

「僕が!？」

天使がうなずいた。

「浅野さんじゃ駄目？」

その圭一の言葉に、天使は笑った。

「それはちょっと…」

「天使の浅野さん」

「八百屋の吉田さん？」

天使の言葉に、圭一が笑った。リュミエルも思わず吹き出した。

「浅野さん…天使になっても変わらないんですね。」

「魂はそのままだからね。」

天使も笑いながら言った。

「じゃあ…」

圭一が少し考えてから言った。

「アルシエ（射手）」

「…つつこみどころがないな…」

「つつこまなくていいじゃないですか！」

圭一が笑った。天使も笑いながらうなずいた。

「アルシエか…いい名前をありがとう。」

「浅野さんにはなれないの？」

「なれるとも。」

天使は光輝き、浅野の姿になった。

「…！」

圭一は、今度は浅野の体に抱きついた。浅野も抱き返した。

「本当は同じ姿で人間界に戻ってはいけなんだけど…。君があまり悲しむから、この姿で人間界に住むことを許されたんだ。」

圭一は照れ臭そうに浅野から離れた。浅野がリュミエルに向いた。

「それから、リュミエルとキャトルに…」

「？」

「リュミエルもキャトルも神様から恩赦をいただけることになった。」

「

「！？」

「リュミエルは1度の過ちの後、節度をちゃんと守っていたことで赦されることになった。ただ今後も「精神愛」を貫くことが条件だ。」

浅野の言葉にリュミエルはうなずいた。圭一が嬉しそうにリュミエルを見た。浅野は肩に乗っているキャトルに言った。

「そしてキャトルも圭一君を助けるためにリュミエルと契約しただけだから赦されるべき罪だと、大天使様が神様に頼んでくださった。」

「

キャトルが浅野に頬ずりした。浅野はそのキャトルの体をそつと抱いてリュミエルの肩に乗せた。

「神の恩赦をリュミエルとキャトルに。」

浅野がそう言い、手をリュミエルとキャトルに向けると、強い光が2人に注がれた。

圭一は思わず目を閉じてしまったが、ゆっくり目を開くと、リュミ

エルの背には大きな白い羽が備わっていた。
そして、キャトルにも可愛い羽が背中についている。

「なんだ。リュミエルは羽が白くなるだけか。」

浅野がぼそつと呟いた。

「…リュミエル！おめでとう！！キャトルも！」

圭一がリュミエルに抱きついた。リュミエルの肩にいたキャトルがそのまま圭一に移り圭一に頬ずりした。

リュミエルは涙を流しながら、圭一の体を抱きしめた。

「リュミエルも圭一君の守護天使だ。」

浅野がそう言って微笑んだ。

「ということ、これからもヨロシク！光ちゃん！」
「その呼び方やめろ。」

リュミエルが泣きながら言った。圭一が体を離して笑った。キャトルが浅野の手に飛び移った。浅野は笑って、キャトルを抱きしめた。

「キャトルは前の俺と同じ生体つきの天使だ。一緒に圭一君を守ろう。」

浅野がそう言いながらキャトルを撫でると、キャトルは「にゃあ」と返事をして浅野に頬ずりをした。

……

翌日夜

夜道を歩く、神取の前に浅野がいきなり現れた。
神取は亡霊を見るような目で浅野を見た。

「なんで…」

浅野が指を上へ向けた。ビルの上に来いという意味だ。

神取がビルの上に移動すると、もう浅野がいた。

「俊敏になったな。」

神取がそう言うと、浅野が微笑んだ。

「まあね。」

「何の用だ？」

「今後、私にも圭一君にも手を出さないよう、頼みに来た。」

「…それは無理だ…お前の力を奪うまでは…」

「それこそ無理だ。」

「なんだと？」

神取がそう言うと、浅野の体が光った。

神取が眩しさに慣れた時、浅野を見て驚いた。
銀髪の大きな羽を持った天使が目の前にいた。

「まさか！…あの時の天使！？」

「天使形はアルシェと言う名だ。覚えておくんだな。」

「天使！？…うそだ…お前が天使なんて…」

神取は後ずさりした。

「圭一君に今後手を出したら、私がどんなところでも現れる。バビロン以上の悪魔を召喚しても、やられることはないからな。」

「…！」

「…場合によつては、お前を矢で射ぬくぞ。」

「…天使が…人を殺してもいいのか？」

「お前のやり方は、大天使様も見るに見かねていてね。…お前を射ぬく許可は得ている。」

「…！！…何だと！？…そんな…」

「これからの立ち振る舞いによつては、射ぬかなくてすむかもしれない。死んだ後の事をよく考えるんだな。」

そう言つて、アルシエは姿を消した。…同時に、神取はその場に座り込んだ。

……

「浅野さん！」

圭一がイリユージョンショーのリハーサルのため、ステージに立っている浅野に駆け寄ってきた。

「何？圭一君。」

浅野が振り返ると、圭一が息を切らして言った。

「施設の子達が今、着いたつて。」

「！そうか！じゃあ、客席へ案内して。」

施設というのは、浅野が子ども時代にお世話になった児童施設のことだった。浅野もたびたび慰問にマジックをしに行っていたのだが、相澤プロダクションに所属してから忙しくてなかなか時間がとれなかった。それを知った圭一が明良に話をし、今日無料で招待することが決まった。

「今こつちに…あ！来た来た！」

圭一が、入ってきた子どもたちを指さした。浅野はステージを降り、子どもたちに駆け寄った。

「俊介兄ちゃん！！」

子どもたちが口々に浅野にそう呼びかけた。抱きついてくる子もいる。

「久しぶりだなー。皆、大きくなったね。」

子どもたちは嬉しそうに浅野を見上げている。

「そろそろ始めるから、ちゃんと席に座って見てるんだぞ。立ちあがったり、席から降りたりしたらだめだよ。」

「はいー！」

「はい。じゃ、席に座って。」

子どもたちを連れてきた院長が、浅野に近づき涙ぐみながら頭を下げた。

浅野が慌てた。

「よして下さい、院長先生…」

「…俊介君…本当にありがとう…。あなたには辛い思いばかりさせたのに…こんなことまでしてもらって…」

この院長は、羽を持つ浅野の事を知っている。だが院長自身は、そんな浅野を他の子と同じような目で見て育ててくれた。辛い思いをさせたというのは、その当時の従業員達の態度のことだった。確かに嫌な思いもしたが、施設に入れられた子ども達には罪はない。少しでも子ども達の心の成長の役に立てればと浅野は思っている。

「いえ。院長先生には本当に感謝しています。今日は先生も楽しんで下さい。」

「…ええ。本当にありがとう。」

プロダクション社長の相澤が傍に来た。振り返った院長に頭を下げて挨拶をし、名刺を渡している。

「資金援助をしたいんですが…」

その相澤の言葉に院長が驚いている。

浅野は、シヨ一の準備のために、その場を離れた。

圭一がマイクテストをしている。

「テストス…なんか、エコー強くない？」

浅野はそんな圭一や、ステージの最終チェックをしているスタッフ、それを見守っている明良の姿、そして観客席で騒いでいる施設の子どもたちと、それを怒っている院長や先生達を見て思った。

自分の居場所は魔界でも天国でもなく、ここなんだと。

(完)

最終章・銀髪のアリス（後書き）

<おまけ―その後のアリスたち―>

浅野のアリスの寝室で、アリス「アリス」が羽を広げてベッドに座っていた。

髪はロングストレートの銀色で、眼光が鋭く、唇は薄く引き締まっている、男性形の天使だ。圭一のアリスを聞いている。手にはクラシックの雑誌を開いていた。

「あー…まじ、はまった…」

アリスが呟いた。

呼び鈴がなった。アリスは人差し指を額に当てようとしてやめた。

「もうしなくていいのか。…癖ってこわい…」

そう呟いて、また下を向いた。

いきなりキャトルを抱いた圭一が現れた。

「…何度されてもびっくりする…」

圭一が胸を抑えて言った。

アリスが雑誌をめくりながら笑った。

「今日はアリスなんですね。」

「うん。」

「どうして？」

「羽の虫干し」

圭一が笑った。

「虫干ししなきゃならないんですか!？」

「いや別にいいんだけど、気持ちいいからさ。」

「…なんか、生活感のある天使って…」

「嫌か？」

「いえ、好きですよ。」

「よろしい。」

アルシエは雑誌をまためくった。

「何か食べましたか? って食べなくていいのか…」

圭一が少し寂しそうに言った。

「うん? 食べるよ。圭一君が作ってくれるなら。」

「ほんと!？」

「ん。」

「…でも、食べたものはどうなるんですか？」

「体の中で、蒸発するような感じかな。人間の食べる物というのは、動物しかり植物しかり何かの命を奪ったものだろう?。」

「…そうですね…」

「天使の俺が食べると、その奪われた命が、迷わずに天へ召されるんだ。」

「ああ! それで蒸発するような感じ。」

「うん。」

「じゃ、作ります!。」

「はい。」

圭一は、アルシェになっても浅野のままできてくれることが嬉しかった。

……

「はい、リュミエル…あーん。」

圭一に言われ、リュミエルが顔を赤くしながら、口をそつとあけた。

「もつと開けなきゃ、入らないよ。」

リュミエルはもう少しだけ大きく開けた。

圭一がスプーンに乗せた野菜をリュミエルの口の中へそつと入れた。リュミエルが口を動かした。

「どう？…食べられる？」

圭一が心配そうに言った。リュミエルはうなずいた。

口で物を食べるということが、リュミエルには初めてだった。

食べたものが浄化されるため、喉に詰めることはないだろうが…。

「美味しい…」

リュミエルが言った。

「そう！？よかった！じゃ、これからできるだけリュミエルのご飯つくるからね！」

リュミエルは嬉しそうにうなずいた。

「…俺のはー？」

アルシエが独りで寂しそうに、圭一の作ったラタトゥイユを食べながら言った。

「もちろん、アルシエのも一緒に作りますよ。」

「どうせついででしょ。」

「もう、アルシエー…いじけないで下さいよ。」

「いじけなくても、いじけちゃうよ。こんな隣でラブラブされたら…。同じ守護天使なのに差別だっ！」

アルシエが怒りながら、スプーンに野菜を乗せて口に放り込んだ。

「あー…怒っててもうまい…」

アルシエが言った。圭一が笑った。

「はい。じゃ、アルシエもあーんして。」

アルシエは嬉しそうに口を開けた。圭一がアルシエの口の中に野菜を入れた。

アルシエが美味しそうに口を動かす。

「やっぱり、怒ってない方がうまい。」

圭一がまた笑った。

「キャトルも美味しいかい？」

テーブルで、ささみを食べているキャトルが「にゃあ」と鳴いた。

「キャトルは猫だから、ささみだけでごめんよ。たまねぎとか駄目だもんね。」

圭一はキャトルの口の周りやひげについた汁をティッシュで拭いながら言った。

「にゃあ」

キャトルは充分満足なようだ。

圭一は微笑んで、前に座って食べているリュミエルを見た。

「あつ！リュミエル！もつとゆっくり食べてー！」

リュミエルがこぼしながら食べているのを見て、圭一が言った。

「もう…リュミエルも口の周り拭いて…」

そう言っつて、リュミエルの口を拭いてやってから、圭一は急に涙をぼろぼろと流した。

「！？…どうした？圭一君…！？」

隣に座っているアルシェが驚いて、スプーンを置いた。
リュミエルもキャトルも驚いて圭一を見ている。

「…幸せすぎて…なんか…涙が出てきちゃった…」

圭一の言葉にアルシェが涙ぐんだ。

「そんなこと言われたら…俺まで…」

アルシエも泣き出した。リュミエルも下を向いた。キャトルが圭一の肩に乗って頬ずりした。

（めでたし、めでたし（^^））

……

最後までお読みいただきありがとうございます！

この後、ちよつと番外編があります。

また、別小説でも「アルシエ」を書きたいと思っています。

はじまりましたら、どうぞよろしく願います（^^）

<番外編>少女天使

圭一が、レッスン室でピアノを弾いている。その膝には、子猫キヤトルが丸くなって寝ていた。

圭一は弾き終わると、キヤトルを撫でた。
キヤトルが顔を上げた。

「うまくなったと思う？」

圭一がキヤトルに尋ねた。

「にゃあ」

キヤトルが答えた。

「それはイエスと取っていいのかな……。キヤトルの言葉が、浅野さん達のようにわかればいいのに……」

圭一が寂しそうにそう言うと、キヤトルが「にゃあ」と小さく鳴いた。

圭一が微笑みながら、キヤトルを撫でた。

「いいんだ……。ごめん。」

圭一が言った。

すると、キヤトルが膝の上に立ち上がり、圭一に向かってひと鳴きすると、その姿が消えた。

「キヤトル!？」

圭一は辺りを見渡した。

……

「キャトルが消えた？」

浅野がバーの準備をしながら言った。

「キャトルの言葉がわかればいいのにつて言ったら……」

浅野は「まあキャトルも瞬間移動できるからな。」と言った。

「それに人間だった俺の時とは違って、生体をこっちに置いて天界にもいけるから、もしかすると大天使様に相談に行ったのかも知れないぞ。」

「……そうですか……」

圭一はほっとしたが、キャトルがキャトルでなくならないか心配だった。

……

キャトルはなかなか帰って来なかった。

圭一は、専務室にいた。カゴで眠ったように見えるキャトルがめざめるを待っている。もうバーが始まる時間だったが圭一は手伝いに行かず、ため息をつきながらキャトルが目覚めるのを待っていた。

が、ふと気がついた。

「キャトルの缶詰切れてたんだ！今のうちに買いに行こう！」

圭一は財布を確認して出て行った。

……

圭一はコンビニから出ると、暗くなりかけた空を見上げた。

「キャトルまだかな……」

そう呟いて歩き始めた。

すると目の前に、黒ずくめの男が立ち塞がった。

「!？」

圭一と男の姿が消えた。

……

誰も来ないバーで、浅野はぼんやりとしていた。

「今日は閉店しようかな」

そうため息をついた時、カウンターの前に、黒ずくめの男が出現した。

「あらお客さん、今日は何飲むの？」

「……すぐに屋上に来い。」

ふざける浅野にそう言つと、男は消えた。

浅野は慌てて閉店の札をドアの外にかけると、屋上に瞬間移動した。

……

「圭一君!？」

屋上で、圭一は気を失わされて横たわっていた。

その傍には男が立っている。浅野を見ると、姿を変えた。悪魔だった。

「!？」

浅野も天使「銀髪のアルシエ」に姿を変えた。

「圭一君に何をする気だ？」

アルシエ（浅野）が言った。

「取引をしたい。」

悪魔が言った。

「こいつの声をもらいたい。」

「!？」

「だが、条件によっては、そのままにしておいてやる。」
「条件とは？」

「こいつに、歌うことをやめさせるんだ。」

「!？無理だ！圭一君にとって歌うことは生き甲斐なんだ。」

「じゃ死なせるかい？」

「!？」

アルシエは息を呑んだ。

「すぐにでも殺せたのに待ってやっただぞ。」

「死なせることもできない。」

アルシエは必死に平静を保って言った。

「わがままな奴だなあ……。」

悪魔がそう言っ、圭一に指を向けた。

アルシエはとっさに弓を構えた。

「おいおい……今その弓を引いたら、どうなるかわかってるだろうな？」

悪魔がにやりと笑った。

アルシエは、歯ざしりをするようにして弓を下ろした。

（リュミエルは何をしてるんだ！？）

アルシエは自動的に交信をして悟った。

（圭一君を殺すと言われて魔界に呼び出されたのか。それも足止めを食らっちゃってる。）

アルシエは、そうちつと舌打ちした途端、

「え？ ばか！ リュミエル！ こっちにくるな！」

と、いきなり叫んだ。

リュミエルが屋上に出現し、圭一をすぐさま抱き上げた。

「！しまった！」

悪魔が言った。その時、多数の悪魔もリュミエルを追って現れた。リュミエルは圭一の体をアルシエに横抱きにさせると、空へ飛んだ。

「乱暴な助け方だなあ……」

アルシエはそう呟くと、自分も空へ飛んだ。

「リュミエルはいい！アルシエを追え！」

悪魔がそう叫ぶと、悪魔達がアルシエに方向転換した。

「わー！来るなー！」

アルシエが後ろをみながら叫んだ。リュミエルが気づいて、光の刃で悪魔達を攻撃する。

アルシエは両手が塞がっているため弓が持てない。とにかく必死に飛んだ。

「！！アルシエ！」

目を覚ました圭一が驚いていた。

「説明は後！しっかりつかまって！」

圭一は頷いて、アルシエの首に腕を回し、しがみついた。

その時、悪魔達が急にアルシェを追うのをやめた。
一体一体引き返して行く。

「!？」

アルシェは止まり、体ごと振り返った。

圭一も不思議そうな顔をして、悪魔達を見送っている。

遠くから、何か若い女の子の声がしていた。

アルシェがそつと悪魔達の後を追った。

見ると、相澤プロダクションビルの上空で、少女形の天使が光のムチを振り回して悪魔達を叩いている。叩かれた悪魔は、バシツという音とともに痛みで歪んだ顔を見せ消えて行く。消滅ではなく、自動的に魔界に封印されているようだ。

少女形の天使は、髪は赤いストレートのロングヘアで、ピンクの短いチュチュをはいている。顔は、クリクリとした大きな目に小さな口元で、少女漫画から抜き出てきたようなあどけない顔をしていた。しかし、その姿とムチが合うような合わないような…

「叩かれない子は私の前にひざまずきなさい！」

少女形の天使はそう叫びながら、ムチを振り回していた。

「……」

アルシェと圭一は呆然と見ている。反対側の上空にはリュミエルも同じように、呆然と見ているだけである。

「かわいい顔をしてなんつーセリフを…。親の顔が見たいよ。」

アルシエが呟いた。

しかし悪魔達は何かうれしそうに、少女形の天使に向かっていつて
いるように見える。順番に叩かれては消えて行く。

最初に圭一をさらった悪魔はもういなかった。一番に叩かれたのだ
ろう。

少女形の天使は疲れも見せず、踊るように優雅に回りながら、最後
の一体まで叩き続けた。

アルシエは屋上に降り、圭一を立たせるようにして、降ろした。リ
ュミエルも向こう側に降りて、仕事を終えて屋上に降りた少女形の
天使を見ている。

少女形の天使はムチを一降りした。するとムチは少女の手の中に入
って行くように消えた。

少女は圭一に向いて、両手を広げた。

「パパー！」

「！？パパー？」

アルシエとリュミエルが同時に叫んだ。抱きつかれた、圭一は目を
見張っている。

「キャトル？」

「うん！大天使様にこの体もらったの！これからパパといっぱい喋
れるよ！」

圭一は涙を目に滲ませて、キャトルを抱きしめた。

「僕もこうして…自分の子を抱きしめたかった…」

圭一が言った。

抱き合う圭一と少女キャトルを、アルシェとリュミエルは微笑んで見ていたが…。

「キャトル…ムチはどこで手に入れたんだ？」

アルシェが言った。

「大天使様がくれたの。」

圭一から離れて、少女キャトルが言った。

「大天使様が！？」

少女キャトルがコクンと頷いた。

「少女形なら、ムチだろうって…」

「どっという根拠だよ。」

リュミエルが苦笑した。

「じゃあ、さっきの「叩かれない子は私の前にひざまずきなさい」ってのも？」

「大天使様が、考えてくれたの。」

アルシェが目には手をやった。

「圭一君、親として君の教育が必要だよ。」

圭一が真剣な顔でうなずいて、少女キャトルに言った。

「大天使様の教えをちゃんと守らなくちゃいけないよ。」

「はい、パパ！」

「ちがーう！」

アルシェとリュミエルが思わず叫んだ。

（終）

<番外編>優しき悪魔

「パパ！はいあーん！」

少女天使形のキャトルに言われて、北条圭一は口を開けた。

少女キャトルはスプーンを圭一の口に入れた。圭一はそのスプーンをくわえた。

「パパっ！離してっ！」

少女キャトルがキャツキャツと笑いながら、スプーンを必死に抜こうとした。圭一はふざけて離さない。

しばらくして圭一はスプーンを離した。

そして、口の中のオムライスをもぐもぐと食べた。

「おいしいい？」

少女キャトルが首を傾げて言った。圭一はニコニコとしながら、うなずいた。

「…そりゃ、娘が作った物はなんでもうまいだろうよ。」

天使アルシエの人間形「浅野俊介」がリビングのソファで、クラシック音楽の雑誌をめくりながら言った。

「なんで俺んちで、いちやいちやするかなあ…」

浅野がぶつぶつと文句を言っている。

言いながら、少女キャトルをふと見た。

「!?!? あれ? キャトル?」

いきなりの甲高い声に、少女キャトルは浅野の方を見た。

「何? 浅野?」

浅野は「呼び捨てかよ」と苦笑しながら呟き、キャトルに言った。

「お前、耳なんてあつたか?」

「あ、これ?」

キャトルが頭の上にある、猫の耳を両手でつまみながら言った。

「さつき大天使様のところへ、ムチのお礼を言いに行ったらね、私の顔を見て「忘れてるっ!!」っておっしゃって、この耳をつけてくれたの。」

浅野はまた苦笑した。大天使の趣味がはつきりとわかる。

「せっかく猫の生体を持っているんだから、天使形にも猫耳つけなきゃって。」

「かわいいよ。キャトル。」

「ありがとー、パパー!」

少女キャトルは、ほめる圭一の口にちゅつとキスをした。圭一も慣れたように受けている。

浅野が驚いた。

「!?!? キャトル! 天から落とされるぞ!」

「あら、大天使様はこれくらい大丈夫って言ってたよ???」

「え!？」

「親子愛の範囲なら大丈夫って。」

「…あつそ…」

もうどうでもよくなった浅野は、また雑誌に目を落とした。
だが、正直全く頭に入っていない。

(リュミエルが最近来てないなあ…)

浅野は少し不安を感じていた。

……

「…そう言えば…」

バーで洗い物をしながら、圭一が浅野の言葉にはっとした表情をした。

「…リュミエル…最近来てなかったですね…」

「こっちの時間で3日は見てないよな…」

浅野が圭一が洗った物を拭きながら言った。

浅野はこれまでも何度か交信を試みたが、交信にひっかからなかった。交信にひっかからないのは、本人が拒否している場合がほとんどである。魔界の果てに閉じ込められている場合もあるが、それはないだろう。

「いつも1日に1回は俺んちに来てたんだけどな…。」

「……」

圭一の手が止まり、目が一点を見つめている。
浅野はそれに気づかずに、洗ったばかりのグラスを取りあげ、拭きながら言った。

「…もしかしてさあ…キャトルに嫉妬してんじゃないかなあ…」
「…!」

圭一が驚いた表情で、浅野を見た。浅野は後ろを振り返ってグラスを棚に入れた。

「…そんな…」

「圭一君、今度リュミエルが来たら、相手してやってよ。」

「…ごめんなさい…」

「いや、俺はいいんだけどさ。…あーっ!また泣くー!」

圭一が涙ぐんでいるのを見て、浅野は慌てて辺りを見渡した。

「って…あれ???…いつもなら怒りながら出てくるのにな…」

圭一が泣いた時は、リュミエルはいつも姿を現した。…しかし、今は現れる気配もない。

圭一は涙を手の甲で拭った。

「…そう言えば…キャトルにだけ構ってて…」

「それは仕方ないと思うけど。…正直、そのことで本当にリュミエルが嫉妬してたら…おとなげないような気もするけど。」

「………」

圭一は洗い物の手を止めたまま、動かなくなった。

……

その夜・

圭一は、自室のベッドで膝を抱えて座り、窓から空を見上げていた。何度もリュミエルに呼びかけるが、現れる気配がない。

（リュミエル…怒っちゃったのかな…）

圭一は下を向いてため息をついた。
ベッドで丸くなって寝ていたキャトルが顔を上げて「にゃあ」と鳴いた。

「ん？寝てていいよ。…リュミエル待つてるだけだから。」

キャトルは再び丸くなった。すると天使形のキャトルが姿を現し、ベッドの縁に座った。

「パパ…明日お仕事あるんでしょ？体壊しちゃうよ。」

「うん…」

「リュミエル怒ってないって。キャトルは、リュミエルがそんな人じゃないと思うけどな…」

「そう？」

少女キャトルはうなずいた。

「浅野が考えすぎなんだって。」

「でも…どうして交信を切ってるんだろう？」

「ん…ちよっと私、天界へ行ってみる！」

少女キャトルがそう言って、ベッドから立ち上がった。圭一が慌ててそのキャトルの腕を取った。

「いいよ、キャトル！きつと何か理由があるんだろうし…」

「だって…」

「わかった。パパも寝るから…キャトルも寝よう。」

「…うん…」

圭一がブランケットの中に潜り込んだのを見て、少女キャトルは姿を消した。

子猫に戻ったキャトルはひとつあくびをして、再び丸くなった。

圭一はそれを見て微笑むと、キャトルを撫でながら眠りに落ちた。

「……」

キャトルは顔を上げた。

「にゃあ？」

そう鳴いてみたが、圭一は眠りこんでいる。キャトルがさり気なくかけた魔術が効いたようだ。

キャトルがまた丸くなると、天使形のキャトルが姿を現した。

「よし、リュミエル搜索にしゅっぱーっ！ー！」

独りそう意気込んで、少女キャトルの姿が消えた。

……

「やば…」

少女キヤトルは、辺りを見渡した。
天界じゃない。魔界に降りてしまっている。リュミエルのことを思いながら瞬間移動したのに…と、キヤトルは不思議に思った。

「…まさか…リュミエル…」

キヤトルは最悪の事態を思い浮かべて、頭を振った。

「…違うよね…もう天使なんだから魔界に閉じ込められるなんて…」

「
君はばかか！」

「いきなりばかとは何よ！ばかとは…痛ーっ！！」

キヤトルはいきなり声をかけられたと思ったとたん、腕を掴まれた。

……

キヤトルは、人間界の埠頭に転送させられていた。
そして、自分の腕を掴んでいる男を見た。

「ピエロさん？」

キヤトルが男の姿を見て言った。

道化師の格好をし、目はスカーフで覆われている。

「うん。道化師のニバスっていうんだ。」

「私はキヤトル。よろしくね。」

「よろしく。」

「あなたも悪魔よね？…どうして私を助けてくれたの？」

「だってえ…。なんか俊介の匂いがするんだもん。」

「俊介って浅野のこと！？浅野のこと知ってるの！？」

「知ってるよ。…でも俊介…生体なくなつて、完全な天使になつちやつたんだってね。」

ニバスは唇を噛んで泣きだした。

「やだっ！どうしたの急にっ！男が泣いちゃだめよ！！」
「うんっうんっ」

ニバスが何度もうなずいた。

「僕、下級の悪魔だから…俊介に会えないんだ…。」

「会ったらどうなるの？」

「会ったら…僕…消滅しちゃう…」

「えっ！？そうなの！？」

「消滅するのは別にいいけど…俊介の顔見れないで消滅するのいやだ…」

「…そうよね…」

キャトルが少し顔をうつむかせ、考える風を見せた。

その時、ふとニバスの胸元に光るシルバーのネックレスに気づいた。

「…あ、綺麗なネックレス…」

キャトルが思わずそう言つと、ニバスがとたんに笑顔になった。

「綺麗でしょ！？…これね。俊介がくれたのー！」

「え！？そうなんだ！…あ、そう言えば、浅野、シルバー好きだっ

たな。」

「僕の宝物なの。」

「そう…本当に浅野のこと好きなんだ！」

「うん！」

ニバスは嬉しそうに言った。が、ふと心配そうに言った。

「そういえば…君はどうして魔界にいたの？」

「あっ！そうそう！リュミエル探してたの！」

「リュミエル…って、神様の恩赦を受けて天使に戻った…」

「そうそう！…最近、姿が見えなくて…探してたら、魔界に落ちてたの。」

ニバスが人差し指を額に当て黙り込んだ。

「ニバス？」

「待って…」

「うん。」

キャトルはチュチュの裾を持って、回すような動きをした。…じっ
としているのが性に合わないようだ。

ニバスが指を下ろして言った。

「気が散るからやめて。」

「目塞いでてもわかるの？」

「気配でわかる。」

「ふあい。」

キャトルは気をつけをして、じっとした。

ニバスは苦笑しながら、再び人差し指を額に当てた。

しかし、しばらくしてニバスが急に指を下ろした。

「ニバス？わかったの？」

キヤトルがニバスに言った。

「…大変だ…」

「！？…どうしたの？」

「やられてる。」

「！？…やられてるって！？」

「…かなり長い間いたぶられてるよ。…どうして今までほっといたの？」

「！…！」

キヤトルは下を向いた

「…私が悪いの…。」

そのキヤトルの言葉にニバスがため息をついた。意味はわからないが、今、ゆっくり話を聞いている場合じゃない。

「…僕が助けに行ってくる。」

「ニバスだけで行くの！？私も行く！」

「だめだよ。天使の君が来たらややこしくなるから。」

キヤトルがニバスにそう言われ、しゅんとした。

「わかった…」

「…ここで待ってて。こっちの時間で10分に戻ってくるから。」

キャトルが涙ぐみながらうなずくと、ニバスの姿が消えた。

……

キャトルはその場に膝を抱えて座り込み、ニバスが帰ってくるのを待っていた。10分はとづくに経過している。

「ニバス…手こずってるのかな…。大丈夫かなあ…。」

キャトルはそう呟いて、膝に顔を伏せた。
その時、何かが飛んでくる気配を感じた。

「…！」

キャトルが立ち上がると、目の前に高いところから落ちたような状態で、ニバスとリュミエルが姿を現した。

ニバスの体はなんともないようだが、リュミエルの体が傷だらけになっている。羽までもボロボロになっていた。

「リュミエル…！」

キャトルが、倒れ込んだリュミエルにかぶさるようにして見た。いつもの美しい顔がかなり歪んでいる。

ニバスはその場に座り込み、息を切らして言った。

「誰にもわからなかったはずだよ。」

「どういうこと!？」

「悪魔の中でも侯爵級の悪魔に監禁されてたんだ。その上、逆さ吊りにされて斧で傷つけられて…。」

「じゃ…今までずっと!？」

「うん。よく今まで耐えられたもんだよ。」

その時、リュミエルが唸り声を上げた。

「大変！…ニバス、どうしよう…！私にはこの傷治してあげられない…」

「そうだね…。こいつ自身でも無理そうだ…」。

下級悪魔のニバスには、他人の怪我を治癒させる力は持っていない。

「このままじゃ、死んじゃう…」

キャトルが泣きだした。

その時、天使アルシェがリュミエルのオーラを察知し、血相を変えて姿を現した。

「リュミエル！！」

キャトルがアルシェに抱きついた。

「どうしよう…どうしよう…リュミエル死んじゃう…！！」
「……」

アルシェもリュミエルの姿を見て、リュミエルが危ないことを悟った。人間でいうと「重症」を超えた「重体」だ。

「…すまんリュミエル…。まさかお前がやられるなんて思ってたから…」

リュミエルは体を起こされながら、アルシェの言葉に首を振って言

った。

「マスター（圭一）には…言っていないだろうな。」

「もちろんだ。」

アルシエがそう言うと、リュミエルはほっとした表情をした。

ニバスは、いつの間にか姿を消していた。

…

天使アルシエの人間形「浅野」の自宅のベッドで、リュミエルは眠り続けていた。アルシエができる限りの気を送ったが、傷が治癒するまでにはいかなかった。

うわべに見える傷すら消えない。アルシエもベッドの下で体を横たえている。起き上がることもできなかった。

キャトルも気をあげたかった。だが、アルシエに「今、圭一君が襲われたら助ける者がいなくなるから」と言って、キャトルには何もさせなかった。

キャトルは目を指でこすりながら、リュミエルの傷ついた顔を見ていた。

突然、キャトルは驚いたように顔を上げた。

「パパ！」

それと同時に、インターホンが何度も鳴った。

キャトルはぎゅっと目を閉じた。

すると、圭一がベッドの傍に現れた。

「……リュミエル！」

圭一がリュミエルに伏せるようにして言った。

「リュミエル…リュミエル！…どうして…こんな…」

圭一が泣き出した声を聞いて、アルシェが目を覚ました。

「圭一君！どうして！？」

「…夢を…夢を見たんです。…リュミエルが…消えていく夢…」

圭一の震える声に、キャトルとアルシェは驚いた。

「リュミエル！！目を開けて…！お願い…」

圭一が泣きながら言った。

リュミエルが目を少し開いた。

「！リュミエル！」

「マスター…」

リュミエルが圭一に向いた。

「ごめん、リュミエル！気がつかなくてごめんよ…もつと早く気がついていたら…リュミエル…こんなことにならなかったのに…」

リュミエルは首を振っている。

「しっかりして…リュミエル…」

圭一が涙声でそう言った時、リュミエルの姿が消えかかっているこ

とに気付いた。

「リュミエル！？…だめだ！消えないで！！」

圭一が声を上げた。アルシエが驚いて必死に体を上げた。リュミエルの体が透けていた。

「！！くそ…！！このままじゃ本当に…」

アルシエがベッドにしがみつくようにして、立ち上がった。

「リュミエル！いいか…あきらめるな！」

「アルシエ！やっぱり私の気を…」

キャトルがそう言ったが、アルシエは首を振った。

「だめだ！天使になりたてのお前の気を使ったら、お前が死んでしまっ！」

「！！」

キャトルは泣き出して、その場に座り込んだ。

「圭一君、どいてくれ。…俺がなんとかする。」

アルシエが言った。圭一は泣きながらリュミエルから離れた。

『僕に任せて！』

「！？」

急に甲高い男の声がした。

キャトルが驚いて顔を上げた。ニバスの声だ。

その時、強い光が部屋を満たした。

そして徐々に消えていった。圭一が目をゆっくり開くと、リュミエルの姿がはつきりしたものになっていた。体の傷も消えている。

「リュミエル…良かった…！」

圭一は、リュミエルの頭を抱いた。

キャトルは辺りを探すように見渡した。

「ニバス！？ニバスどこっ！？」

「ニバス！？」

アルシエが驚いた。

「…どうしてニバスが？」

「さっきね…私も助けてもらったの…リュミエルも助けてくれたの…」

キャトルが涙ぐんでいる。

「でもね…でも…浅野に会えないって泣いてたの…」

「！？…」

アルシエはやつと気付いた。自分は完全な天使になっている。まだ天使になりたてのキャトルやリュミエルくらいなら力は弱い。

だが上級とはいえなくともアルシエほどの力があると、下級悪魔でしかないニバスは消滅する可能性がある。

ニバスはそれを恐れているのだ。

「ニバス!!」

アルシエが天井を見渡して声を上げた。ニバスは魔界から交信してきているのだ。

「ニバス!ここまで来い!」

しんとしている。キャトルも天井を見た。

「ニバス!来て!」

『だって…怖いもん…。…俊介は…もう俊介じゃないんだもん…』
「ニバス…」

アルシエは浅野に姿を変えた。

「ニバス…今の力はどうやったんだ?」

『侯爵様からもらったの…』

「もらったって…ただじゃないだろう?」

『…俊介のネックレス…あげたの…』

「!?!?…」

「ニバスっ!うそっ!あれ宝物だって…」

キャトルが思わず泣きながら言った。

『…でも…リュミエルは俊介の仲間だもん…』

「ニバス…」

『僕も俊介の仲間になりたいけど…悪魔だもん…』

浅野の目にも涙が溢れた。

「…ごめんよ…ニバス…」

「ねえ…浅野…なんとかしてあげられないの？」

「…こればかりは…」

「大天使様に頼めない？」

「いくら大天使様だって、墮天使だったリュミエルとは違って、悪魔には何もできないんだ。」

「…そんな…」

キャトルがうなだれた。黙って話を聞いていた圭一が口を開いた。

「でも、リュミエルの命を救ってくれた恩人です。…キャトル…」

キャトルが圭一に向いた。

「何？パパ」

「お前とニバスは会っても大丈夫なんだよね。」

「うん…」

「浅野さん…ネックレスの代わりになるもので…せめて何か、ニバスにあげられるものないですか？」

「！…そうだ、そう言えば…」

浅野が机の引き出しを開け、小さな赤いビロードの箱を取り出した。

「すっかり忘れてたよ。今度ニバスに会えたら、これをあげようと思ってたんだ。」

浅野は駆け寄ったキャトルに向けて、ビロードの箱を開いた。
小さな道化師の形をしたシルバーブローチだった。

「…前にニバスに助けてもらった後に、作ってもらっていたんだ。
…その後、生体を失ったりいろいろあったから、すっかりしまいこ
んだままだった…」

「これニバスに渡しに行く!!」

「ん。頼む。」

浅野が微笑んだ。そして天井に向いた。

「ニバス！今からキャトルにお前へのプレゼント持って行ってもら
うから！…受け取ってくれるかい？」

しばらくしんとしていたが…

『…ありがとう、俊介…！』

ニバスの涙声が返ってきた。

…

ニバスとキャトルは、浅野のマンションの屋上にいた。
キャトルはニバスの手に、開いたビロードの箱に乗せた。

「ねえ…その目のスカーフ取ろうよ。…見えないでしょう？」

ニバスはためらっていた。

「…だって…僕が目…汚れてるもの…僕…嘘つきなんだもん…」

ニバスは人を楽しませるのが上手な道化師なのだが、生まれつきペ
テン師の性質を持ち、自分でつく嘘をごまかすために自分の目をス

カーフで覆っているのだ。

「嘘つきでも、心は汚れてないじゃない。きっと目も綺麗だよ。ねっ。」

キャトルはそう言うと、ニバスの頭の後ろに手を回してスカーフの結び目をほど始めた。

「あっだめだって…」

ニバスはそう言ってキャトルの手を抑えようとしたが、もう取り払われてしまった。

「！！ニバスってかっこいい！！」

キャトルが思わず言った。ニバスの目は大きく、そしてサファイアのように青く光っていた。

ニバスは思わず、空いた片手で目を塞いだ。

「目を隠してどうするのっ！浅野からのプレゼント見ないの？」

ニバスはそっと手を下ろした。そしてそのサファイア色の瞳で、開いたビロードの箱の中を見た。

「僕だっ！」

ニバスが嬉しそうにブローチを手にとって言った。

「僕が…キラキラ光ってる！！」

ニバスは、月の光にかざすようにしてブローチを上に向けた。
キャトルもそのブローチと一緒に見上げて言った。

「綺麗ね…でも、ニバスの目の方が綺麗だよ！」

「ほんと？」

ニバスがキャトルに不安そうに言った。

「うん！とっても綺麗。」

ニバスは照れ臭そうにして、ブローチをもう1度見た。キャトルが言った。

「ブローチつけてあげようか？」

「ううん。箱の中に入れておく。」

「どうして？」

「僕だけが見られるようにするんだ。見せびらかすとネックレスのように取られちゃう…」

「そうか…そうね！」

ニバスはブローチを箱の中にそっと入れて蓋を閉じた。そして胸元に隠した。

「俊介にありがとう…って伝えて。」

「うん！」

「もう会えないのは寂しいけど…お話だけでもして欲しいって。」

「…うん…！」

キャトルは思わず溢れ出た涙を指で拭った。

「ありがと、キャトル。」

「お礼を言うのは私だよ。私とリュミエルを助けてくれてありがとう。」

「…うん…」

「ニバスも…浅野の仲間だからね。」

「…!」

ニバスは慌てるようにして、キャトルの手にあったスカーフを取りあげて目を覆い後ろで結んだ。涙を見られたくないのだろう。

「じゃ、ばいばい…キャトル。」

「ばいばい！ニバス！」

月に向かって飛びあがったニバスに、キャトルが手を振った。ニバスもキャトルを見下ろして手を振ると、月に向かって飛んで行った。ニバスが小さくなっていく。

キャトルは見えなくなるまで、ニバスに手を振り続けていた。

（終）

<番外編>優しき悪魔（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

「道化師の悪魔」の二バスを再登場させていただきました。この「浅野俊介」の中で、唯一、実在（？）する悪魔です。私自身で少しデフォルメしてしまいましたが、とても好きな悪魔さんです。

現在、新しい「アルシエ」を制作中です。またはじまりましたら、よろしく願いいたします（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012q/>

魔術師 浅野俊介

2011年10月8日05時08分発行